

天正十年六月二十三日

七三二

一祠堂以下非分之族申懸之事、  
右於違背之輩、速可處嚴科者也、仍而制旨如件、

天正十年六月日

信孝(花押)

〔諸國高札〕三

禁制

千壽堂

千手堂

- 一甲乙人亂妨狼藉之事、
- 一田畠立毛蒬取之事、
- 一伐採竹木之事、
- 一右條々、堅令停止訖、若違犯之輩、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正十年六月日

三七郎在判

〔岐阜縣續古文書類纂〕

四條制之部 羽柴筑前守外二名條制

所有厚見郡岐阜笹土居町 善行寺

善行寺

- 一當手軍勢甲乙人等亂妨狼藉
- 一伐採竹木事

一相懸矢錢兵糧

右條々、堅令停止訖、<sup>(十九)</sup>於違犯之輩者、<sup>(者カ)</sup>處嚴科候也、仍而下知如件、

天正〇年六月日

筑前守

五郎左衛門尉

久太郎

越中松倉城將須田滿親、書ヲ上杉景勝ニ致シ、其出兵ヲ待テ、兵ヲ動サ  
ンコトヲ告グ、

〔上杉古文書〕十五

御書謹而拜見忝奉存候、仍而當表之儀、何も御出馬相待、見合立仕牀候、隨分  
計策油斷不申候、子細之段、<sup>〇上杉年譜</sup>儀ニ作ル、富永備中守如見聞可被申上候、此等  
旨宜預御披露候、恐々謹言、

須田相模守

六月廿三日

滿親(花押)

直江與六殿 <sup>〇上杉年譜</sup>樋口ニ作ル、

二十四日、<sup>庚戌</sup>佐竹義重、誓書ヲ那須資胤、同資晴父子ニ與ヘテ之ト和ス、

天正十年六月二十四日

七三三



〔那須譜見聞錄〕

十六 御感狀寫

起請文

右意趣之、度々以證文申合、猶於向後も、不顧他、世上浮沈共資晴御父子へ無  
二可申合候事、付東之密事不可令他言候、并倭人之取成候者、則糺明可申事、  
若此文於偽者、

上者梵天帝釋四大天王○本書以下、  
神文略セリ、

天正十年六月廿四日

佐竹 義重(花押)

烏山殿

那須殿

〔那須譜見聞錄〕

一 那須系圖

資胤

○上略、佐竹、上莊等ノ兵、資胤ト戰フコ  
トニカ、ル、二月十七日ノ條ニ收ム、コ

金剛壽院  
勸和ヲ  
勸諭ナ

雖然、封内上莊衆、頻年與烏山不和、日夜攻伐、親戚朋友互耻其名、戰爭不止六  
年、於此死傷太多、金剛壽院尊瑜愛之、以諫資胤、又喻上莊士人、和議漸成矣、  
二十五日、辛神戶信孝、羽柴秀吉等、美濃、尾張ニ入り、惟任光秀ノ殘黨ヲ  
平グ、是日、秀吉、書ヲ高田長左衛門ニ與ヘテ、濃尾ノ形勢ヲ報ジ、近ク上  
洛セントスルヲ告グ、

信孝等美  
濃ニ向フ

〔兼見卿記〕

四

六月廿二日、辰也己卯、三七郎殿諸勢濃州へ下向云々、○上下略、  
全文ハ本

月十四日ノ  
條ニ收ム、

〔蓮成院記錄〕

一 略 中 諸勢坂本へ爲發向下向畢、三七殿、御茶箋様其外御一  
門之衆者、美濃尾張へ御勢被遣、美濃三人衆無別儀候由也、○下略、本書、此條  
六月十四日ノ後

美濃三人  
衆別儀ナ

〔淺野家文書〕

一 濃州之面々城を拵悉御敵を成、いな(稱)之山を之、既齋藤玄蕃助被相上候と  
いゑとも、長濱へ被越、○金井文書、長濱へ罷越、我等にいな山可被相渡  
に被極候、其外國衆之人質不殘、我等請取申候トア

齋藤玄蕃  
允長松ニ  
到リ秀吉  
ニ謁ス

リ、我等陣取申候長松へ(美濃)叱を候て、被馳向候間、一國之者共首を助申候事、  
一從其尾州に罷越、又候哉惡逆人成敗いたまへきと申候處、縱我等清須之  
御城ニ居申候へ之、國中之人質不殘、三河信濃境迄出申候間、不及是非、又

尾張衆人  
質ヲ出シ  
テ降ル

首ヲ助申候事、○上下略、秀吉、阿閉貞大ヲ誅スルコト、及ビ柴田勝家等ト  
シ、信長ノ遺領ヲ處分スルコト等ニカ、ル、本月十六日  
ノ條及ビ同二十七日ノ條ニ收ム、岡本次  
郎右衛門尉齋藤玄蕃助宛、秀吉披露狀、

〔古今消息集〕

六

書中被見候、委曲先書ニ如申聞候、五畿内江州悉屬一偏、其カ直尾濃相働、今

天正十年六月二十五日

七三五



上洛シテ  
佛事ヲ營  
マントス

高田長左  
衛門

信長ノ子  
女清洲ニ  
集リ住ス

天正十年六月二十五日

七三六

度未落居輩成敗申付、其外人質等不殘相々、兩國事は又即座相靜候、漸明隙候間、近日至長濱打入、其方令上洛、上様御佛事執行候て可歸城候、其元彌無油斷諸事氣遣尤ニ候、恐々謹言、

筑前守

秀吉判

六月廿五日

高田長左衛門殿

〔豐鑑〕 一 高松

長濱ヨ二日逗留ありて、尾張國ニ趣給へり、彼國ハ信長生を此國かれと、清洲ニ城を堅し、長谷川ウ父に守らむ給へり、おかさき子達を、爰ニ集り居給へ之也、丹羽五郎左衛門池田勝入かとも、同尾張國ニ至ぬ、○上下略、阿閉貞出ア、途ニテ殺サル、コト、及ビ柴田勝家、越中ヲ攻略シテ、清洲ニ至ルコトニカ、ル、本月十六日ノ條、及ビ同二十七日ノ條ニ收ム、

佐々成政、越中蓮花寺ニ禁制ヲ掲グ、

〔蓮華寺文書〕

中○越

蓮花寺

禁制

一 濫妨狼藉事、

一 放火之事、

一 不謂儀申懸事、

右條々、堅令停止訖、若於違犯輩者、速可處嚴科者也、

天正拾年

佐々内藏助

六月廿五日

成政(花押)

二十六日、子、壬是ヨリ先、能登石動山天平寺ノ僧徒等、京都ノ變ニ乗ジテ、故畠山氏ノ臣温井備前守、三宅備後守等ヲ招ク、温井等、上杉景勝ノ援ヲ得テ、能登ニ入り、荒山ニ城ク、七尾城主前田利家之ヲ聞キ、援ヲ柴田勝家、佐久間盛政ニ乞フ、盛政、金澤ヲ發シ、是日、荒山ヲ攻テ、温井、三宅等ヲ斬ル、利家モ亦石動山ヲ攻メテ、之ヲ平グ、

〔前田家年譜〕

○加納越古文  
叢三十八所載

態以書簡伸愚意候畢、依雖不實之義候、能州之國主温井、三宅兄弟、近年雖在越後、就信長公之儀、伺時節、語越後勢、歸國之望、衆口同音ニ申尊候、若於事實者、注進次第御加勢奉頼候、恐惶謹言、

前田又左衛門尉

天正十年六月二十六日

七三七

温井三宅  
等能登歸  
國ノ風説



天正十年六月二十六日

六月十九日

柴田修理殿

佐久間玄蕃殿人々御中

利家判

七三八

遊佐三宅  
等石動山  
ニ入リ荒  
山ニ城ク

先日申談候遊佐温井三宅昨廿三日越後勢同道仕石動山に取入近邊あら  
山と云所を要害ニ構候ゆんと今曉歟初之由申來候今明之間不去兩葉可  
用斧柯覺之候早速於御合力(奮脱力)可爲本望候恐惶謹言

前田又左衛門尉

六月廿四日

柴田修理殿

佐久間玄蕃殿

利家判

〔温故足徵〕

○加能越古文  
叢三十八所載

尙以此方ニ御入候時者未御滞留も可有与存卒早之馳走申候段一入  
御殘多存候御次手候ゆ、惟道次殿へ御心得頼入存候以上、  
遠路御使札本望至極候如仰爰許御堪忍之刻爲何馳走不申候于今御殘多

盛政一手  
ニテ荒山  
ヲ乘崩ス

存盡候(居方)然者御手前御仕合可然之由満足不過之候將又能州表之仕合之義  
被仰越候定而首尾可相聞候石動山退治之刻新山与申古城ニ温井三宅取  
籠候處拙者一手ニ而乘崩壹人も不殘ゆけまゝいニ仕候手を碎候段後々相  
聞可申候左候へ、越中表ニ敵今少相渡候間來十八日ニ令出陣見合可討  
果覺悟候早々預示候段畏入存候尙自是可申入候恐々謹言

佐玄蕃助

八月十六日

盛政(花押)

御返

〔長家記〕

○加能越古文  
叢三十八所載

今度就企逆心彼寺領悉令沒收候然者其方知行中ニも有之由候雖然重々  
御理之事候間爲新知遣之候全可知行者也仍如件

天正拾

八月廿九日

利家判

長九郎左衛門殿御宿所

〔荒山合戰記〕

能登國石動山衆徒蜂起付同所荒山合戰之事

天正十年六月二十六日

七三九

利家天平  
寺領ヲ没  
收ス



天正十年六月二十六日

七四〇

天正十年六月、能登國ニモ一揆動亂ス、其故ハ昔日織田信長ノ爲ニ、己カ所領ヲ被追出シ諸侯大夫、或ハ地頭代官莊官等、信長ノ横死ヲ聞テ、時ヲ得テ一揆ヲ企ケル、其中ニ能州ノ守護職、畠山修理大夫義則カ八臣神保安藝守正次、長九郎左衛門尉信實、温井備前守實正、三宅備後守正數長盛イ、平式部少輔盛高、遊佐河内守長員、譽田隼人正々豊、伊丹左衛門尉勝詮ト云者アリ、遊佐、温井、三宅ハ、近年長雄尾喜平次景勝ヲ頼テ越後ニアリ、又温井カ郎等ニ小南内匠助、筒井雅樂助、廣瀬隼人正、山莊藤兵衛尉、并三宅カ郎等馬藏内匠助、小山田甚五兵衛尉ナト云大剛ノ者共アリシ、然ルニ石動山ノ衆徒、并ニ彼所ノ溢者共カ方ヨリ、使ヲ越後國ヘ遣シ、遊佐、温井、三宅等カ方ヘ云送りケルハ、其地ヘモ、定テ聞エ侍リナン、當月二日、織田信長卿、明智光秀カ爲ニ、京都本能寺ニ於テ、不慮ニ討レサセ給ヒタリ、加様ノ時節急キ能州ヘ御入國候ヘシ、當山ノ衆徒等ハ不及申、國中ノ寺社鄉民モ、争カ舊好ヲハ忘レ侍ルヘキ、面々心ヲ一ツニ合力仕ルヘシト、衆儀一決ノ上ニテ、斯ハ申送侍トソ告タリケル、三人ノ輩大ニ喜悅シ、是天ノ與ル所也トテ、則同心ノ反翰ヲソ遣シケル、大衆是ニ得力、サラハ要害ヲ搆ヨ脱カト密々ニ石動山ヲ要害ニソ搆ケル、

石動山ノ衆徒遊佐温井三宅等ヲ招カ

利家援兵ヲ勝家盛政ニ乞フ

大衆ハ例大悍ナル者ナレハ、敵寄來ラハ、爰ノ詰ニテ兎コソ防キ、彼坂ニテ角コソ斬崩サントソ、兵法ニ廣言ヲ吐散シ、恩賞ノ地ニハ、何ノ郡ヲ寺領ニ受ン、彼村里ハ上田ナレハ、院家領ニセンスルナレト、未其功不成以前ヨリ、所領分シテ嘗諍ヒ、或ハ鄉民等ニモ忠節ヲナサハ、士ニナシテ所知ヲ申賜ンナト、端々口外シテ云語ヒケル程ニ、天ニ口ナシ人ヲ以テイハセヨト、此事次第ニ云廣テ、衆口防キ難クテ、國ニ披露シケレハ、遊佐、温井、三宅ノ輩、石動山ノ衆徒等ト心ヲ合セ、本國還住ノ謀ヲナシ、先石動山ニ城墉城下同シヲ搆、兵糧ヲ取入、人數ヲ催ス由聞エシカハ、能登ノ守護職前田又左衛門尉菅原利家、此事ヲ傳聞テ大ニ驚キ、吾手勢計ニテハ、大敵防キ難カルヘシトテ、越前守護職柴田修理亮勝家、并其甥佐久間玄蕃允盛政等カ方ヘ加勢ヲ請ン爲書翰ヲコソハ送りケレ、其詞ニ、

態以書翰伸愚意畢、仍雖爲不實之儀、能州之國士温井、三宅兄弟、并遊佐輩、近年越後在仕候處、聽信長卿之横死、窺時節相語於越後勢、成歸國之望之處、當國石動山衆徒等、渠令同意、彼山搆要害之由、衆口同音申鳴候、若於粹實者、注進次第御加勢奉頼存候、恐惶謹言、

天正十年六月二十六日

七四一



天正十年六月二十六日

七四二

天正十年六月十九日

前田又左衛門尉利家

柴田修理亮殿

佐久間玄蕃允殿

トソ書タリケル柴田佐久間披見シテ則返金澤城ニ居タリケルカ此告ヲ  
 聞ト等ク勝家ノ方ヘモ委細ヲ注進シ不待其左右シテ二千五百餘兵ヲ引  
 卒シ能登國ニ馳向ヒ高島ト云所ニ野陣ヲ取テソ控タル温井三宅遊佐ノ  
 三大將ハ石動山般若院快存大宮坊火宮坊大和坊覺笑等ヲ相語ヒ都合其  
 勢四千三百餘人荒山要害普請ノ爲出張シタル處ニ宅○太閤記ニハ温井三  
 此使僧所願之幸也及運々○其沙汰廣く成行不意を討ん便も宜しうは  
 ましいざさらは急き入國せんとて景勝より合力勢を申請三千餘之勢を  
 催し船ヲ取乗おし出計上著し衆徒等あひぬトアリマタ前掲前田家  
 田利家書狀六月廿四日附前玄蕃允取掛テ相戦ントシケレ氏前田利家息利  
 政等カ方へ出陣ノ事ヲ告タリシ返翰ヲ待シ程ニ其日ハ既ニ晚景ニ及ヒ  
 シカハ徒ニ日ヲ暮シ其近邊ノ莊官並溢者共ヲ尋出シ石動山ノ様牀ヲ尋  
 ケルニ彼輩答ケルハ越後國ノ軍兵共ハ荒山ヲ城墾ニ構ントテ明朝モ普  
 請ノ爲此邊ノ郷民等ヲ雇ヘシト相觸候明朝御出張候ハンニハ某共御道

盛政能登  
ニ出陣ス

利家モ兵  
ヲ出ス

盛政荒山  
ヲ攻ム

指南仕ルヘシト申ケル玄蕃允ハ大悅彼等ニ引出物シ二心アラント拜  
 郷五左衛門尉ヲ奉行トノ起請文ヲ書セケリ其後山路ノ行程□アルヘキ  
 ト尋ケルニ石動山マテハ其道五里荒山マテハ三里ニ餘リ候ヘシト答ケ  
 リ去ハ急キ可打立トテ其夜半過ニ悉用意シ件ノ案内者ニ守護ノ番兵ヲ  
 差副奴原ニ目ヲ放チ汕斷スヘカラスト潜ニ申合先陣ニ押立未夜ノホノ  
 暗ニ荒山ヨリ五六町程北方ナル坂ノ邊ニ馳差テ先斥ノ兵ヲ遣敵ノ様子  
 ヲ窺ヒケリ又前田利家モ究竟ノ兵二千六百餘人ヲ撰出シ同日ノ夜半ニ  
 七尾城ヲ打出石動山ト荒山トノ境ナル柴峠ト云所ニ陣取テ扣ヘケリ爰  
 ニ温井三宅遊佐カ軍兵四千三百餘人ハ荒山ノ普請セント出張シタリ  
 前田利家ハ備ヲ立温井三宅等カ先陣ノ勢ニ向テ関ヲ瞳ト作テ馳掛ケリ  
 温井モ三宅モ平場ノ軍不叶トヤ思ヒケン三千餘人ヲ引連テ荒山ノ要害  
 へ取上ル其外遊佐以下ノ軍勢二千餘人ハ石動山へ逃上ル斯處ニ佐久間  
 盛政カ斥候ノ者立歸テ越後勢ト覺テ二千計荒山ノ要害へ楯籠タル由告  
 タリケリ盛政聞之去ハ兵ヲ進テ彼要害ヲ責破ント旗ヲ進若石動山ヨリ  
 加勢スル叟モ有ヘケレハ其勢ヲ防トテ拜郷五左衛門尉ニ軍兵ヲ差副石

天正十年六月二十六日

七四三



天正十年六月二十六日

七四四

般若院某

動山衆徒ノ押トシ、倍荒山ノ先軍ニ上田又作、種村三郎四郎以下押寄、金鼓ヲ鳴シ、貝吹立、山川モ崩計ニ時(圖下同シ)ノ聲ヲソ揚タリケル、城中ニハ温井備前守、三宅備後守、山莊藤兵衛尉、筒井雅樂助、小山田甚五兵衛、廣瀬隼人、鳥藏内匠、並般若院、大宮坊、火宮坊、其外越後ノ加勢、國中ノ溢者相雜リ、同時ヲ合セ、四方ニ目ヲ賦テ、喚叫テ戰ヒケリ、鳥銃累ニ發シ、貫鎧摧冑、寄手ハ是ヲ事ヒセ、死人ノ上ヲ乗越々々責上ル、荒山ノ軍兵等太刀ヲ拔テ、防キケリ、爰ニ般若院ハ三〇太閤記ニ、行年三十八トアリ、大剛ノ惡僧ニテ、度々ノ合戰ニ名ヲ顯シタル兵ナレハ、其頃ノ俗異名ヲ付テ、今弁慶トソ申ケル、誠ニ諸人ニ勝レ、色黒ク、長ハ六尺三寸、骨太、頬車荒テ、力モ強カリケルカ、指物ニハ、鍬、鎌、熊手、鋸、槌、鉈、齧等ノ七ツ物取付、武具モ亦上ヨリ下マテ、眞黒ニ出立タレハ、牛驚程ナルカ、大長刀ヲ水車ニ廻、小躍シ、走掛、左右拂前後ヲ薙テ、巡タルニ、面ニ進ンタル兵、兵忽七八人薙倒シ、佐久間カ軍兵辟易ノ、後足踏テ不得進、般若院ハ敵ヲ坂下ヘ追下、小高所ニ立跨坐、歌謠テ掛敵ヲ待居タリ、玄蕃允是ヲ見テ、加様ノ敵ヲハ、射手ヲ揃テ射噤、打物ノ衆ヲ進セヨト下知シケレハ、足輕ノ射手共大勢立、双テ、般若院ヲ雨ノ降カ如クニ射タリケリ、寄手モ是得力、吾先々

越後勢先  
ツ退ク

々ト進ンテ、曳々聲ヲ出シテ、斬合、引組々々討モ有、敵モ味方モ死ヲ忘、爰ヲ先途ト戰ヒシカハ、手負死人骸ヨリ、溢血ハ、坂ヨリ下迄瀧鳴テ流レタレハ、江河ヲ渡ニ不異、斯處ニ種村三郎四郎カ郎等杉足立イ九郎左衛門尉、富田勘四郎、并能州ノ住人鈴木因幡守、高河原一學等、横合ヨリ突掛リ、忽七八人突伏タリ、越後勢中ニ臆病ノ弱敵、此形勢ヲ見テ、不叶トヤ思ヒケン、吾々ハ引退テ、石動山ノ敵ヲ防ント云程コソ有ケレ、後ヨリ五人十人打連々々引退トツ見エシ、殘勢モ落心ヤ付タリケン、一太刀打テハ引退、二太刀打テハ引上リ、佐久間盛政乘氣、敵ハ堪兼逃眼ニ成タルソ、息ナ繼セソ、責ヨ懸ヨト下知シツ、眞先掛テ責上ル、南方ヲ防ケル城中ノ軍兵、暫ク支テ戰ケルカ、是モ備散靡タリ、温井、三宅ハ、大音揚テ、蓬人々ノ働キ哉、温井、三宅兄弟最期ノ軍ノ見參ニ入ンスルソ、責テハ暫ク留テ見物シ玉ヘ人々ト詈掛、馳掛々々散々ニ戰ヒケリ、元來究竟ノ強兵ナレハ、立所五三人斬倒シ、仰タル太刀ヲ押直サントスル處ヲ、吉川五右衛門尉得タリヤ賢ト渡合、火花ヲ散テ、斬合ケルカ、温井勢力ヤ疲ケン、終ニ吉川ニコソ討レケレ、三宅備後守ハ、長刀ノ名人ニテ、大勢ニ渡合、込手開手、裁ツ掛ツ突ツ斬ツ、蜻蛉返水車、八方不透斬

温井備前  
守討死ス

天正十年六月二十六日

七四五







盛政温井  
等ノ首ヲ  
利家ニ送  
ル

利家石動  
山ヲ攻ム

利家不意  
ヲ襲フ

梅尾善次  
郎

天正十年六月二十六日

七四八

人カ首共、野村勘兵衛尉ニ取持セ、前田利家カ方へ送シカハ、又左衛門尉ハ  
大ニ悦ヒ、盛政ノ働キ莫大ナリト感心シ、様々ノ謝禮ヲ盡シ、使者ニモ則村  
政ノ刀ヲ引タリケリ、

能州石動山軍、付石動山燒失事

能州石動山へハ、前田又左衛門尉利家軍兵ヲ引卒シ、天正十年六月廿六日  
ノ未明ニ押寄タリ、先陣ハ高畑石見守、大行院ノ東谷ヨリ責上ル、前田利家  
ハ、二王門ノ方ヨリ大手ニ被向、相從侍大將ニハ、長九郎左衛門尉信實、奥村  
伊與守、同孫助、小塚淡路守以下、都合其勢三千餘人、石動山ニ押寄タリ、折節  
朝霧大ニ降テ、咫尺ヲ見事アタハサリシ大衆ハ、敵是程火急ニ寄ヘシト思  
ハサリシカハ、越後勢ハ、長途ノ疲倦ントテ朝寢シ、未起モ上サリケリ、又石  
動山ノ衆徒共ハ、當山榮久ノ護摩、并利家調伏ノ祈禱シテ、緩々トシテ居タ  
リケレハ、遠見ノ兵ヲモ不出故ニ、利家ノ軍兵共、安々ト山マテ攻上リ、鐵炮  
ヲ放シ時ヲ作ハ、大衆モ武士モ大ニ驚キ色ヲ變シ、途ニ迷、若大衆ノ氣早ナ  
ルハ、武具著眼ノナカリシカハ、徒肌ノマ、ニテ、褌衫ノ袖ヲ結ンテ肩ニ掛、  
散々ニ斬合タリ、高畑カ先手梅尾○太閤記、梅野ニ作ル善次郎、今日ノ先登ト名乗テ

一番ニ進ンタリ、利家ノ小性丸尾又五郎、富田助之丞、雜賀金藏等ハ弓手ノ  
脇ヨリ進テ突テ掛ル、城中ノ軍兵共大勢出合、鎗襖ヲ作テ突掛リシカハ、梅  
尾突崩サレテ引退ク處ニ、丸尾、富田、雜賀等、得タリヤ逢ト助タリケルカ、雜  
賀、富田ハ鐵炮ニ當テ討レタリ、梅尾ハ取テ返シケルニ、遊佐孫太郎カ若黨  
白井隼人ト名乗テ突出テ戰ヒケルカ、不叶トヤ思ヒケン、大行院ノ門ノ内  
へ引入タリ、寄手是ヲ見テ、初白井隼人ト名乗ツルハ、何國へ逃行ケルソ、蓬  
シ返テ勝負セヨト詈處ニ、早田主膳ト云者三間柄ノ鎗ヲ取テ、梅尾ニ突テ  
掛、火出ル程ソ戰ヒケル、然ル處ニ丸尾又五郎、横鎗ヲ入テ助タリシカハ、早  
田終ニ梅尾善次郎ニ討レケリ、利家ノ軍兵共、吾モ々々ト進ケリ、中ニモ長  
九郎左衛門尉ハ、此山案内ヲハ能知タリ、四方ヨリ込入テ、遊佐河内守ヲ生  
捕ニセヨヤトテ、軍兵ヲ進ケリ、爰ニ如何シタリケン、利家ノ兒小性篠原出  
羽守、其頃ハ勘六トテ十七歳ニナリケル、初（テ脱カ）トシテ、小塚八左衛門尉、寺岡兵  
右衛門尉、三人一番ニ責入テ、散々ニ相戰、皆敵ノ首討取テ、猶爰ヲ先途ト責  
タリケリ、斯處成就院ノ小相模、大宮坊ノ飛驒、法幢坊ノ同宿中記ト云ル惡  
僧共、數十人坂中ニ下塞テ、石動山ノ大衆等カ拜斬ニ解脱セヨト、廣言吐テ

天正十年六月二十六日

七四九



天正十年六月二十六日

七五〇

死狂ニソ働ケル、其中ニモ長七尺許ノ法師、坂ノ上ヨリ敵兵ヲ見下、大長刀ノ二間許有テ、鎗カト覺ル許ナルヲ、手本短ク押取延、實乘坊ノ荒讀岐忠快ト名乗テ、簀ヲ以テ庭ヲ掃カ如ク薙タテタルニ、寄手ノ先陣切立ラレテ、四度路ニナリ、逃眼ヲ作、後足踏タル處ニ、寄手ノ中ヨリ銃炮ヲ以テ、僅七八間カ程ニテ、雷ノ落ルカ如ク放タレハ、響ニ應テ忠快カ胸板ヲ打貫、後ニ扣タル陽俊坊カ同宿本宰相カ真中ニ中シカハ、二人共ニ弓手妻手ヘ倒タリ、笠間義兵衛尉走り掛テ、忠快カ首ヲハ捕タリケリ、其外ノ惡僧共此所ニテ大勢討死シタリケレハ、衆徒ハ引退テ二王門ヲ差堅、此所ニテ防キケリ、寄手ハ彌氣乘、勝鼓討テ時ノ聲ヲ作懸々々、唯一時ニ揉落ント汗水ニ成ツテ責タリケル、前田利家ハ、伊賀ノ倫組トテ五十餘人扶持シ置シカ、彼輩ヲ招テ、今敵軍スル體ヲ見ルニ、物ノ用ニモ可立程ノ者ハ、打出テ合戦スルト覺エタレハ、坊々院々ニ墓々シキ人ハ有マシキノ、汝等忍入テ、院々坊々ニ火ヲ放テ燒立、少々老法師、小法師原中ニ敵對スル者ヲハ斬テモ捨ヨ、去程ナラハ一人モ不殘逃失ナン、衆徒等坊中ノ火ヲ見ハ、敵早攻入タルハトテ途ヲ失ヒ、敗軍スルヲ疑ナシト下知シケレバ、畏候トテ、院々坊々ヘ忍入テ窺ヒ

ミルニ、案ノ如ク手ニ可立人ハナシ、小法師原ノ少々殘タルヲ追散シ、十餘ヶ所ニ火ヲ掛タリ、去程ニ黑煙リ覆天、折節魔風頻ニ扇テ、院々ヨリ諸堂ニ吹掛タレハ、感陽三月ノ火ヲ一日ニ合セタル歟ト覺エテ、夥シ、寄手ハ彌氣ニ乘喚叫テ責掛、利家白旆ヲ打振々々、進ヤ々々、敵ニ息繼スナト、自真前ニ進タレハ、家ノ子郎從主ヲカハヒ、馬ノ前ニ馳塞々々、死ヲ爭テ攻シカハ、流石ノ惡僧溢者共モ、後ノ火ニ途ヲ失ヒ、手足モナユル心チメ、防難ク思ヒケレハ、本堂差テ引退ク、是ヲ無云甲斐トヤ思ヒケン、阿彌陀院ノ律師俊慶、圓滿院ノ天狗坊、松月坊忠格、大宮坊ノ飛驒、金藏院ノ中將以下、究竟ノ若大衆三十餘人、武具ノ上ニ白衣ヲ著シ、タスキ掛、一様ニ長刀ヲ持テ、二王門ヨリ内少シ窄キ所ニ待受テ、東西ニ開合セ、南北ニ追靡、卷ツ被卷ツ、曳聲ヲ出メ、戰タリ、道ハ狭シ、寄手大勢ト雖モ、脇ヨリ廻テ可進様モナシ、唯童部ノ駒取スルカ如ク、順ニ双テ支タレバ、面ニ立タル者計コソ合戦ヲハシケレ、後陣ノ大勢ハ徒ニ見上、見物ノソ扣ケル、寄手鏝ヲ傾身ヲ不惜メ、込入ハ、大衆長刀ヲ揃命ヲ捨テ追出ス、追出セハ、込入、々々ハ追出シ、七八度カ程揉合タレハ、敵モ味方モ討ル、者其數ヲ知サリケリ、流血ハ混々トシテ白石忽紅ニ

天正十年六月二十六日

七五一



天正十年六月二十六日

七五二

變シケレハ、火ノ丸カセニ不異、青苔朱ニ染ナシ、死骸積テ壘々タレハ、無慙ト云モ餘リアリ、似合ヌ僧ノ任俠シテ、衆徒モ大勢討死シ、武士ヲモ多減シケル罪業ノ程コソ薄情ケレ、寄手ハ多ク討レタレハ、大勢ナレハ、勢モ不透、荒手ヲ入替々々責ル、大衆ハ小勢ナレハ、面ニ立タル惡僧等モ、次第々々勢力疲、手疵餘多蒙テ討ル、者多カリシカハ、一太刀打テハ引上リ、二太刀討テハ引退ク、寄手ハ彌乘氣飽上ニ責重ル、爰ニ大行院ノ東谷ヲ防キケル遊佐河内守、并ニ越後勢等モ、高畑石見守ニ打負、心細ク思フ所ニ、山中ハ悉ク燒立タリ、大手ノ大將温井、三宅兄弟モ討死シ、大衆等モ二王門ノ軍ニ皆被討取タリト聞エシカハ、其實ヤラン、又敵ノ謀ニヤアルラン、實否ヲ極ント軍使ヲ遣ントスル處ニ、軍兵共ハ此左右ヲ聞テ、元來落心ノ付タル者共ナレハ、ナシカハ少モ怵ヘキ、吾先々々ト四角八方ヘ逃散ケリ、遊佐モ彼勢ニ被引立、彼ヲ捨テ落行タレハ、能州ノ一揆トモ、暫時ノ間ニ滅亡ケリ、○大關一物頭分の首廿三、柴田修理亮へ持せはらひし、今度御加勢大慶之旨、抑此石動山天平寺ト申ハ、人王四十四代元正天皇ノ御宇、養老元丁巳年、泰澄法師ノ建立ニテ、人王三十九代天智(天皇脫カ)ノ勅願所也、佛法修行ノ業ヲコソ專ラトス

遊佐河内守逃亡ス

石動山衆徒ノ状態

ヘキ事ナルニ、延曆寺根來寺等ノ大衆等カ、佛法ノ奥儀深理ヲ忘却シ、武藝ヲ業ト心得タルヲ、天平寺ノ小法師原モ羨敷事ニ思ヒ、任俠ヲ家業トシ、山ヲモ身ヲモ滅シケル惡業ノ程コソ拙ケレ、去ハ今何故ニ石動山ノ大衆等ハ、一揆ヲ企ルヤト尋ルニ、織田信長在世ノ時、佞僧賣子ノ諸出家等カ、蛛網ノ術ヲ巧ニシテ、武運長久ハ敵ノ刀刃段々壞ノ功力ニアリ、且後生善所ノ望アリ、天下ノ治亂ハ振鈴ノ響ニ應ス、合戦ノ勝負ハ錫杖ノ靡ニ順フ、安鎮國家ノ法刀爭カ貴サランヤト、檀越ヲ誑ス、愚魯短才ノ守護國司ハ、己カ武勇ヲ脇ニナシ、出家ノ祈禱數珠ノ音ヲ合戦ノ雌雄ニ掛、大莊大郡ヲ寄進シテ、味方ノ助トスル故ニ、僧モ社人モ、吾法式ヲ執失ヒ、明テモ暮テモ弓箭ヲ專ニ嗜、兵術俗義ヲ宗トシテ、常ニ合戦ヲ心トセリ、去ハ一犬誤テ虛ヲ吠トキハ、万犬實ト傳フト云ハ、今ノ世ノ出家ナルヘシ、斯ル不實ノ出家ヲコソ、天魔破旬トハ云ナンメレ、害有テ益ナシトテ、寺領ノ多キ寺々ヲハ、能程ニ減少シテ、其國々ノ侍カ恩賞ノ地ニソ被行ケル、去ハ此石動山モ、高五千貫ノ寺領ナリシヲ、信長是ヲ沒收シテ、千貫ノ地ヲ賜ヘラレシ、大衆是ヲ憤、本領ヲ安堵セントテ、斯一揆ヲ企テ、大衆モ多被討取、寺院悉ク燒亡シ、伽藍一

信長寺領ヲ減少ス

天正十年六月二十六日

七五三



宇モ殘ラサリシ誠ニ衆徒ノ我慢放逸ハ則天魔ノ所行ニヤト淺猿カリシ事共也○太閤記

〔加賀前田家譜〕

利家事跡

利家既ニ軍ヲ旋シ急ニ光秀ヲ討ント議シ將士

ヲ高松ニ屯集シ自ラ百餘騎ヲ從ヘ尾山ニ詣リ佐久間盛政ニ説クニ復讐ノ義ヲ以テス盛政浮世ノ常ト云テ之ヲ拒ム將ニ北莊ニ赴キ柴田勝家ヲ促シ與ニ南上セントシ小松ニ抵ル謀者變ヲ告ケ曰石動山ノ僧徒亂ニ乘シ密ニ温井景隆三宅長盛二賊ヲ招キ亂ヲ作ントスト利家即チ七尾ニ還リ僧徒ヲ召シ責テ曰ク汝等浮屠ノ徒ヲ以テ何爲ソ猓狷スル乃チ爾ル前監叡嶽ニ在リ若シ改圖セスンハ余レ兵ヲ遣ハシ一山ヲ夷滅シテ噍類無ラシメン汝悔ルモ及フ靡ケント僧徒震恐シテ誓書ヲ奉ケ宥サレンヲ請フ乃チ之ヲ赦ス僧中猶執迷シテ悛タメサル者アリ衆ヲ脅シ二賊ヲ招ク二賊大ニ喜ヒ兵ヲ景勝ニ乞フ景勝其將小南内匠筒井雅樂助等ヲノ兵三千ヲ發シ二賊ヲ助ケシム二將等軍艦ニ乘リ妻良港ニ抵ル廿三日石動山ニ入ル廿四日軍ヲ荒山ニ出シ弓銃ヲ具ヘ塹壘ヲ築ク成ルニ垂ントノ日已ニ晡ル期スルニ詰旦ヲ以テ軍ヲ徙サントス利家警ヲ聞キ大ニ怒リ急

利家光秀討伐ノ説ク

景勝小南内匠等ヲ遣シテ温井等ヲ援ケシム

ニ之ヲ擊ント欲ス麾下ノ將士多ク府中ニ在ヲ以テ大舉スル能ハス因テ書ヲ佐久間盛政ニ貽リ賊ヲ夾擊セント請フ盛政兵二千五百ヲ發シテ高島ニ至ル利家蓐食シテ七尾ヲ發ス廿五日黎明芝嶺ニ至ル賊衆ノ荒山ニ赴クニ遇フ利家左右ヲ麾シテ之ヲ擊ツ賊潰ヘ走ル景隆長盛荒山ニ入ル盛政三尾路ヨリ之ヲ攻ム賊支ル能ハスシテ皆首ヲ授ク吾カ先鋒高島定吉東谷ヨリ石動山ニ薄ル長連龍村井長頼奥村永福仁王門ヨリ進ム賊將遊佐某僧徒ヲ悉シテ之ヲ拒ム梅野善次郎篠原一孝小塚八右衛門富田助三等衆ニ先ツテ之ヲ衝キ直ニ數十人ヲ殪ス全軍之ニ乘ル連龍人ヲシテ火ヲ縱タシム賊大ニ潰走シ崖谷ニ轉墜シテ死スル者算ナシ利家令シテ曰ク巨魁ヲ殲ノ足レリ脅從ハ誅スル勿レト因リテ脱カ以テ死ヲ脱ルモノ甚タ多シ盛政ノ荒山ヲ拔ヤ遽カニ異圖ヲ生シ我後ヲ襲ヒ賊ト夾ミ擊チ能登ヲ奪ワント欲ス山上ノ烟燄天ニ漲ルヲ望ンテ賊ノ已ニ殲ルヲ知り因テ景隆長盛以下ノ首ヲ送リ戰捷ヲ賀ス利家悉ク賊ヲ誅シ山門外ニ梟ス凡ソ千餘級五社權現ヲ伊影山ニ遷シ脅從ノ罪ヲ宥ス僧徒感泣シ復タ敢テ背畔セス○上略

盛政異圖ヲ生シ利家ヲ討タノ説

五社權現



〔前田創業記〕

上

○上略、盛政、荒山ヲ攻メ、利家、石動ヲ攻ム、此、叱佐久間盛

井津木淨  
定温井等  
ヲ援ケン  
サトシテ  
果

政、欲躡公之跡進石動山、爲援兵攝公軍、急擊滅奪能州、而頃之備窺視體勢、叱  
見天平寺煙、知其敗潰、而忽變害心、馳使獻景隆、長盛及山庄藤兵衛、筒井雅樂  
般若院首五於公、而和順、公素知盛政狼戾之心、不敢以情、嚴軍備、因感長連龍  
之速焚寺院曰、依卿之武功、盛政暴虐輟云々、此時井津木彈正淨定、受景勝之  
命、卒數千人、乘船雖到越中阿無屋嶋、欲救援景隆、長盛、聞合戰已敗、而歸越後、  
公命諸士梟景隆、長盛、般若院、寶宣坊、万藏院首於大芝峠、爲懲末代僧徒之惡  
道、移五社權現於伊影山、以書數條、督責石動山後昆、因此僧徒悔昨非、而捧連  
署盟書、夏々不縱意所如、夔々齊慄、後至慶長二年七月十日、移權現於本山、

〔寛永諸家系圖傳〕

百四

堀田正秀

新右衛門尉、乃、ち、帶刀、あり、

能登の畠山義則没

落のとき、その家老温井備前守、三宅備後守のうれて越後よゆき、景勝所よ  
寓居せ、こら赴へよ、織田信長柴田勝家をつらひし、越前を守らしむ、前田利  
家を能登よあり、信長死して乃ちよ、能州石動山の僧徒、潛よ人を越後よは  
うひし、温井、三宅をよひよせよ、内應せ、温井、三宅、兵を景勝よ借よ、石動山よ  
いよふ、利家加勢を柴田よこふ、柴田の姪佐久間玄蕃允よ、加賀よあり、則二

堀田正秀  
三宅ヲ斬  
ル

千五百人を率し、石動山よいより戦ひ敗る、温井討死よ、三宅長刀をふ  
りて數人をころせ、正秀大よ呼いとみ戦ひ、鎌鏑をもつよ、三宅をつき堂を  
し、乃首をきふ、時よ天正十年六月二十四日、

〔村井重頼覺書〕

村井豊後守所々手柄共之事

一同拾年

三十七ニノ、能登石動山利家公御、ゼ、ノ、時、一、番、ニ、せ、め、入、手、柄、之、事、

〔祕笈叢書〕

加能越古文、叢三十八所載

今度太閤記出來仕由ニ御座候、然者私義も御座候、由承候處、存之外相  
違仕候間、長々敷書付指上申候義、如何ニ奉存候へ共、前後之儀不申上  
候へ、私手前相違の所相聞え不申候間、乍恐一書を以申上候、

笠間儀兵  
衛ノ働キ

一先年大納言様と佐々内藏助殿と御取合之刻、七尾之城、前田五郎兵衛殿

御預候て御座候、然者能州勝山ヲ、越中ヨ取出、袋隼人持被申候處、其

刻七尾ニ御入候衆、中川宗半、小塚權大夫、伊藤長意、ちよて御座候間、此

衆と播磨守相談被申、勝山ヨ手遣可仕と被申候處、宗半御人數ハ、石動

通ヨ荒山口へ被遣候間、殘る三人小塚權大夫、伊藤長意、播磨守、勝山ヨ手

遣被仕候日ハ、失念仕候、月ハ其年之九月ヨと奉存候、双方ふとこ而立



石動ニテ  
手實ノ首  
ヲ捕ルナ

合、鍵合申候、其方てき人数引取城中に入可申と仕候處、此方取付申候  
て、付入ニ本丸木戸きまて付申候、然處ニ大手門口ニ二三間許下まで、  
てき壹人、私鍵付申候處ニ、其仁返し、山の平ニ腰ヲかけ、私と鍵合申候内  
ニ、（通書） 泣いててきるまゝ返し、我等の壹人ニ而御座候故、鍵手ニヶ所おい  
つきふせらる候處ニ、又立上りかゝり可申と仕候内ニ、てき本丸に取入  
申候、其後承候へ、我等と鍵合申てき、むろの孫助と申者之由ニ御座  
候、其以後長如庵御代ニ、越中右孫助被召寄、御抱置候て、今ニ九郎左衛  
門殿ニ罷有候由ニ御座候間、孫助只今ニも被召出、御尋被爲成候者、其刻  
私とらきの體、又と手前之かせき、一々可申上と奉存候、其時此孫助  
返し不申候者、無異儀、勝山のりこ申とつニ御座候、孫助返し申候刻、右  
ニ如申上候、つゝいて返し申候内、石黒采女、皆川傳内と申者之由、近  
年承申候、其後右傳内、越中富山之町に引籠居申候ヲ、殿様の石黒采女、  
勝山之次第御物語申上候へ、右之傳内被召出、高岡御多屋之御番と  
被仰付候様ニ承及申候、加様ニ私と鍵合申候てき方相手共、御家中へ罷  
越存命ニて罷有申候、か様ニ懽成儀と申、太閤記ニ書入不申候、石動山

ドトアル  
ハ不審ナ  
リ

一ヶ所之儀を、手おいのくびかと取申候と書入申候義、ふしんニ奉存候  
間、たせやの口ヲ以書入申候ヲ、太閤記作申候仁ニ被爲成御尋被下候者  
忝可奉存候、加州之義、不存候、能州ニ而大納言様御手遣之分、私不存候  
所の一ヶ所も無御座候、右勝山ふもどこて、播磨守家來之内、長崎藤藏、宇  
野勝左衛門、平井彌六と申者、いつをも申かから手前よく御座候、  
右彌六の則打死仕候、此外三頭之内ニ、手おい打死御座候へ共、左様之儀  
共書え、るし申候へ、彌事長ク罷成申候間、先あらかゝ申上候御事、  
一石動山一卷之儀、私存之通、大形書付指上申候、大納言様能州御入國以後、  
越後舟ニ而ぬくい、とやけ兩大將、石動山に上り被申候ヲ御せめ被成  
候、然者石動山、大手口少東の谷を、又てき一かまへうめ持申候ヲ、高  
島石見殿（通書）も、今ノ富田善左衛門親富田與五郎與力御座候て、人持之内ニ  
て御座候間、右石見殿と一所ニ二頭被仰付、右之谷ヲせめ上り申候、然者  
石見殿、與五郎せめ口やふを候へ、大手口のうしろへおしこ申候間、  
大手口御手間入不申候間、石見殿、與五郎せめ口よてかせき申候者共、  
以來手柄ニ罷成と、心懸申候者共、石見殿、與五郎せめ口へ付申候處



天正十年六月二十六日

七六〇

こ存之外てきふまこたへ、半時許鍵合候て、互こてき身方鏑のまやくひ  
 ヲ引やい申候てやふを不申候故御馬廻之内、雜賀金藏、富田助三、田中久  
 右衛門なども、此口ヲ心懸罷越、三人之内、右金藏、助三兩人ハ打死仕候、然  
 處ニ、私居申候所ハ少西の方にて、てき三人ヲ平右馬壹人相手ニ罷成、つ  
 き合申候間、平右馬うたせ申事かんきニ奉存、私手前之かせき打捨、平右  
 馬すけ申候て、右之内壹人相打ニ打取申候、其首我等ニかゝつけくれ申  
 候へ共、大納言様懸御目申候刻ハ、平右馬と相打ニ仕候由申上候へハ、手  
 柄仕候由被爲成御意候、其上大手口石見殿、與五郎せめ口兩所、大納言様  
 御目の下ニ被成御覽候間、右ニ如申上候、石見殿、與五郎せめ口、やふを不  
 申候ニ付、大納言様御下知よて、ときを作りかけ候て、可責懸之旨御諚ニ  
 付、則ときを作りつきかゝり候へハ、無異儀のりくつし申候、か様こそを  
 かほしき大納言様御目ノ前之御合戰場ニ而御座候間、中ノ手おいの  
 首ちと取申所にて無御座候、其時の御合戦ニあい申候者共、てき身方御  
 家中ニ未多ク可有御座候間、被爲成御尋候者、私偽り不申上候通ハ、體ニ  
 相聞へ可申候御事、

一 今度出来仕候太閤記相違之儀、一書よて申上候御事、

一 石動山御合戦ハ七月廿六日ニ而御座候ニ、太閤記ニハ六月廿六日と  
御座候、是一ヶ月相違仕候御事、

一 右ニ申上候富田善左衛門親富田與五郎、高島石見殿、一所之口へ被仰  
付候ニ、與五郎義一切書入不申、相違之御事、

一 私古傍輩伊坂猪左衛門と申者、私と一所ハ石見殿口へ罷越、みやけ家  
來能首ヲ取申候、此義一切書入不申、相違之御事、

一 私手前之儀、一切無御座義ヲ書入相違之御事、  
右五ヶ條<sup>(同)</sup>皆々相違之儀ニ御座候御事、

一 大納言様關東八王寺御せめ被爲成候刻、二之丸にて首一ツ、本丸ニ而首  
一ツ、以上貳ツ高名仕、大納言様、同古肥前様、御一所ニ被成御座候所にて、

懸御目申候、手柄ヲ仕候と御意被成候、是ハ惣ち之の義ニ御座候、併大納  
言様御之さきにて、折ノ無油斷かせき仕候通可申上ため、如此御座  
候御事、  
○利家、八王寺ヲ攻ムルコト、十  
八年六月二十三日ノ條ニ見ユ、

一 大納言様越前府中ニ被成御座候時分、盗人あまゝ申合、御藏あいかきヲ

天正十年六月二十六日

七六一



天正十年六月二十六日

七六二

いふし、御藏米過分二ぬすミ取申候處ニ、御穿鑿被爲成候へハ、盜人共大形を申ニ付、奥村源左衛門殿御親父彌左衛門殿御おんミつの爲御使と、我等宇野久助と申者兩人ニ、右盜人同類ニて候間、石崎平右衛門と申者からめ取可指上之旨御意ニ付、御横目として木村久三郎、後土佐と申候、同原田又右衛門、兩人檢使ニ御出し被成候處ニ、無異義からめ取指上候へハ、手柄ヲ仕候由御意ニ而、富田治部左衛門取次ヨて、御褒美として鳥目拜領仕候、其首尾古傍輩共能存知申御事ニ御座候、

一大納言様能州七尾ニ被成御座候時、御馬廻之内渡邊仁右衛門と申者、條々不相届儀御座候由ニ付而、播磨守與力頭山田源十郎、小塚淡路守、我等躰以上五人、打手ニ被仰付候間、相殘衆へ理申、一ノ太刀ヲ我等仕候處ニ、手柄ヲ仕候と御意ヨて、御前ニ五人ノ者共被召出、御褒美として、仁右衛門のしつけの脇指、刀、馬くら、家内共ニ不殘五人ニ被下候、是又古傍輩トも存候、

右加様之儀共ホと、いらさる義申上候様ニ可被思召候へ共、加様之御次而幸と奉存、折ハ大納言様ニ御奉公申上候義共、中納言様御耳ニ立申

度奉存申上候、第一ニハ太閤記ニ、私手前相違之段書入申義、石動山御合戰場ニ有合申仁、たきやの物語を以書入申候哉、御尋被爲成被下候者忝可奉存候、私年罷寄、いらさる儀ト可被思召候へ共、子共のためヨても御座候間、如此御座候、御次而を以、御前ニ被仰上被下候者忝可奉存候、恐惶謹言、

寛永拾四年

笠間儀兵衛

壬三月廿六日

判

奥村因幡守様

温井三宅  
等三百許  
スニテ歸國

一 古老紀談云、此書、能登鹿嶋郡在江村、七尾面々衆之内、温井殿、三宅殿當榮林寺傳來古卷物也、國へ歸り參申度トて、舟三艘ニ三百許モようし、越中めらへ付被申候、石動山とんノやいん頼被申候所ニ、早速同心仕、かいかハ茂からし、まんさんノえゆたう、たハんノくハと申テうノぎ所ニあつめ、とんノやいん被申候ハ、ぬハくハい殿、三宅殿、名々を頼國へ歸參申度トの望故、大納言様へハむハんノの企候間、一身ニ可有やトの事ニ候、えゆたう中ニ如何思安仕候へ共、とんノやいんハせハひと被申候故、不叶道心申候、何角其あいハ十四五日も相延申内ニ、

天正十年六月二十六日

七六三



天正十年六月二十六日

七六四

石動山ノ  
大將

大納言様ハ信長様へ言上有之候へハ、越前加賀能登越中四ヶ國之人數ヲ被仰付候、石動山ニもぞうひやう壹万人許と相見へ申候、ぬくい三宅三百人程御座候、此外越後より淨定と申いつきの大將八千人ニ而加可申との内談ニ而御座候、とんよやいんハ荒山へ取出ヲ仕可申ため早々被指出候、あら山と申ハ古し名ハ麻ウ嵩と申山ニ而御座候、兼信之御代ニ付出ニ拵置を候古城ニ而御座候、石動山之大將ハ、とんにやいん、やうく、むん坊、万藏いん、こを三人、ぬくい殿、三宅殿、五人、ぞうひやう五百人許、よて荒山ニ取込候所ニ、越前加賀兩國ノ加入數よせ被申候、其内長如庵殿のかゝりハ、やこウ池、ゑやしウ石口よて御座候、佐久間玄蕃殿懸りハ、井田原、三やうりたけ、三ツ尾口ニて御座候、やとかく城かく茂三まきまきせめ申候、其日の辰ノ刻ハ初未ノ下刻迄たゝかい被申所ニ、城中皆々被打申候、乍去とんにやいんの手柄ハ、能武者十騎之餘程打申候、ぞうむやうハ七十人之餘やと切捨申ときこへ候、さるの頭こみかゝ壹人もかく候ゆへ、とんにやいん、亥かい申候、てきかゝへ向て、せんたいてハ武藏坊辨慶、今石動山ニ鬼とんよやいんニ而御座候、てからのやとんのち

般若院某  
ノ奮闘

七月二十  
八日説

さて傳可給候、見うゝハ無之候間、てきかゝかいえやく頼申候とて、たちとらヲ切申候、右三人之坊主くひ、ぬくい三宅首ノ五人、八町許上之大芝<sup>トウケ</sup>卡のみゆこかけ置、石動山へせめ入、一夜一日たゝかい申候へと終ニ落城申候、年頃天正十年水<sup>ミ</sup>のへ馬<sup>ウ</sup>の七月廿八日ニえう仕候、當年萬治三年まで七十九年ニ罷成候、右三年退地、三年以後ハ、いかけと申所ニ十三年たち申候、大宮坊ハ、まき嶋大樂寺と申坊主ヲ被仰付候、其後慶長貳年七月九日ニ、東山へけんまう被仰付候、以上、  
○盛政、荒山ヲ陷ルコト、利家、石動山ヲ火クコト、並ニ月日詳ナラズ、今姑ク荒山合戦記ニ從ヒテ、本日ノ條ニ收ム、

〔参考〕

〔北徴遺文〕

○加能越古文  
三十八所載

爲陣見廻札守到來頂戴申候、并青銅貳十疋宛送給候、祝著至候、猶歸陳時候、謹言、

七月廿八日

菅原  
常儀坊

利家印

天正十年六月二十六日

七六五



天正十年六月二十六日

七六六

遍照坊

按○加能越古文叢書、原書能登國羽咋郡菅原神社所藏、  
石動山合戰之時、親簡ふるん、此合戦は諸記、  
録六月は係といへとも、其實は七月あるよ、  
左の舊記(聞見雜録)にて知らまらるトアリ、

〔秘笈叢書〕

○加能越古文叢書  
三十八所載

一聞見雜錄一名士林談叢云

謙信ヨリ七尾ノ城代トシテ、越後ノ住人鱒坂備中ニ、越中ノ住人轡田肥  
後、長惣筑前ヲ相添、右ノ三人ヲ七尾ノ城代ニ置、并國侍ニ先知ノ十ヶ一  
宛ヲ遣シ、右三人ノ與力ニナシ、昔ノ寺屋敷ニ置、六七年ヲ經テ、國侍同事  
ニ謀叛ヲ發シ云々、本丸ニ入替ツテ、前後三年國ヲ治ル、其後信長公ヨリ、  
菅谷九右衛門ヲ大將トシ、前田又左衛門殿、原隠岐守、不破彦三、右四人能  
州へ打入玉フ、菅谷九右衛門ハ、信長ヨリノ御意ト披露シテ、國侍ニ云付、  
游佐美作守、其弟伊丹、同名游佐長門守、郎等四人、已上七人ヲ討捕、其首ア  
ツチへ送ル、其後國一遍ニ治リシカハ、信長公ヨリ前田又左衛門殿ニ能  
登ノ國ヲ被下、但鹿嶋半郡ハ長九郎左衛門拜領ニテ、又左衛門トノへ與  
カス、國侍能登ノ國ヲハラハレシカハ、越後へ落然、能登國侍鱒坂備中ニ  
心替セシ事ヲ、謙信猶子喜平次景勝イキトヲリ玉シカハ、越後ニモ堪忍

能登國衆  
謙信ニ叛

信長能登  
ヲ利家ニ  
與フ

能登國衆  
越後ニ逃  
ル  
景勝能登

國衆ノ反  
覆ヲ喜ハ  
ズ

七月二十  
五日説

神保氏治

難成ニヨリ、能州石動山ノ衆徒ヲ頼、衆徒ナンナク一味ス、其比信長公爲  
明智討レ玉シカハ、國侍是ニ理ヲ得テ、同年ノ六月晦日ニ、越後ヨリ石動  
山ニ移ル、同七月廿五日ノ早朝ニ、石動山ノツ、キ荒山ニ取出ヲ搆ント  
テ、大將悉ク同石動ノ衆徒加テ出シ處ニ、佐久間玄蕃頭、又左衛門殿ノ加  
勢トシテ、加賀越中ノ人數ヲ卒シテ、荒山越ニ石動へ寄ントスル處ニ、右  
ノ取出ノ用意ニ出ル國侍ト、寄合々々戰ヌ、中ニモ石動ノ衆徒般若院、本  
ハ遊佐美作守ノ郎等武部トイヒシ者ノ子成シガ、長刀ニテ四角八面ニ  
切廻、手負死人三十人ニ及フ、其外ノ諸大將、温井備中、其弟三宅備後、温井  
山城、其弟ホウカハ、其外郎等凡四五百人討死ス、壁、加賀守、三宅小三郎叔  
父甥ハ、敵ニ隔ラレテ石動ニ有シ也、遊佐美作守郎等武部、白石ナト云者、  
石動ニ在テ、又左衛門殿先手ト一戰シテ討死ス、此時笠間義兵衛、梅野善  
次ナト云モノ、高島石見守與力ニテ手ニアフ、壁ノ加賀守、三宅小三郎二  
人ハ、越中へハイグンス、然ヲ氷見ノ大將神保氏治生捕ラレテ、柴田殿へ  
送ル、ツイニ越前ニテ切腹ス、

〔越登加三州志〕

九 韃囊餘考九

石動山兇僧與景勝謀而欲侵能州公斃之

天正十年六月二十六日

七六七



六月二日、明智光秀京都本能寺ニテ、信長公ヲ弑シ、又信忠君ヲ追撃メ、二條城ニテ弑スルノ旨、騎置ヲ以テ同三日越中ニ告ヘ、四戰略、景勝越後、諸將愕然惘然タリ、諸兵卒ノ駭擾筆舌ニ盡スベカラズ、因テ諸將各越中ノ陣ヲ引キ、或ハ上洛シ、或ハ分國ニ退ク、一説、此時、加州手取川、粟生川邊迄至テ、此、向成政又之ヲ攻テ、追拂フヲアリ、這覺ニ乘メ、能登石動山、天平寺ノ狡僧、石動山ハ能越分界ノ地ニ在テ、最高山也、僧徒多ク、其險ヲ恃シテ驕慢シ、沙門ノ道ヲ忘レテ、殺戮セラル、者多シ、且平日温井、三宅ニ志ヲ苦シム、故ニ其復シカメ、リトテ、殺戮セラル、者多シ、且平日温井、三宅ニ志ヲ苦シム、故ニ其尾ニ歸リ、玉フ頃、サヒ、擊ヘシト、此時ニ至テ、暴雨滂沱タリ、狡僧空ク中途ヨリ飯山ノ志ヲ失フ、景周按ルニ、仁君天護アルト、和漢古今比類尤多シ、天其疑フヘカラス、姦計ヲ温井、景隆、三宅、長盛ト、越前ニヨリ、居ス、合セ、能州ヲ奪領セントス、公聞テ、瞋目シ、玉ヒ、狡僧ノ衆長ヲ縛シテ、譴責メ、曰ク、爾チ何ソ、叡嶽ノ火攻ヲ以テ、眼前ノ烟戒トセサルト、狡僧蒲伏首ヲ以テ、地ヲ叩キ謝メ、曰ク、是世ノ浮言巷説タリ、實有トナシト、鬮臂ノ誓詞ヲ筆メ、捧ク、公其文過ナルコトヲ先知シ、玉フトイヘ、凡、寬仁ヲ以テ、其言ニ信セテ、宥恕アリ、斯テ狡僧猶虎狼心ヲ懷キ、一人ノ辨僧ヲ越後ヘ間行セシメ、温井、三宅ノ爲ニ、公ニ敵セント、姦策ヲ言送ル、景隆等、拊躍ノ喜ヒ、渠カ爲ニ、援兵ヲ景勝ニ乞、景勝

妻良浦

升形山

乃シ介士ヲ與フルコト若干也、因テ温井、三宅カ將山庄、藤兵衛、小南内匠、筒井雅樂、廣瀬隼人、鳥藏内匠等軍儲ヲ議シ、甲兵三千ヲ率キ、兵艦數十帆ニテ、本月廿二日、太閤記、作ノ黎明ニ、越中妻良浦、景周、按ルニ、妻良、今ハ女良ト書テ、大境トカク、鹿島郡ノ大泊村トノ間ニアル地名也、古戰記、或ハ免良トカキ、又目羅トカク、傳寫ノ誤也、此地名、今ノ射水郡、圖ニ見ヘス、景周數年考索メ、後、能登ノ古地圖ニ得ニ到ル、是ヨリ石動山ニ上リ、天平寺ノ般若院、快存、大宮坊立玄、按ルニ、今ノ石動山、衆徒ノ内、大宮坊ハ存ス、レ等ト商議シ、廿四日、堡障ヲ荒山ニ、鹿島郡ニテ、又新山トモ云、二方ハ射水郡、小瀧村ノ地也、此山ノ腰通、登リ、芹川村ヨリ越中道、是ヲ荒山越ト云、此荒山、一般ヨリ北ノ方ヘ高低三ノ町許、登リ、芹川村ヨリ越中道、是ヲ荒山越ト云、此荒山、一般ヨリ北ノ方ヘ高低三ノ北ニテ、芹川村領也、按ルニ、末森記等ニ、此荒山、ヲ遺跡トシ、作ル、非也、勝山トハ古墟考中ニ、詳ハ、荒山、ナハト、動山ヨリ、一里ト云、皆穿鑿ナキ者、猶予能州池トテ、浦水、築キ、界堞外柵、過半成テ、日既ニ晡ルヲ以テ、天平寺ニ歸ル、公此事ヲ聞テ、怒ラセ、玉ヒ、淨寂坊ノ公ノ親族ニ、七尾ノ町、人水見屋、某ヨリ、公ニ一寺告ルニ、因テ也、故ニ石動山方ヨリ、又廿五日、公ハ此水見屋、某ノ所、爲トナシ、柴峠ニ著陣也、急攻セント思ヒ、玉ヘトモ、世子、龍、越前府中ニ在シ、略ス、兵士寡シ、茲ニ嚮ニ書ヲ贈リ、佐久間盛政ニ、濟兵ヲ乞フアリ、乞ハ、上、文ニ、石動山



天正十年六月二十六日

七七〇

僧反形見ハルルノ時カ、年譜ニ、國祖ヨリ、加勢ヲ越前ノ柴田勝家、加州金澤城ノ佐久間盛政ヘ乞フ書ヲ載ス。○下略。前掲六月十九日附及ビ同二十四日附、勝家、盛政宛、利盛政、廿四日、賀州尾山ヲ發旗シ、甲子二千五百騎、者過大、家書狀ニカ、ル、盛政、利盛政、廿四日、賀州尾山ヲ發旗シ、甲子二千五百騎、者過大、ヲ帥テ能州ニ至リ、高島郡鹿島ニ陣シ、使介ヲ七尾ニ走ラセテ、此旨ヲ告、公喜ヒ、即チ軍令ヲ定メ、高島織部、五郎兵衛祖也、織部、天正十年、石動山番手ノ其、一、道合アリ、長九郎左衛門、村井又兵衛、富田助三、六郎、不詳、三壺、事、雖、作、予、祖、與、雜賀金藏、笠間儀兵衛、雜賀、笠間、二、士、ノ、胤、今、本、藩、ト、云、ナ、シ、按、ル、ニ、雜、賀、ハ、紀、州、ノ、信長也、此、金、藏、一、鐵、ヲ、以、テ、利、ヲ、解、テ、招、カ、セ、ラ、奥、村、孫、助、源、左、衛、門、二、男、同、助、右、衛門、即、永、福、也、碑、銘、ニ、能、州、舊、族、温、井、三、宅、復、入、石、動、山、築、篠、原、勘、六、小、塚、八、右、衛門、淡、路、ノ、初、名、丸、尾、又、五、郎、後、此、末、胤、今、ナ、シ、非、也、記、等、步、騎、三、千、一、說、二、千、其、夜ノ子時七尾ヲ發シ、芝嶺、石動山、間、ニ、到、ル、此、處、ニ、於、テ、世、本、皆、廿、四、日、ト、著、陣、ト、云、レ、以、上、ノ柴、峠、相、戰、合、鐘、得、大、利、其、後、石、動、山、惡、僧、御、國、中、殘、黨、作、亂、時、利、家、攻、之、手、自、刺、擊、之、其、首、千、餘、級、梟、之、於、石、動、山、門、之、左、右、ト、姑、ク、リ、此、ト、ナ、シ、細、書、シ、テ、後、按、ニ、備フ、翌、廿、五、日、六、日、未、明、ニ、石、動、山、ヘ、攻、ヨ、ス、陣、翌、廿、六、日、黎、明、ニ、長、盛、景、隆、暨、ヒ、天、平寺ノ般若院快存、大宮坊、大和坊、覺笑、大石、坊、山、ニ、今、等、ノ、狡、僧、モ、亦、荒、山、ニ、往、テ、壘ヲ築終ンカ爲ニ、石動山ヲ出ツ、大也、一書、徒、四、百、三、十、六、十、坊、ト、云、按、ル、ニ、過、然、ル、ニ

天正十年六月二十六日

七七一

不虞ニ半途ニノ、公ノ先鋒ニ相會、我軍士直チニ奮鬪、是ヲ走ラシム、一書時、高島石見ノ先手、榊野善次郎、進擊ス、公ノ嬖童丸毛又五郎、富田助三、雜賀金藏、是ヲ見テ、同ク進ム、富田、雜賀、鳥銃ニ、ア、タル、榊野、ハ、白、井、軍、人、ト、槍、ヲ、合、シ、白、井、ヲ、追、ヒ、早、田、主、膳、ト、槍、ヲ、合、ス、丸、毛、温、井、三、宅、及、ヒ、般、若、院、等、兵、衆、ヲ、護メ、荒山ノ新壘ニ保ム、公是ヲ尾擊シ、槍ヲ入玉フ、種村三郎四郎、正十二年、天註ス、種村、加、勢、ト、勝、家、ノ、臣、ニ、テ、此、ノ、家、士、杉、立、九、郎、左、衛、門、富、田、勘、次、郎、連、龍、ノ家士鈴木因幡等進ンテ、衝、烏、帽子、石、口、ヘ、カ、連、龍、此、時、鋒、池、ヨ、リ、時、ニ、盛、政、伊、多原三方三尾口、道ニ、ア、レ、未、考、石、川、郡、ノ、板、尾、三、方、嶽、ハ、瀨、波、郡、山、越、ヨ、リ、旗、ヲ、進メ、拜、郷、五、左、衛、門、ヲ、石、動、山、ヲ、攻、サ、セ、盛、政、ハ、荒、山、ノ、堡、ヲ、圍、ム、堡、壁、未、タ、完カラサレハ、防禦スル、能ハス、命ヲ鋒、乃、ニ、隕、ス、者、枕、藉、ス、温、井、三、宅、モ、自、カヲ、苦、擊、メ、重、圍、ヲ、衝、テ、遁、レ、ン、ト、ス、ル、吉、川、平、左、衛、門、森、役、ニ、吉、川、平、太、ア、リ人、カ、ト、同、三、宅、ヲ、斬、堀、田、新、右、衛、門、堀、田、享、保、十、一、年、二、斷、絶、温、井、ヲ、斬、テ、各、其、首、ヲ獲、島、山、記、ニ、ハ、盛、政、兵、四、千、ヲ、三、隊、ト、シ、先、軍、ハ、宮、崎、七、郎、次、軍、ハ、林、祐、玄、齋、ヲ温、井、死、ス、盛、政、怒、テ、進、擊、ス、レ、ハ、因、テ、山、庄、廣、瀬、鳥、藏、及、ヒ、小、山、田、甚、兵、衛、得、田、佐渡、按、ル、ニ、佐、渡、盛、章、其、子、伯、者、盛、芳、共、ニ、此、役、ニ、戰、死、ス、其、先、祖、得、田、次、郎、章、道田、二、家、繼、ニ、存、ス、嫡、流、ハ、頭、タ、リ、夫、ヨ、リ、十、五、代、相、續、ハ、藩、臣、ノ、左、膳、ナ、リ、此、末、等、健、擊孫、二、家、繼、ニ、存、ス、嫡、流、ハ、頭、タ、リ、夫、ヨ、リ、十、五、代、相、續、ハ、藩、臣、ノ、左、膳、ナ、リ、此、末、等、健、擊



スレモ、亂刀ノ下ニ或ハ格殺セラレ、或ハ重創ヲ被テ自盡ス、快存ハ其性剛  
 戾也、眉尖刀ヲ振テ虎奮スルヲ數百合、竟ニ腕痿、眉尖刀ヲ抛テ殞ル、櫻井勘  
 介是ヲ斬、翁物語ニハ、快存ヲ鈴木因幡討取トアリ、一書ニ、此時快存越中へ  
 ナ指テ今石動山五社ノ内、將軍地蔵ヲ奉シ、走テ行、葭原村ニ住スルヨリ、其處  
 州石動山衆徒確執ノトキ、老僧ノ阿闍梨石動山本宮、虛空藏ヲ持來、  
 大宮へ安置、其後今石動山城トナルトキ、城ノ下、寅ニ愛宕勝軍大權現、石動山  
 權現兩尊ヲ一社ニ建立、山城トナルトキ、石動山ト改メ、寅ニ愛宕勝軍大權現、石動山  
 同宿アリ、荒中將ト云、惡僧、此櫻井ハ、我初卷匠ノ仇成トテ射倒シ、櫻井切腹シ、  
 ハ別人、此櫻井ト混、時ニ公ノ先鋒長村井、與村、高島等、東谷ヨリ齊進シ、鼓譟メ、  
 石動山ヲ篠原勘六、小塚八右衛門、寺岡兵左衛門、今不詳、此胤先登ス、阿彌陀院  
 阿彌陀院、今モ石ノ律師俊慶、大宮坊ノ飛周、松月坊ノ今松月坊ノ忠格、金藏院  
 今金藏院ノ中將、滿院、天狗院、ナ加フ、以下戰死ス、此費ニ乘、諸卒寺觀ノ財  
 寶ヲ縱掠セント互ニ爭フ、長連龍火ヲ諸堂ニ放タシムレハ、時ニ寺中ニ首  
 二十三日、其餘斬殺ス者一千六百六十餘ト云々、前田三代記ニハ、此時公命ノ  
 古キ村屋、或ハ枯柴ヲ山中ニ積テ、火ヲ放テ、大木ニ火轉シ、夫ヨリ一山悉  
 越ク、灰燼トナル、此煽勢ヲ越後ノ援兵遠望シ、石動山ノ亡滅ヲ悟リ、艦ニテ又  
 ナ呼集メ、山中ノ諸院十餘所ヲ燒立ルトアリ、當家ニモアリテ、四井主馬ナ  
 シト、其支配ナリ、諸僧徒愈ヨ周章狼狽シテ鼠竄ス、公一朝ニ是ヲ殲スニ忍

龜ヶ島

ヒス、斬殺ヲ禁シ、縛索シ來ルヲ要スト也、時ニ盛政ヲ殺、狡ノ志アリ、公ノ行軍  
 ノ後ヲ認テ石動山ニ到リ、公ノ兵覺ヲ觀テ、能州ヲ奪領セント、心首鼠兩端  
 ニ持テ、旌色ヲ候フ、斯テ天平寺兵燹ノ熾ナルヲ望ミ、僧徒ノ敗候ヲ知り、  
 頓ニ使ヲ馳テ、温井、三宅、及ヒ山庄、筒井、快存カ首五級ヲハ、公ニ獻ス、太閤記  
 五首ヲ野村勘兵衛ニ持セ、拜郷五左衛門進ストアリ、按ルニ、勘公素ヨリ盛  
 政腹中鱗甲ヲ知テ、内警アリ、且、公連龍速ヤカニ寺觀ヲ燬タルヲ賞シ、汝カ  
 成功ニ依テ、特ニ盛政カ反心モ亦輟マリヌト曰フト也、石動山ノ按ルニ、此頃  
 本願寺門徒、浪人ヲ勾引シ、盛政能州へ出陣ノ隙ヲ窺ヒ、尾山盛政捷速ニ察  
 曲ノ次、耶兵衛、賊長トナリ、能美江沼二郡ノ賊ヲ聚メケルカ、盛政捷速ニ察  
 キ、夫ヨリ山中、引歸シ、直チ屠リ、尾山ニ歸トアリ、拔爰ニ井津木、彈正、淨正、  
 江淨、景勝ノ命ヲ承テ、三千人、千人、八ヲ帥ヒ、艦ヲ放チ、越中ノ龜ヶ島ニ射水、  
 郡ト能登ノ阿無屋ニ作ル、又龜ヶ島ヲ見ユル島也、女長ノ目羅蛇島マテトアリ、  
 本龜ヶ島ヲ阿無屋ニ作ル、又龜ヶ島ヲ見ユル島也、女長ノ目羅蛇島マテトアリ、  
 至リ、温井、三宅ヲ救ハントスルニ、既ニ皆斃レヌト聞テ、越後ニ歸ルト云、公  
 諸將ニ命メ、七月廿八日、温井、三宅、般若院、寶官院、萬藏院、此三院ノ號石ノ首  
 ヲ大芝嶺上、文ニ註ニ、梟ノ一梟シ、温井、三宅ノ首六十餘、天平寺ノ山門ノ左、  
 前北庄ノ石場橋ニ梟ス、ト知ラズ、ト緇素後來ノ懲愆トナサシメ、五社權現ヲ



五社ハ伊弉諾尊、伊弉冉尊、大目一、伊影山ノ石動山中ニ遷シ、○註略ス、天平寺  
 筒尊、大物主尊、一木島姫尊是也、  
 徒再ヒ出テ、前非ヲ千悔シ、連署印結ノ誓書ヲ捧ケテ、夔々トノ齋栗ス、故ニ  
 其科罪ヲ宥シ玉ヘハ、州人益ス公ノ寛仁ニ悦服シ、能登千歲謚如ノ基ヲ立、  
 一書ヲ按ルニ、國祖温井三宅ニ與セシ僧、天正十九年、社領ヲ削ラレ、  
 僧徒七十二ヶ寺、再ヒ歸山セシメ、天正十九年、社領ヲ削ラレ、  
 多ト云、此役ニ、公ノ爲メニ馳走セル品アリ、褒賞郡ノ石米ヲ賜フ、  
 就少アリ、五石ヨリ爲メニ五石マテノ品アリ、褒賞郡ノ石米ヲ賜フ、  
 石動山番手ノ珠洲郡ニカハル也、其詳ナル名等ハ、年譜ニアリ、  
 至郡ニ四人、珠洲郡ニ二人也、  
 石動山番手ノコトニカハル也、其詳ナル名等ハ、年譜ニアリ、  
 石動山番手ノコトニカハル也、其詳ナル名等ハ、年譜ニアリ、

〔陳善錄〕

一大納言様御物ウヨリニ、能登石動山シユト、温井備前守、三宅備  
 後守ヲ取コミ無本仕時、まへりと相きこへ候間、石動山坊主共よひよせ、  
 御せんさく被成候へり、さらく無御座候由にて、せいしや之せいしを  
 書申候間、其通御かへし候、其後御鷹野ニ御出候へり、御歸を利家様ヲ打  
 可申候たくミ之由、然所ニ俄ニ大雨ふり、路次ヲ別道を御歸被成之由、扱  
 其後右色立申候ニ付て、彼せいしを御らん候へり、  
 いし之けつ判ひ不申候由、扱もせいしのおそろしき事ウチ、又ハ人の命  
 いたたまりあり、まへりと御鷹野ノ時雨ふらま、日暮まで御座候て、其道

石動衆徒  
利家ニ別  
心ナキ旨  
ナ起請ス

ヲ人すくかよ御歸候へり、其まううを候らんはれ共、右之通也と御意  
 二候事

〔附録〕

〔前田家年譜〕

○加能越古文  
叢三十八所收

石動山番手之次第

- 一番 小塚 藤十郎 鐵炮廿五挺
- 二番 杉小左衛門組内 鐵炮十挺
- 三番 五郎兵衛殿
- 四番 山口次右衛門 長立
- 五番 伊藤勝兵衛 木村作右衛門
- 六番 中嶋新兵衛組内 鐵炮十挺

以上

右何後十日番、無懈怠可被相勤者也、

十一月十一日

利家印

二十七日、柴田勝家、羽柴秀吉、惟住長秀、池田恒興等、尾張清洲城ニ會

天正十年六月二十六日

七七五

石動山番  
手ノ次第







信孝信雄  
家康勝家  
等ノ誓紙

信孝信雄  
嗣立ヲ爭  
フ  
秀信ヲ立  
ツ

秀信ヲ信  
孝ニ預ク

秀勝ハ秀  
吉ノ養子  
ナレハ立  
テズ

羊濃ハ岐  
阜トナリ  
質トナリ  
ニテトス  
尾張ハ清  
洲トナリ  
質トナリ  
ニテトス  
近江ハ雄  
近江ハ雄  
ト共ニ勝  
ト共ニ勝  
家共ニ勝  
秀共ニ勝  
本城ヲ取  
ラズ

天正十年六月二十七日

七七八

一柴田与我等間柄何と哉覽可被成之由、忝奉存候、乍去一ツ書并誓紙血判之筈相違入申間敷と存候事、

一信孝様、信雄様、其外家康誓紙、并柴田誓昏、宿老共之一札以下、未來を大事ニ存、我等方ニ所持仕候事、

一御兄弟様雖多御座候、別而從前々被懸御目候之條、今以左様ニ可有御座と存候へど、我等程被懸御目候者多出來候之故、跡ニ罷成、無念存候事、

一信孝、(信雄)三介殿御兩人、御名代被成御改候ニ付、となを御名代ニ立置候ハんと、宿老共清須よて合談合候處、信忠様御子汝取立申、爲宿老共、守立可申与相定、御兄弟之儀を伺候へど、以血判、尤之由被仰出候之間、四人之宿老共、何様も可有御座と存、御誓昏をまゐるへど、從清須岐阜へ御供申、信孝様、若君様を預ケ(申取申取)

一御日比無幾程御座候ニ、安土へ若君様を移シ被參間敷由、信孝様被仰候而、於于今無其儀御座候事、

一御兩人之御兄弟様ハ、御名代を御あらそひよて御座候ニ付て、御主ニ事を闕迷惑仕候、御次も如被成御存知候、十五六ニ御成候て、武者をも被致候之間、御主ニ用申候ても、人更らひ申間敷といへども、我等育子ニ候し候間、八幡大芥、愛宕も御照覽有、御主ニ用させ候事と、をれ、申候共、在之間敷と、ふつはと思ひきり申候事、

一加様ニ賢人をはとぎ、何なる儀をも、信孝様之事者不及申、御一類まとも、御進退成候ハぬを、馳走可申と存候ニ、何事よて御座候哉、御兄弟様、其外御宿老衆之御惡うけ申候儀、迷惑ニ存候事、○中略、秀吉、光秀、トハス、コ十三日、及ヒ同二十、五日ノ條等ニ收ム、

一右之骨をわと申候儀と、悉我等一人之覺悟ニ雖相任候、御國分をいたし、御兄弟御兩人様へ、先國汝可致進上と存候而、宿老共ニ合談合、濃州之儀者、岐阜之御城へ、久太郎上置候へ共、御國を相そへ、一國之人質、信孝様へ進上申候事、

一尾張國をは、清須之城を相副、一國之人質共、三介様へ相渡し申候事、

一御國々ニ相殘候知行方、御忠節之者共、其外宿老共ニ、久々○久々、金井文書、久太郎ニ作ル、召置候、江州北郡之知行、并長濱城迄、柴田誓紙を取相渡申候事、

一坂本之城、我等取口ニ可仕由各雖申候、坂本を持候へど、天下を抱候而、筑

天正十年六月二十七日

七七九



近江滋賀  
郡ハ長秀  
ニ渡ス

坂田郡臺  
所入

天正十年六月二十七日

七八〇

前天下之異見をもと申度志賀郡を相抱候と人も存候へ之少之間も之  
のれもとく迷惑ニ存賢人をさとき五郎左衛門ニ相渡申候事○下略秀  
ノ勝下共ニ信長ノ葬儀ヲ修スルコト等ニカ、ル、本書全文ハ十月十八日  
ノ條ニ收ムル金井文書ニ同シ、齋藤玄蕃助岡本次郎右衛門尉宛秀吉披  
露狀寫松花堂所藏文書所收十月十四日附川田彦  
右衛門岡本太郎左衛門宛秀吉披露狀異事ナシ

〔堀家文書并系圖〕

向○日

坂田郡貳萬五千石爲御臺所入如先々有手長可有運上永不可有相違之狀  
如件

柴田修理亮

勝家(花押)

六月廿七日

惟住五郎左衛門尉

長秀(花押)

羽柴筑前守

秀吉(花押)

池田勝三郎

經興(花押)

秀吉勝家  
等連署ノ  
知行宛行  
狀

〔塚本文書〕

〇二 備前

堀久太郎殿○本書ハ寫ニカ、ル、伊藤本  
文書丹羽家譜傳並ニ同シ

能勢郡之内參千石江州佐久間分之内千石都合四千石御知行不可有相違  
之狀如件

天正十

六月廿七日

惟住五郎左衛門尉

長秀(花押)

羽柴筑前守

秀吉(花押)

池田勝三郎

經興(花押)

柴田修理亮

勝家(花押)

高山右近助殿

〔秀吉事記〕

惟任退治

從其各至尾州濃州成働斯時織田三介信雄柴田修理進勝家追々有出張於

天正十年六月二十七日

七八一

高山長房



天正十年六月二十七日

七八二

秀吉勝家  
長秀恒興  
四人政ヲ  
執ル

勝家申合  
戰ノ爲メ  
上洛セシ  
トス

諸將清洲  
ニ集ル

清須城<sup>ニシテ</sup>成<sup>シ</sup>參會<sup>ス</sup>此先未<sup>ダ</sup>落居<sup>セ</sup>之面々悉<sup>ク</sup>改<sup>ム</sup>之秋田城介平朝臣信忠嫡男定<sup>メ</sup>天下  
主君織田三介信雄定尾州屋形織田三七信孝定濃州之屋形又羽柴柴田惟  
住池田爲此四人行<sup>ラ</sup>天下之政道今度忠節之輩分<sup>テ</sup>知行<sup>ラ</sup>定<sup>メ</sup>分國互<sup>ニ</sup>成<sup>シ</sup>可<sup>ク</sup>入<sup>ル</sup>魂<sup>ニ</sup>固<sup>ク</sup>  
取<sup>リ</sup>替<sup>フ</sup>誓詞各歸國畢矣○上下略<sup>シ</sup>秀吉安閉貞大<sup>ナ</sup>斬<sup>ル</sup>コト齋藤利三<sup>ヲ</sup>磔<sup>ス</sup>  
收<sup>ム</sup>條<sup>ニ</sup>及<sup>ビ</sup>同十七日ノ

〔太閤記〕 三 信長公御跡知行割之事

秀吉の京都ふく、惟任家來之者共悉々尋搜く伐捨其後本能寺よたひて御  
切腹なされたる骸骨をよたよ納め奉りてよわ尾州へ令下向若君へ御禮  
申上んと急きふたり柴田修理亮勝家を越中表之隙を明弔合戦のよめ京  
都はして打て上らんとせしむ共とや惟任を打亡しよは由三七殿羽柴筑  
前守より注進有しうの同十六日柳瀬より直よ信忠卿御若君へ御弔ひ申  
上んさて是も清洲へ赴たにたり池田父子丹羽五郎左衛門尉長秀蜂屋出<sup>細</sup>  
羽守筒井順慶其外舊臣之面々不殘御若君へ續目之御禮申上ん榮め尾州  
へ下著有し也各はし會ひ三歳の主君へ御禮申上落涙之淋あさうらはわ  
し形勢甚以之ゆせうかりかくてをてぬ事なれり若君十五歳よからせ

明地關國  
ノ配分

られ候まで、明地關國之地預侍目錄、

- 一 信雄卿 尾州
- 一 信孝 濃州
- 一 秀吉 丹波
- 一 勝家 江州之内長濱 六萬石
- 一 池田父子 大坂尼崎兵庫 十二萬石
- 一 長秀 若州并江州内高嶋志賀<sup>郡二</sup>
- 一 瀧川 五萬石 加増、此外北伊勢を領ま、
- 一 蜂屋 三萬石 加増、

或曰、此外明地多かりし、悉く秀吉へ何となく自由せられしやうに成  
行しかり、是の天正十年中之事なり、

御若君をの安土山よ居奉り、長谷川丹波守前田玄以齋<sup>後</sup>院<sup>號</sup>を御守とし  
て付置奉りぬ、御城付領の於江州三十萬石也、信長公、信忠卿おのしませし  
時のゑうに、互よ可有入魂とせ、堅約嚴密にし侍りて、をのり國々へ歸陣よ  
赴きしかり、○秀信、岐阜ニ信孝ノ許ニアリ、秀吉等之ヲ安土ニ移サン

天正十年六月二十七日

七八三

此外ノ明  
地ハ多ク  
秀吉ノ自  
由ニ成行  
ク

秀信ノ所  
領ハ近江  
三十萬石



天正十年六月二十七日

七八四

〔川角太閤記〕

上ノ

一御いくさう、日をおけい、やまし罷成候と見え申候事不斜候、秀吉もきやうに乘しさせ給ふ所へ、

勝家諸將  
ニ合シテ  
岐阜ニ會  
セシムト  
ノ説

一越前の國より柴田修理勝家岐阜の御城へ祇候被仕、三七殿をかんの城より岐阜へ奉移、御分國の大名小名に至るまゝ、岐阜へ被詰候へ、談合可申子細有とて被觸れ、各無殘直參候と相聞え申候、筑前守殿と姫地を打立、岐阜へ參著候、大名衆乃其中より、越中國拜領被仕候佐々内藏助一人を、柴田殿内證より國に被居候、其子細の越後乃景勝おさへの爲と相聞え申候事、

秀吉秀勝  
ヲ龜山ニ  
置ク

一筑前守殿岐阜へ御通り之刻、信勝様を御同道被成、丹波の國明智殿居城龜山に御番之た先に入被置候事、

一柴田修理殿惣大名衆を御觸り、明日登城候へ、於御城各申談、天下人を可相定との前日れふを聞え申候、翌日柴田殿如指圖御城へ被詰候處に、柴田殿被申出候様子、上様御父子之儀と不及是非次第也、目出度天下人を定め、上様と可奉仰と被申被出候事、

一惣大名衆を御尤に存候と計より、誰を可然や被申出衆中一人も無御座

勝家信孝  
ヲ推ス

秀吉ハ秀  
信ヲ推ス

候、それより互に目を被見合たれと聞え申候、稍有て勝家被申出々は、三七様可然らんと存候、御年の比と申、御覺御利とつの有様、殘所無御座候と被申出候處、筑前守殿勝家御見合の無殘所候、乍去御筋目を被立候と、御嫡男御尤と存候、其子細の城之助様の若君御座候上と、吉法様を御取立可被成事御尤と存候、只今と御幼少たりとの申から、御一門中勝家扱其外於同心仕と、御幼少をばるしから、おしうは不奉仰者下万人として、御座有ましく候、只御筋目を被立候と、以下に至まで不足御座有ましく、於拙者の様を奉存候事、

一勝家の内證氣と不合と見え申候へ、色は不被出候、惣大名衆それより猶以無言の仕合なり、稍暫あり、丹羽五郎左衛門殿被申出様子、勝家又各も被成御聞候へ、筑前守申條を筋目涼敷相聞え申候、了れ子細、城之助様も若君無御座候へ、不及是非候、たとへ御息女も御座候と、御一門中御縁邊可被仰合、ましてや御二ツの若君様也と被申出候、筑前守殿追而被申々、城之助様御前方とに御懷妊の方も御座候、御産れひを御とれ被成候を御待被成、男女の次第御見分可

長秀秀吉  
ノ説ニ贊  
ス

天正十年六月二十七日

七八五



被成事こ終、五常筋目も可然のと存候處よ、ましてや若君御座候上の、御取立可被成事御尤のを存候事、

一 柴田殿をとし先とし其外の大名衆、筑前守申通筋目立申候とは各被存候へとも、又被申出衆をかく相見え候處の爲躰、秀吉御覽被付、いやく此座敷よ秀吉於有之と惣談をみくのををき也と思召、いつもの虫氣少し指出申候と被申出候而、御座敷被立候く、終をよりたは比間へ御座候而、茶坊主共よ枕を御取よせ被成、御やを候く、湯など御取よせ、香篝散をと万いり、ゆるくと御休足被成候、御心よの定め跡みてせんきまちくたるをたと被思召候處よ、如案評定のとど也、其中に丹羽五郎左衛門殿被申出様子を、勝家の様に申候と御腹立被成間敷候、筑前守申條筋目たくしきかと存候事、

一 五郎左衛門殿又被申次第右に如申候、勝家御腹立被成ましく候、上様於京都御切腹被成候折節、筑前守の中國備中に大敵乃輝元と指向、其身よ指當る大事をのれ、播州に歸城し、三日とを休足不遂しく、則時よ打くのをり、我人の主れかたた無道人を討果事、天命よをのなひ申筑前守の

秀吉會議  
ノ席ヲ立  
ツ香篝散

長秀秀吉  
ノ功ヲ述  
ベノ勝家ノ  
油斷ヲ説ク

勝家閉口  
ス

勝家途ニ  
秀吉ノ説  
ニ贊ス

と存候、勝家と筑前守をたくらへ候得と、半分よを不及身上也、上様御切腹、勝家御聞付被成候とをとしく御かる羽をもはのいを、早速御登被成候の、惟任程をたの二三人を御ぬをつふし可被成ものを、御油斷故と存候と、五郎左衛門殿被申候得と、勝家も理よはまり、あやまりて候、五郎左被申通に候とれあひさりと聞え申候、勝家暫工夫して、いやく善を急をと申たとへをおもひ被出けるの、筑前守被申出通筋目立候間、吉法師様を天下人よ可奉仰者也、筑前守虫氣を能候の、是へ被出よ、談合可相澄と儀定候事、

一 五郎左衛門殿是を聞、座敷遙に相隔申處のたいを比間へ御出候而、筑前守被起候へ、亂もよく候哉、貴所御存分之通よ勝家合點候、とやくとて、五郎左衛門殿と打連、本の座敷へ御歸候、勝家被申出候と、虫氣もよく候哉、先程貴所被仰出筋目可然と各を同心候間、目出度吉法師様を天下人に、各我等をとし先として可奉仰覺悟也、目出度くと被申出候事、  
一 筑前守殿被申候の、扱を勝家を始と被成、各を被思召候哉、我等存より候通を如右みく御座候、乍去これ上をとくく御談合を御をめ被成



傳家ハ信  
孝ノ烏帽  
子親

天正十年六月二十七日

七八八

候へ、存より申一通の如此申上候と御申候之處は、勝家様は、いさひ、各を  
貴所被申通可然と、我等も始としく存候とや、此上は心置有ましく  
候事、

一柴田殿、三七殿を天下の主ニ取立申度との分別も、三七殿へ御具足とし  
めを被仕ふる故と相聞え申候、此御勢約故後ニ御懇と聞え申候、秀吉よ  
の城之助殿御懇と聞え申候、其子細る城之介殿御若衆のとき、御公家衆  
かと御をんや被成候、御六う敷被思召候御氣色を秀吉見被及、はらは私  
へ御目を被懸候と、世間御披露被成候と、御氣むつうした事御座有まし  
く候、其上於私にも内證者御六ヶ敷儀申上間敷候、外儀を右之通ニ可被  
成と被申上候處は、信忠様もよとや被思召、秀吉御知音之様ニ世間成  
行申、彌後ノも御目のけぬりに罷成候事、

一信長殿御妹、智淺井殿を御成敗被成、其後家を信長殿内々御有付可被成  
と被思召候處は、三七殿も柴田ニ被遣候様ニ被仰上候、又城之介殿の、  
筑前守も被遣候様ニ被仰上候處は、朝倉を御追討被成、其跡一圓よ  
柴田ニ被遣候、殊外大名ニ被罷成候時、三七殿只柴田ニ被遣候へ、大名よ

信長信孝  
ノ勸メニ

依り淺井  
長政ノ後  
家織田氏  
ヲ勝家ニ  
嫁セシム  
トノ説

も被成候上も、御兄弟ニ被成候而も不苦候と被仰上候時、信長殿尤と御  
意よて柴田も被遣候、此ゆい所故、三七殿を柴田引被申候、筑前守殿も城  
之介様をせんと故、是のちかきを以、吉法師様を取よて申度と比互れま  
ふきのあらきひと承候事、

一左候の、吉日をえらひ吉法様へ之御禮可相定と勝家被申出候、是をよ  
り日柄を見よとて、其役れ者ニ被申渡候、稍有て談合おひり候日より四  
日めニ御禮相定候事、

一さらの御禮之次第目錄を作よと、先御一家衆御禮の目錄卷物一卷出來  
は、はくまゝ其次ニ國大名衆御禮の目錄別紙ニ一卷出來は、國大名衆ニ  
おゐての柴田修理殿、次この瀧川左近殿、丹羽五郎左衛門殿、羽柴筑前  
守を目錄ニ書付申よと、秀吉御見及被成候て、勝家各様へ訴訟御座候、御  
聞分被成候と可忝候、各内々如御存、信忠様別而被懸御日子細御座候儀  
と、被成御存候間不能申上候、別の訴訟もく、無御座候、吉法様は御を  
りを被仰付可被下候とや、一年もより申候間、別に望も無御座候、城  
之介様へ御奉公仕候と心ニ取置申候、此吉法様を信忠様と奉存、隨分御

秀吉秀信  
ノ守役ヲ  
望ムトノ  
説

天正十年六月二十七日

七八九



天正十年六月二十七日

七九〇

奉公可仕候、別ニ申上子細無御座候と被仰出候勝家を始とし、秀吉訴訟  
と被申出候時ニハ、いハ様なる儀とこそ各存候ニ、是ハ以之外安テ訴訟  
ニ候、於我等ト同心仕候、各も定別條有るましと勝家被申候得と、其外之  
大名衆貴所へ信忠様被懸御目候様子、其かくも無御座候、いよしへを被  
思召出、吉法師様の御をりと被仰候事かんし入申候、筋目立申上ニ一入  
頼母敷御覺悟ニ候と各被申候と相聞申候、右之目錄ニ秀吉も無御入候、  
さて其次ノ御禮之次第目錄相のまじ納候事、是より柴田殿をこ  
しめとし、各御城を被出屋形ノへ被罷戻候、

一 秀吉の跡ニ御留り候て、御をへへ御座候而、おく方へ上藤衆を以御使ニ  
被立、吉法様を是へいさら奉り、お乳人被出候へとほりしは、即吉法様  
をいさら御をへへ御出被成候、筑前守殿御きてんこそおをぬしと、  
人ノ後ニ申出へると聞え申候、おさかき様の我等ノ様成年よりを御  
覽して、御おち被成をの也と、其間二三間御おた、秀吉はくノ御  
覽して、御二ツニ御年法よゆへり、一段と御かしく見え申候、御目く  
り成と御さけまみまはし、さらハ明日可罷出候と、是より御宿所

へ御歸被成、細工人共へ町以下上様の細工人の儀ハ不及申、數十人被召  
寄候事、

一 之や細工人も有まし祇候仕候へハ、ひの木をさくさん取寄よとの御  
意よく仰出よ、でおれやうを作る者を作よ、鳥馬など作よ、急々との儀  
あり、有増出、來仕と申上候得と、せうらきんらん乃類を多く被召寄、で  
これやうのいしやうニ仕作り、馬出來候と、鞍をさかひ、是も無殘所  
出來候、其夜も明なれと、早天ニ御登城被成、御をへへ御入候て、御持せ被  
成候、長持を御取よせ被成置、吉法様お乳人御いさら候て、是ま御出被  
成候へと被申上候處、即御出被成候、昨日之通間を御置候て、件之でこ  
のやうを御取出被御目懸候へと、や御法を付被成程、御いさみ被成  
候と見え申候處、御をへへ上藤衆へ御わさし候、そより御手へ被渡  
候、御悅候事不斜と見え申候時分、さらハと一問程、秀吉御寄被成、  
又一ツ被懸御目候、右れとく御悅被成候、そよりの秀吉方を御覽候と  
おやしき時分、馬鳥を今度も近々と御寄を候て、とや直ニ御目さし  
候、取替ノ色々の物を御とり出し、後ハ御をへへ上郎衆ま、

秀吉秀信  
玩具シム  
作ラシム

天正十年六月二十七日

七九一



秀吉秀吉  
ニ懐ク

手々ニ持て被上候得と、之や、即時は秀吉へ御たうれ被成候、のやう  
 は御手付被成候事、一偏は御きてんゆへと相聞え申候事、  
 一翌日と御家中のちひさた馬ども二ツ三ツ御所望被成、是もまんくの  
 大ぬさなどかきさせ、あをりのきんらんかを切りけ、無殘所御おし  
 へ被成候、一ツは馬よりの右の通おしらへ、尾袋頭袋をさへせ、馬二ツ御城  
 へ御おろす被成、又早天より御登城、まゝ御書院の前へひうせ、是へ御出  
 被成候様こととほとれるい地ををかゝたさせ、御控まのりの上藤  
 衆まゝ御出候、秀吉を御覽候とふとしく、之やちい、と被仰出、御手を  
 被出候、即御いさき被成候て、ちひさた馬のくらつを二御まへ候て、御手  
 をとさされけ、かかゝおなとふきまのりさせ被成候へ、昨日之でおの  
 りう御覽候より、猶以若君様御心の内御いさほしく見え申候、一日う様  
 成御氣は入申、事計被成候へ、御乳を被召上候事も、之や、御むきを  
 被成程は、御たらし入被成候と聞え申候、馬二ツ御置被成、さらひ明日登  
 城可仕と、御宿所に被成御歸候事、  
 一吉日の日も來候得と、大名小名無殘所、御一家は衆も不及申上と、太刀折

秀吉秀吉  
ナ抱キ上  
トノ座ノ  
説ス

紙を則御持參に相定、早天こなき居祇候被仕候、長袴こちひさ刀まで  
 よく、御さういさを被成、上段こあつ疊を二疊かさきぬ、ごんのかき上段  
 三ヶ一程かき、屏風を引まじし、其のけお上藤衆おちの人を御おき被成  
 候、若君様を秀吉御いさき被成、上段は御打あゝり被成候とふとしく御  
 禮事としまりぬ、三七殿、成心(常置カ)其外御一門中、御目録のとく御禮次第、  
 事おさほり候事、但し御直參、  
 一大名衆は目録、柴田修理殿直參、其外目録のとく目出度相納申候と聞え  
 申候事、  
 一屏風けうけはお乳人上藤衆御置被成候御分別と、無御存者とを御覽  
 被成御機嫌もきお給候と、お乳の人をよひ出し、御乳などを可被上堂先  
 也、其外不斷御控に付そひまじられ候上藤衆、皆、屏風のかきお御  
 入候ゆへ、御機嫌一度もきこま不申候事、  
 一心れ付お衆中見出、目引鼻引かきめて笑被申候、子細は、御一家衆の御  
 禮を始として、御直參なり、謹てかうべを地へ被付御禮被成候へと、筑  
 前守殿の若君様を御おされ上お被置少しうおほき被成迄みく、誠々よ



秀吉主人  
トシテ諸  
大名ノ禮  
ガチ受ケル  
様如キ有

天正十年六月二十七日

七九四

上様の御禮御請被成様あるさうみちつとも不違様も禮を御請被成候柴田修理亮瀧川左近丹羽五郎左とへも猶以上様位の様子躰見申候右に如申上心付たる衆も見給へ筑前守を上様も見るむらひに則筑前こそ上様御一家衆又柴田を始とし皆く筑前もたらされよとて内證よく笑被申と聞え申候事去より右之御禮も目出度相納大名高家も至まき宿々へ被罷歸と聞え申候事

一柴田殿宿よこれ工夫仕出扱く御一門中我身事も筑前守に禮しよれ事の口おしさとほふやき給ふ所へ瀧川左近丹羽五郎左其外柴田殿所へ其夜御見舞候瀧川左近被申出候り勝家今日御禮目出度相納り候去より御一家衆勝家を初とし皆々筑前守に御禮被成候とは不被思召候哉と被申出候へり皆々どけと笑ひ出し如仰筑前守を今日と見るめ奉り上様の様も我人いさし候とて笑被申候勝家もにかりよるかみく其段のややく不及是非候のやうあるてくらふきてんのほりし申候と後このいうやうある事を仕可出も覺不申候是に付談合可申子細候様や

一益長秀  
等勝家ナ  
訪フ

勝家秀吉  
ニ腹ヲ切  
スラセント

一明後日と於御城三日め御祝也本城にて不入儀に候御祝過候て我人罷歸候時歟又登城の折節二之丸も筑前守に腹を可切也各分別如何參候哉と勝家被申出候處も瀧川左近我等も左様も存より候折節此事被仰出候間心中不殘申候勝家如御分別後々よはいりやうなわざう才覺をまじし候のんもさらふ不被計候朝出仕候時腹を切せしとて御祝のはまよおなる程の儀も無御座候却而目出度御事と存候とやとや此事可然候五郎左衛門殿と此事筑前守に聞えとやとは心よ被思おとせ上もども御討果候と出仕之時朝可然御座候のんといと事もなると被申候へり皆々筑前守をにくはる者なたと勝家をとしめとし被思あるかりさらは是より相久敷勝家所もくこき過し夜も談合ありと四方も沙汰於有之と不然候とや御歸候へとて其座皆々御からき候事

一丹羽五郎左衛門殿宿へ被歸世間夜も玄何まりおれと小姓までを一兩人被召連ひたり筑前守殿御屋形へ被成入候處も番之衆書院へせうし奉り候處筑前殿といよと御尋ありとや被伏候と申候へりおあさ

天正十年六月二十七日

七九五

長秀勝家  
等ノ陰謀  
ヲ告ス



天正十年六月二十七日

七九六

れよ、さらり可申聞と候て、五郎左衛門との是へ御入候て案内をと務候、ひとしく御出合被成、何うの不存ひきり御談合被成、五郎左衛門殿の其まゝ御歸被成候、筑前守殿も、五郎左衛門殿に御歸之時、御手を被合、禮拜の様に見え申候事、

一秀吉、蜂須賀彦右衛門、黒田官兵衛、中村孫平次、此衆を被召寄せ聞き、手れ人も不入候、明後日御祝之日、秀吉は於二之丸腹を可切き談合評定、勝家所よて相究候事治定也、之や、乗出國へのを託そや、扱三人へ被仰置候次第、明日人々乃御尋候の、いけをの持病氣みてぬせり被罷居候とあひさつ可仕也、自然状折番かと來候の、指心得返事をなとて、折紙二ツ三ツを繰りふと四ツ五ツ判迄を御まへ置候て、三人に御渡し候、明日一日をひきえらひ尤二候、御祝之日明後日、定勝家、座敷御待候、之や、登城可仕と使必可立也、其時之柴田殿へ之返事も、筑前守事いつもの持病再發仕候へとも、御意も候間、おさへて祇候仕候へはる、も之や目出度御前の御禮の相納り申候上、今日に御祝も登城に不及候、急罷上有馬に湯治仕、片時をこやく養生仕、急き是へ致參著御奉公可

秀吉歸國  
ナ決意シ  
後事ナ正  
勝等ニ託  
ス

勝家裏切  
者ナ穿鑿  
セズ

勝家成政  
ヲ援ケテ  
越中ニ在

被仕さめ、御禮相澄申候、其夜二國へ被罷上候、定め直よ有馬へ湯治可被仕との返事、

一三日之御祝もおさまり、大名高家に至るまで御悅の色見え、いさゝ宿々へ被罷歸候、勝家心よ、是を定め談合之内より、筑前守に返り忠告、よご被思々、此せんさくまはから、筑前守所へ歸り聞えきは、中々用心ぬる、はるきかり、かまじぬ躰をてあし、次而を可伺所かりと被思召さん、世間よて、筑前守も持病再發とて被登る由、相聞え候、定め有馬に可被居、音信かと申付使者を可登と、いのみをかまゝと、世間付合の時次而、みる、同篇の言葉は、いを候と相聞え申候事、  
一、柴田よ、柴田殿を初として、國々へ一先被歸候と相聞え申候事、

〔豐鑑〕 一 高松

○上略、秀吉、長秀、恒興、等、下、清洲に抵ル、コ柴田修理勝家も、佐々陸奥守越中、國もありし、ま、く、いんとて彼國に打越、越後、境小津といふ城、國の兵よてこもり、越後の國よ、初勢を加へてあし、汝うこみて戦しに、城中くし、和汝請ぬを、命汝助城をう務取、猶越後まで趣く、(趣下同シ)るしやと云程、信長

天正十年六月二十七日

七九七



勝家兵ヲ  
伏セテ討  
トス

勝家秀吉  
ノ襲撃ヲ  
恐ル

秀吉秀勝  
ヲ實トシ  
テ勝家ヲ  
歸國セシ  
ム

生害し給ふを告ぐれと、いり哉越前ふ打歸頓而京へと趣し、秀吉明知を討て、尾張も至ぬと聞て、同尾張國も趣ぬ、清洲も至各對面し、初此所にて、國様をも定給ふへしとて、城之助信忠は息三法師主を、信長は跡を、柴田丹羽をば三介信雄、美濃國を三七信孝、うく定て、各國も歸らんと、例のくもかれと、柴田勝家道も兵をうくし、秀吉を討へきとひりうも告ぐを、引違津嶋も趣まし、江いもらの渡を、美濃國長松と云所も一夜明し、夜をうけて爰を出て、長濱に城に至給ふ、柴田勝家越前へ歸らんと、云所に、長濱の際近く通らんとあやうしと云あへり、なれと、美濃に垂井と云所も、さゆ壘ひて通得さ初々初、秀吉聞て、討へきいれかし、おそむと、汝を給ふへし、おやつりかくの養子次丸ををくらひ、給へしとて出し給へと、勝家心おちぬ、次丸を木下邊まで具して越前へ歸り、秀吉を上洛し給へり、

〔丹羽家譜〕長秀年譜 斯ル所ニ信長、信忠、明智カ爲ニ討レ給ヒ、織田七兵衛信澄ハ、光秀ニ組スルト聞ヘシカハ、長秀、信孝ト相謀テ信澄ヲ誅伐シ、伊丹ノ賊徒等ヲ打下シ、筑前守秀吉ヲ初メトメ、宗徒ノ輩此所ニ馳集リ、軍勢ヲ催シ、急キ凶徒ヲ誅戮シテ、清洲ノ城ニ會合シ、御世繼ノ事ヲ僉議ス、右大

信雄ヲ岐  
阜ヨリ招  
キ秀信ノ  
傅トスト  
ノ説  
秀信ヲ安  
土ニ移ス

長秀等四  
將家臣各  
一人ヲ京  
都ニ置ク

江口正吉

臣殿ノ嫡孫ニテ渡ラセ給ヒハ、迎、三法師殿ヲ君トナシ、後、岐阜中納言ト、補、○中略、信孝、長秀等、信澄ヲ大坂城ニ殺スコト、及、長秀、秀吉等ノ諸將ト京師ヲ發シ、尾州清洲ニ到リ、信忠公ノ嗣君秀信公師君ト云フ、三法師ニ謁見ス、時ニ柴田勝家越前ヨリ清洲ニ來リ會ス、是ニ於テ諸將相議シ、信長公ノ嫡孫タルヲ以テ、三法師君ヲ立テ、織田殿ノ洪緒ヲ承カシム、故ニ信雄公ヲ岐阜ヨリ招キ、幼君ニ傅トメ事ヲ攝セシム、後ニ幼君ヲ安土城ニ移シ、長谷川丹波守、前田玄以ヲ、之レヲ調護セシム、且ツ近江國三十萬石ヲ以テ其管轄トナシ、信孝公ヲ以テ岐阜ノ城主トナシ、諸將又關國ヲ割キテ、各自ニ之ヲ參知ス、此時長秀、若狹全國及ヒ近江滋賀、高島ノ二郡ヲ領シ、坂本ノ城ニ移住ス、時ニ、諸將坂本ノ城ケテ、此事秀吉、信孝公ニ呈スル書中ニ見タリ、又々長秀諸將田、池、田、ト議シ、各家臣一人ヲ京都ニ置キ、洛ノ内外ヲ守護糺彈ス、長秀老臣江口三郎右衛門正吉ヲ、其任ニ當ラシム、

信雄、信孝二人ノ公達ヲ御後見ト定メ、三法師殿御成人ノ程、御料ノ國々御家人等分チ守ルヘシト議定シ、長秀若狹國ニ近江ノ滋賀、高島二郡ヲ添テ



天正十年六月二十七日

八〇〇

預ル、

正長秀、元龜元年庚午若狹半國ヲ賜ハリ、是ニ於テ一國ヲ預ルナリ、  
此長ノ世ニ若狹ノ大溝ニ住シ、江州北ノ兵是ニ屬スト云、一説ニ、長秀、是ヨリ先、信長ノ世ニ若狹ノ大溝ニ住シ、江州北ノ兵是ニ屬スト云、一説ニ、若州青井ニ居

案前文ニ云フ、長秀今年坂本ノ城ニ移住スト、大溝ニ住スルヲ判然ナラ  
ス、然レトモ家譜ニ、今年ヨリ長秀ハ大溝ヲ居城トシ、嫡子鍋丸ヲ坂  
本ノ城ヲ守ラシムト、此説ニ因レハ、本書ニ異ナラス、又本文一説ノ若  
州青井ニ住スルヲ家譜ニ載セス、

〔池田氏家譜集成〕十九 幼君を立并四人宿老定制法之事

柴田勝家羽柴秀吉、惟住長秀、池田勝入、是を四人の宿老として制法を定し、  
第一信忠卿嫡男三歳是を君を定安土を御居城とし、江州今迄信長公御藏  
入之所三十萬石を御領とし、清洲の城は尾州國中の人質を添信雄へ、岐阜  
城は堀久太郎居城たれを明させ、此城は濃州國中の人質を添て信孝へ、此  
外丹波國の秀吉預、江州之内北部の知行長濱の城を添勝家預り、攝津の内  
餘地の池田勝入預り、若州の内高嶋、志賀二郡長秀預り、瀧川は五萬石加増

領興ノ所

清洲會議  
八月十一日  
日説

蜂屋は三萬石加増如件、扱安土は城の、明智左馬助燒は此事を授て、普請成  
就の間、信孝誓昏乃上之四人の家老共、若君三郎、後ニハを清洲を御供し  
て、信孝は預多奉ふ、其後安土城普請出來せしうり、秀吉を若君を安土へ  
移し奉らんを申多授とも、信孝兔の角れとて移し不給とあり、此を密々  
柴田内談の意ありての事かざるし、

〔池田氏家譜集成附録〕

四 同年八月十一日、今夜柴田修理亮勝家、丹羽五

郎左衛門長秀、池田庄三郎信輝入道勝入、羽柴筑前守相議シテ、先考信長公  
ノ嫡孫三法師秀信主ヲ以テ、安土城ノ燒跡ニ御所ヲ營シ、是ニ移シ、天下ノ  
武將ト仰キ、江州ノ公田三十萬石ヲ以テ厨料ト成シ、信長公ノ二男北畠中  
將信雄卿、同三男神戶三七信孝ヲ以テ羽翼ト成シ、政務ハ右ノ四老是ヲ裁  
判シ、各家臣有我ノ者一人宛ヲ以テ、輪番ニ京都ノ所司代トスヘシト云云、  
然ノ闔國ヲ配分ス、尾張國ハ信雄卿、美濃國ハ信孝主、丹波國ハ次丸秀勝主、  
江州長濱六萬石柴田勝家、攝州ノ尼ヶ崎、大坂、兵庫十二萬石池田信輝、并其  
子紀伊守之助若州并ニ江州ノ内志賀、高嶋兩郡坂本ノ城共ニ、丹羽長秀、佐和山城  
堀久太郎秀政、領知五萬石瀧川左近將監一益、三萬石蜂屋出羽守賴隆ニ授

天正十年六月二十七日

八〇一

秀吉勝家  
等四將家  
一番人ヲ京  
都ニ置ク  
丹波ハ秀  
勝ニ與フ  
佐和山城  
ハ秀政



秀吉ハ秀家藤孝等ヲ附屬トス

翌年ヨリ長秀恒興所司代ヲ置カズ

中川清秀

天正十年六月二十七日

八〇二

ク、秀吉ハ先君ヨリ賜リシ國郡ノ外、新ニ一郡是ヲモ受ス。唯備前、美作兩國主、浮田八郎秀家、丹後ノ國主長岡兵部大輔藤孝等ヲ附屬トシ、潔白ニ庶事沙汰セラル。是ヨリシテ秀吉ノ威望遂日超越シ、翌ル孟春ヨリ丹羽、池田モ遠慮ノ所司代ヲ置ス。秀吉ノ所司代ノミ永ク在京セシムト云云。武徳編年集成同

〔豐後 中川家譜〕

坤

瀬兵衛源清秀

天正七

同年八月十三日、柴田修理亮勝家、丹

羽五郎左衛門長秀、池田勝入、羽柴筑前守秀吉ヲ始メ、其餘ノ諸將ト同ク、岐阜ニ參會シ、織田信長ノ嫡孫織田三法師ヲ嗣子トシ、安土ニ居ヘ、北畠中將信雄、神戸三七信孝是ヲ攝シ、政事ハ勝家長秀、勝入、秀吉ノ四老裁斷スヘシト、評定一決シテ各退散ス。

〔日本耶蘇會年報〕

〔歐文材料第九號譯文〕

一五八二年八月三年及八四年の日本通信

一五八三年二月十三日 天正十一年正月十一日ニ當ル

附、口ノ津發、ルイス・フロイ

スより、耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、  
此頃岐阜の町にありし、バードレ・グレゴリオ・オ・デ・セス・ペデス如何になりし

か知れざる爲め、我徒は大なる不安の中にありしが、昨日一通の手紙到着せり、書中に述べし所は、大要左の如し、

信長の凶報達せし時、彼は岐阜に在らず、同所より七里離れし大垣と云ふ所の、チオネと云ふ老人の家に在りき、チオネは甚だ良きキリシタンにして、信長の一子を養育したることあり、彼の賢明なりしに依り、美濃の國中騷擾したるに、此地のみは頗る平和なりき、バードレ・グレゴリオは、此地に於て頗る幸福に日を過したり、信長の凶報達するや、岐阜に於ては、太子の宮殿掠奪せられ、諸侯の一人城を占領せり、されど何れに味方するか發表せざりき、

この君侯は、（補註）ツケンシウの派に屬し、諸宗派中にて最も頑固にして、又最もキリスト教を迫害するものなりしが故に、直に我等の住所及び會堂を家臣の一人に與へたり、（補註）裝飾品は既に安全の地に運ばれしが、彼は忽ち之を破壊し、薪に用ゐたり、今後五六日中に、信長の葬儀を營まん爲め、諸侯悉く都に集合すべしと云ふ、されど何人が帝位を相續すべきか未だ明ならず、多くの人は、三七なるべく、少くとも死せし太子の幼兒約一歳なる者の成

天正十年六月二十七日

八〇三

大垣ニハ騷擾ナシ

齋藤玄蕃允岐卓ヲ占領ス

信孝嗣立風説



信孝嗣立  
セバ耶蘇  
教ニ都合  
ヨシ

天正十年六月二十七日

八〇四

人するまでは然るべしと云へり、所領及び國々の分配には、困難あれば、噂之に止らざるべし、我等の主は、最も御用に立つ様處理し給ふべし、人間的に語らんには、政權若し三七の手に來らば、布教上に大なる効果を齎すべし、是れ屢書きし如く、我等の大なる友たることを示したればなり、彼は數月前、日本人ロレンゾより得たる、祝福されたる珠數を其帶に附けたり、彼はキリシタンならずして、此の珠數を帯びたる理由を尋ねられし時、彼の父の聞に達せしめん爲め、之をなしたり、若し之を不問に附したらば、己の欲する時、洗禮を受くるも自由なるべしと答へたり、右は彼が未だ身分卑しく、前記諸國を父君より與へられざりし時の事にして、今や彼既に殆ど王の如くなりたれば、彼の父が爲せし如く、彼も亦傲慢となるべきか知らざれども、若し此の如くならば、天罰彼にも到らん、信長に就きて之れを見れば、神罰極めて明白なり、其驕奢を極めたる建物は、大なる富と無量の財寶と共に、不幸にも焼失せり、彼は生來吝嗇なりしのみならず、貪慾にして、珍品を所持する者あるを知れば、人を遣して之を求めしめ、之を拒むことを能くする者なく、止むを得ず、其請ふに任せ、喜んで之を獻じたり、

信長ハ吝  
貪ニシテ  
食慾ナリ

光秀ハ傲  
慢ナルコト  
ト信長ト  
同シ

日本人のイルマン・ヴァイセンテは、克く此事を知れるが、此等珍品中二つは、我が歐洲のと大に異なれど、三萬五千スクード餘の價ありしが、今は一つも残る物なし、信長が最後に都に來りし時、諸王及び君主等に見せん爲めとて、殆んど悉く彼と共に携へたれば、彼と共に焼亡せり、此の如くして、世界は勿論、天上にも我より大なる君なしと思ひし人の最期は、甚だ不幸にして、明智は傲慢なることも、彼と同様なりしが、不運に於ても亦彼と伍を同じくし、二人の土民に殺され、盲目なる異教徒等の名譽とする切腹すら行ふ能はざりき、○上下略、坂本落城、及ビ信長ノ滅亡ニ關スル、本月初十日、及ビ同日ノ條ニ收ム、

〔日本耶蘇會年報〕

〔歐文材料第十號譯文〕

一五八二年、八三年及八四年の日本通信

一五八四年一月二日○天正十一年十一月二十日ニ當ル、一附、長崎發、ルイス・フロイスより耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、

政治及び信長の死の事、

戦亂の事に關しては、後天下の諸國に於て、最も優勢なりしは、羽柴筑前殿

天正十年六月二十七日

八〇五



秀吉ノ專横

信雄秀吉ニ從フ

秀吉ハ鄙賤ノ生レ

天正十年六月二十七日

八〇六

なり、此人は始め信長の名義にて山口の王と戦ひたり、彼は已が事を一層好く處理せん爲、甚だ幼稚なる信長の孫を擁し、君主の稱號を附して、之を安土に置き、伊勢の王オチャセンフゼンドノと稱する信長の第二子を後見人とし、其威儀を整へしが、全く表面上のみにして、羽柴は一切の支配をなし、其欲する所を行ひ、伊勢の王も亦之に屈從せり、然る後、羽柴は柴田池田及び丹羽(長宗)五郎左衛門等信長の主要なる大將と、諸國及び其收入を自由に分割せり、

〔訂正 日本西教史〕

第八章 (歐文材料第十一號譯文)

信長ノ爲メ復讐セル羽柴ハ、自ラ其帝國ノ主トナランコトヲ欲シ、其ノ目的ヲ達スルニ緊要ノ策ヲ盡シタリ、此人ハ元來鄙賤ノ生ニシテ、日本ノ歴史ヲ按ズルニ、此人ノ生業ハ樵夫ニシテ、森林ニ於テ樹木ヲ伐リ、其食ヲ求メン爲メ、毎日一擔ヲ肩ニシ市街ニ出テタリト云フ、又フロイス師ノ日本ヨリ送りタル書翰ニモ、羽柴ハ屢自ラ冒險ノ事ヲ語り、鄙賤ヨリ國君トナリシコトヲ述ヘタリトアリ、又此人ハ極メテ智略ト勇氣アルヲ以テ、衆人勸メテ武藝ヲ學ハシメ、因テ或ル隊長ニ從屬シ、戰ニ向フ毎ニ軍功アリ、自

信雄ハ痴愚ニシテ、信孝ハ勇氣アリ、モ兵力ナシ、財力ナシ、野望ナシ

信孝秀吉ノ謀ヲ悟ル

ラ勇氣ヲ顯ハシ、又統率ニ長セリ、故ニ信長之ヲ拔擢シテ國主トナシ、爾後屢戰爭ニ於テ勝利ヲ得、信長之ヲ副將トシテ、全軍ノ指揮ヲ委ネタリ、羽柴ハ非常ノ大望アリ、其主君ハ死シ、血統ノ男子三人アレ、(信忠)長子ハ三歳ノ幼兒ヲ殘シ、父ト共ニ殺サレ、(信雄)次子ハ痴愚ニシテ、(信孝)第三子ハ勇氣アリト雖モ兵力ナク、又財用ニ乏シケレハ、之ニ一國ヲ授ケレハ、彼モ亦満足ス可シト爲シ、自ラ帝國ノ主トナランコトヲ期セリ、此望ヲ果サンカ爲メ、先ツ諸將ノ心ヲ量リ、人心己ニ歸スルコト、信長ニ服從スル如クナルヲ知レリ、然レモ猶己ノ大望ヲ掩ハン爲メ、帝國ノ繼嗣タル幼少ノ公子ヲ立テ、自ラ後見執政トナリ、又嗣子ニ適當ナル從者ヲ附シ、一城ニ置キタリ、信長ノ第三子ハ忽チ羽柴ノ謀ヲ悟リ、其父ノ臣タル者國中ノ政權ヲ擅ニスルコトヲ惡ミ、終ニ羽柴ノ威權ヲ猜ミ、敵意ヲ抱ク大諸侯等ト同盟ス、然レトモ其企圖ヲ遂クルコト能ハス、如何トナレハ、羽柴ハ軍事ニ精通シ、且強兵ヲ有スレハ、力ヲ勞セスシテ之ヲ敗リ、苟モ己ノ企圖ニ反抗スル所ノ者ハ、悉ク殺サシメタレハナリ、

○勝家、秀吉等ノ清洲ニ會スル月日詳ナラズ、本月二十七日附、堀秀政

天正十年六月二十七日

八〇七



宛、勝家等連署ノ三法師臺所料所安堵狀及ビ高山長房宛、勝家等連署ノ知行宛行狀ニ據リテ、姑ク是日ニ掲グ、

〔参考〕

〔細川忠興軍功記〕

一尾州清洲へ秀吉公、柴田修理亮勝家殿、御參會之上、御國割を被成筈に付、織田三七様も岐阜より清洲へ被成御出、秀吉公、丹羽五郎左衛門殿、池田勝入、此御衆も前廣より御出候て、柴田殿御待候由之事、

一柴田殿清洲へ御著之日限相聞へ申日、植原次郎右衛門、廣間へ常眞様、三七様、秀吉公、五郎左衛門殿、池田勝入御出被成候間、柴田殿被參候を御待候、廣間之庭に、信長様、城之助様御侍衆、大小共に八百計詰込被居申由之事、右同、

一柴田殿塀重門より入被申候、供之侍三百計御座候、柴田殿縁へ上り、角柱にもたれ被居候、柱之下に柴田殿三人之甥共詰懸居申由之事、

一常眞様、三七様の御座敷之間之内に御座候、秀吉公の前かごより縁輪に御座候、池田殿、五郎左衛門殿の前廣より御座之間に御詰被成候事、右同、

秀吉等勝家ノ到着ナ定ム

勝家怒ル

秀吉勝家ニ抗ス

信孝秀吉ヲ風呂ニ招ク

秀吉急ギ間道ヲ經テ長濱ニ歸ル

一秀吉公、勝家へ被仰候、修理殿御出待、御國割可仕と存候得共、遅り御出に付、御兩人様急御國割仕候得と被仰候、常眞様の尾州北伊勢を加へ進上申候と被仰候に付、御望之如く進上仕候、三七様の濃州に南近江をくはへ進上申様に被仰候、如御望に進上仕候と被仰候得、我に談合なしに國割たてをいてくれい、其つれするなら、頭邊迄押してくれうと勝家被申候、秀吉公返答、我う頭邊押事成間敷候、上の御弔合戦、我か仕候、笑敷事申と被仰候、其儘池田殿、五郎左衛門殿、中間へ御入被成候、御兄弟様も御立寄被成被仰候、兩人之衆魚と水の様に有之候てこそ、兄弟の爲に候、左様之仕合無體と被仰候、其時池田殿、丹羽殿は、ひはら急御盃出し候へと被仰、盃出申候、雙方之盃御取替し被成、静り申候由之事、右同、

一三七様、秀吉公へ被仰候、明日は修理も國下可被申候、其方も長濱へ歸可被申候、然、岐阜よて風呂を可被仰付候、立寄可被申候と被仰候、秀吉公明る未明に清洲御立被成、洲股へ馬上御壹人にて御著被成候、洲の股の御代官佐脇作左衛門親類仕候、則秀吉公御立寄被成、湯漬をあかり、馬



より亭主の馬に御乗被成、夫より鈴鹿を左になし、水口を御通り被成、其日の八幡山へ御出にて、其夜船にて長濱へ御著被成、柴田殿御歸御待請被成候由之事、○下略、勝家歸國ノコト、カ、ル、次ノ條ニ收ム、

〔新撰豊臣實錄〕

六 秀吉羅厄 附 分守信長遺跡部

今茲六月二日、織田信忠自殺于二條新御所、今按、在洛陽、鹿園、院、義輝室町家、數代之舊、滿至光源、祿八年乙丑五月、爲三好之悉燒失、爾來源義昭滅後、信長再營、獻誠仁、時命前親王御池、御亭、今般信忠以急遽不違、搆去妙覺寺、旅館、遂戰死于此、田玄以齋院是也、按、總善、曰、汝去之速、赴濃州岐阜、伴夫人并三郎、今按、信忠嫡子、時中、納言秀信、有幼弟、後、移尾州清洲城、與長谷川丹波守勤心育之、以一立相續之功、玄以雖荐請殉死、以嚴命不許、不得已奉言至岐阜、携夫人與幼君移清洲城矣、同月中旬、秀吉於華洛拾信長之骸骨、假納大德寺、而後尙討光秀殘黨、時北畠信雄、織田信孝亦拖兵來吉從、（秀脫力）二子往坂本、深感秀吉之碩勳、先授坂本於秀吉、秀吉固辭讓于丹羽長秀、斯時濃州數壘各反、然以秀吉密策、援稻葉山城、今按、未詳其、國內頗平均、乃占每城之質、而後到參河信濃之境、俾之悉服、以出質、於是尾州質與清洲城獻信雄、以濃州質與岐阜城獻信孝、尙分兵征諸方、六月下旬、秀吉與長秀共欲往清洲、見三法師、柴田勝家頃門在越中、擊凶賊、既聞信

信雄信孝  
坂本ヲ秀吉  
吉ニ與フ  
秀吉長秀  
ニ讓ル

勝家秀吉  
ト長秀ト  
ナ禁綱ス  
トノ説

秀吉再行  
清洲ニ行  
クトノ説

勝家自筆  
テラ  
執筆シテ  
ナ分目録  
作ル

長之變、頻拂賊欲誅光秀、怒赴京師、然以信孝秀吉遮馳羽檄、告忽礫光秀、六月十六日、勝家直往清洲、見三法師、即使從兵嚴守當城、秀吉、長秀亦來、時勝家俾秀吉、長秀俄襲閉所、禁之不出城、今按、勝家本惡秀吉、兩將失手、不知所爲焉、秀吉與長秀續踵寢、追深更秀吉竊囑長秀曰、汝宜速遁出、廻籌於帷幄之中、以振威於千里之外、我尙留之、汝威若遠募、則彼必不害我、是所謂居死得生之策也、長秀善之曰、卿之威武、慄俾甚過、我請留之、汝速遜之、致大謀、今按、秀吉本待此、答、勝家於是亦非、怕長秀、實、在、秀吉捨兩刀、竊庖庭、忍著蓑笠、擔水桶、似黃頭郎、曉出城、衛士亦不怪之、終出郭外、然以道路不得安去、賴農夫之來往、隱稿馬之交、自殊路經濃州、長松到近江長濱、即馳使通勝家、大驚、不得止許、長秀、勝家又寄使秀吉、今般欲與諸將共嚴盟、以發究當家相續之計、秀吉亦必來于此、故七月上旬、秀吉拖軍設備、又往清洲、今按、秀吉既雖爲勝家被劫、爲不知、池田勝入信輝父子、丹羽五郎左衛門長秀、瀧川左近將監一益、蜂屋出羽守賴隆、筒井順慶以下、凡信長之舊臣咸見幼主、今按、指三法、謹弔先君、信忠、後、信長、之餘、各滴悲淚、於是諸老胥議曰、幼主至十五歲之際、各假領闕國空地、以正其政、勝家自執筆記之、其目錄云、近江地三十萬石、豫擬幼主遊獵場、尾張附信雄、美濃附信孝、近江長濱附柴



天正十年六月二十七日

八二二

秀吉清秀  
與一國  
下イフ  
勝家之  
斥ク

秀吉怒ル  
長秀等之  
ヲ止ム  
家康成政  
等モ參會  
ストノ説  
諸將ノ誓  
誓書ノ内  
容

田勝家今按、後勝家養子柴田伊賀丹波附羽柴秀吉攝津大阪尼崎兵庫今按、三所按  
凡十二附池田勝入同之助若狹及近江高嶋志賀二郡附丹羽長秀且祿五万  
石加增瀧川一益今按、時領北伊勢三萬石加增蜂屋瀨隆其餘尙綿々今按、斯外所々  
之云々今按、頗屬秀吉進曰如中川瀨兵衛今按、時領七萬石自先君在世以降數年之勳勞不  
可勝算佗後尙欲安天下則捨彼輩其誰哉請俾擇關國一州以領二十四五萬  
石則可耶勝家褰衣露臂大怒曰余所思者甚異子所言者若夫以如清秀爲有  
勞擲二十四五万石則當家濟々忠士之中不有不出其上且夫如秀吉克顧古  
之藤吉可也縱令雖假虎威以列驥尾於天下事聊非汝所誅曷不緘口任世臣  
之志欲舉指鬪匪之勢筆飛墨汁誤濺秀吉額秀吉不堪忿懷握刀將廝鬪丹羽  
長秀堀秀政等強留之即席使之迭和平今按、秀吉勝家之矛盾蓋起蓋奉三法  
師自清洲移安土長谷川丹波守前田玄以依信忠遺命爲之樽家康公及佐々  
內藏助成政亦來安土胥議焉今般會集列侯各載書血判相盟曰今按、信雄信  
勝家欲立信秀及四方藩屏信長舊臣各誓書始因信長既薨家康公欲立信雄  
吉執諸將誓佗後嚴絕詐專真忘利勤義捨怨從公曷嫌深交惠孤佐急以爲幼  
君共平天下永付無窮佗事悉據先君之政若違之者受罰忽如誓書乃各歸國

時勝家以前日既欲殺秀吉今恐過長濱到美濃垂井踟躕不進秀吉聞曰吾何  
爲妄犯勝家其勿恐焉乃使於次秀勝爲質於此勝家携於次丸經木本而歸秀  
勝自木本歸秀吉亦歸京也

蓋惟秀吉議群侯欲立三歲幼主者天下平安而信長信忠以順薨則可也既  
逆死而邦未治且上有侯群侯力睨國郡思僭立下有凶賊覬蕭牆欲盜奪以甚危丁  
斯時縱令雖繼子爲壯歲猶危况於幼主哉秀吉強欲立之者實假霸道而  
振私威其志他後自欲吞天下者必矣若以義論之則家康公欲立信雄者尤  
當時之權道耶勝家欲立其偏執不足論焉佐々成政亦其志專欲立信雄與  
家康公共計之遂所以傲于志津嶽困于小牧山役于越中之素志蓋起于此  
已矣

〔總見記〕二十 先君御家督定事

同年ノ秋尾州清洲ノ城ニ於テ諸公子諸將吏會合有テ故大臣家御遺跡天  
下一統ノ武主ヲ相立ツベキノ由各評議セシムル處ニ群談シバラク一決  
セズ柴田池田丹羽羽柴ノ輩心々ニ意趣ヲ述ルニ先ヅ北畠殿信雄卿ハ先  
君ノ二男ニ定ラルト云ヘ凡今度光秀退治ノ將ニ非ズ又三七郎殿信孝ハ

天正十年六月二十七日

八二三

秀吉ノ野  
望

信雄ハ二  
男ナレド  
モ光秀討  
伐ノ功ナ



信孝ハ光  
秀謀伐ノ  
功アレド  
モ三男ナ  
リ

信長夫人  
齋藤氏ニ  
子ナシ

信長生駒  
氏ノ田信  
忠ヲ嫡子  
トス

信雄モ生  
駒氏ノ出

信孝ハ坂  
氏ノ出

信孝ハ信  
雄ヨリ先  
ニ生レタ  
レドモ三  
男ニ定メ  
ラル

天正十年六月二十七日

八一四

今度光秀退治ノ時、自身手ヲ碎キ、一戰ニ打勝玉フト云ヘ、先君是ヲ三男ニ定置カル、其上此兩將兄弟故有テ常ニ不和ナリ、若一方ヲ立ルナラバ、必諍論出來テ天下ノ亂ト成ベキ者歟、其來由ヲ相尋ルニ、宿意ノ趣揭焉トシテ一朝一夕ノ故ニアラズ、抑故大臣家ノ御臺所ハ、齋藤山城入道道三ノ息女ナレ、御子ナキニ依テ、故三位中將殿ノ妾腹ニ生レ玉ヒケルヲ、長子タルニ依テ、是ヲ御臺ノ御養君トシ、故大臣家ノ嫡男トス、實母ハ尾州生駒氏ニテ弘治三年ノ出生ナリ、翌永祿元年戊午、一月ノ内ニ、故大臣家二人ノ公達生レ玉フ、先一人ハ三助殿信雄卿是ナリ、是モ生駒氏ノ女ノ腹ニテ、故三位中將殿ト御同母ニテマシマス、故ニ皆人はヲ崇敬シ、御出生ノ事早速故大臣家ノ台聽ニ達スル故、是ヲ二男ニ相定メラレ、訖ヌ、今一人ハ坂氏ノ娘ノ腹ニテ三七殿信孝ナリ、此母儀凡下ノ人ナル程ニ、熱田ノ神司岡本ガ宅ニテ生レ玉フ、信雄卿ヨリ信孝ハ廿餘日先立テ生レ玉フトイヘ、元來母儀賤シキ人ナル故ニ、即時ニハ大臣家ノ御耳ニ達セズ、久シク披露スル者ナク、遙ニ程經テ後、岡本ガ子太郎右衛門清洲ニ參テ此由ヲ言上ス、故大臣家遅ク聞召サレシ故ニ、其時はヲバ三男ニト御定メアリ、是ニ依テ信孝常

信雄信孝  
ハ何レモ  
後嗣ト定  
メ難シ  
衆議秀信  
ヲ立ツ

ニ鬱憤ヲ狭ミ、我大臣ノ二男タリト云ヘ、不幸ニシテ信雄ニ越サレ、三男ト成シ、事無念ノ最一ナル者ナリ、アハレ變異モアレ、我信雄ニ指越スベシト思召サレタル事久シ、然ルニ今度ハ一戰ノ將トシテ光秀ヲ討捕リ、父君ノ仇ヲ報セラル、義一方ナラヌ大功ナレバ、天下ノ武主ニハ我立ツベシト御内存アル者ナレ、信雄卿ハ二男ナレバ、又是ヲ指除ガタシ、サレバ此二君ノ内、シ非テ一方ヲ立奉ラバ、騷動忽至ラン事ヲ諸老臣等案ジ煩ラフ、是ニ依テ又各評定シテ一決ノ趣ハ、故三位中將殿ノ御子、三法師殿ノ御事ハ、故大臣家ノ嫡孫ニテ、幼少タリト云ヘ、當家ノ長子ニ立テ、天下ノ武主ニ仰ガン事、是以紛レアルベカラズ、誰人カ是ヲ争ベケンヤ、今本朝戰國ニシテ、都鄙未ダ一統セザル間、幼主執權ノ政道如何ナレ、兄弟ノ争ヒ出來テ、一家ノ諍亂アラシヨリハ、三法師殿ヲ主人ニ定メ、先ツ岐阜ノ城ニ移シ申シ、安土ノ城ノ燒跡ニ又新御所ヲ造營シテ、是ヘ御安座アラシメ申シテ、譜代ノ御家人崇敬セシメ、信雄、信孝兩將ヲ彼後見ニ相定メ、柴田修理進勝家、池田紀伊守信輝、惟住五郎左衛門長秀、羽柴筑前守秀吉、此四老相談シテ、都鄙小大トナク政道ヲ執行ヒ、外邊ノ順ハザルヲ平ゲ、天下ヲ一統スベシ

天正十年六月二十七日

八一五



ト云云、○下略、關國處分ノコトニカ、ル、前掲太閤記ニ大抵同シ、但シ惟住長秀ノ次ニ、江州佐和山、堀久太郎秀政トアリ、

〔北畠物語〕 七 家督諍論の事

天正十年の秋諸家會合まゝ、信長公の御家督をさぶめんと欲せしむるに、信雄と信孝と諍論あをよび落著をば、信孝亡君のあゝをうち給ふといへども、三男あり、信雄の敵をうちたまひまごをば、次男あり、諸將是非をさきまへがとさきゆへ、先兩大將を立言、信雄を尾州清洲の城あうつし、尾張八郡の諸さふらひおせよまよくと、信孝の濃州岐阜の城あうつし、美濃八郡の諸さふらひおせよまよくと、柴田、羽柴、丹羽、池田を以て惣奉行とせ、又勢州松ヶ嶋の城の、信雄卿武衛の子孫津川玄番頭(近治)を給り、南方の奉行とせ、神戸の城の、信孝一腹の舎兄小嶋兵部少輔(近治)たまひり、北方の奉行とせ、

家督評定の事

信雄、信孝家督論まよつと、同年の秋諸大名清洲に會し、評定一決のうへ、故信忠卿の若君三郎丸生年三歳に成給ふを主君と仰ぎ、安土の城あうつし奉り、信雄、信孝御兩人としくおせを守立たまふべしとあり、おせあよつと信雄、信孝をいじめ、其外の諸さふらひ誓紙をいじめ入質を出す、但彼若君

津川近治  
小嶋兵部少輔

半月ノ立  
物

氏郷布施  
所領ナシ  
ヘラル  
所領ナシ  
與

の岐阜よりあり、日をるゝ後、信孝軍前の議定を用給とせ、諸大名より急々若君をすへ給べきよし催促せといへども、信孝はあゝ同心あゝ、柴田、佐々木等まよとせしと、ひとへは天下をうばんとし給ひせる、○下略、信孝誕生ノ大抵同シ、

〔蒲生記〕 上

信長公御自害事 付 日野籠城事

略○上 去程ニ信雄、氏郷同道有テ上洛シ給フニ、氏郷ノ侍共ハ、皆半月ノ立物打タリケリ、信孝、秀吉ニ參會シ玉へハ、互ニ先、故信長公御事ヲ宣ヒケリ、秀吉、氏郷ノ手ヲ取テ、今度籠城ノ事承及候ヌ、最信長公ノ御婿ト申ナカラ、功ナキ時ハ其ニハヨラヌ者ニテ候カ、噫張高名哉トソ被感ケル、其後瀧川左近將監一益モ關東ヨリ上著セラレテケリ、去程ニ諸大名評定ノ、信雄ハ敵ト合戦シ給ハ子氏、此ハ次男ニテ御座ス、信孝ハ父公ノ讎ヲハ討玉へ氏、彼ハ三男ニテ御在ス、御名代ヲ何レ氏辨兼タリトテ、○中略、信雄ヲ尾張ニ封コト等ニカ、ル、前掲、明智一味シケル者共、皆所領ヲ沒收セラレケルニ、布北畠物語ニ大抵同シ、施忠兵衛尉所領五千石ハ氏郷ヘソ付ラレケル、是ヲ氏郷、稻田數馬助貞右ニ被與ケリ、其時布施ト氏郷中ヲ違テ、内室ヲモ取返シ、偕コソ關右兵衛尉

天正十年六月二十七日



方へソ被遣ケル、○蒲生軍記大抵同シ、群書類從所收蒲生氏郷記此條ナシ

〔増補筒井家記〕

乾

安土ニ三法師、尾州清須ニ中將信雄、濃州岐阜ニ侍從

信孝、丹波ハ信長公ノ四男筑州ノ養子於次丸秀勝領シ、西近江ハ丹羽五郎

左衛門長秀領ス、則坂本城ヲ修復シテ在城ス、順慶ハ今度ノ合戦功拔群ニ

テ和州ニ歸ル、羽柴筑前守ハ大坂ニ在城シテ京都ヲ經營セリ、○上下略、秀

黨ヲ亡スコト、及ビ長岡藤孝、信長追福ノ連歌會ヲ興行スルコト等ニカ、ル、本月十四日ノ條、并ニ七月二十日ノ條ニ收ム、

〔武家事紀〕

九續集譜傳四

惣見院殿織田信長公

勝家ハ越中ノ魚津、松倉兩城ヲ攻居ケル處へ、上方ノ沙汰キコヘケレハ、乃

越中ヲハ打捨、急キ越前ニカヘル、越中能登イツレモ、一揆蜂起イタシヤス

ク、コトニハ上杉景勝時節ヲ伺比ケルカユヘニ、佐々成政、前田利家ハ上洛

ニ不及旨、堅ク示シ合セ、佐久間玄蕃カ能州ヨリ來ルヲ待合、柴田三左衛門

尉、（佐久間玄蕃）同久右衛門尉、久六ヲ召連上洛ス、信孝、秀吉既ニ光秀ヲ討、信忠卿ノ嫡子

三法師殿尾州清洲ニ居玉イ、上方靜謐ノ由、柳瀬ニ至テ聞ユ、コ、ニヲイテ

直ニ勝家モ清洲ニ趣ムク、此旨秀吉キイテ、ワサト途中マテ自迎ニ出テ馳

走、秀吉ハ下馬、コウバイニハクノユリウラノ羽織ヲ著禮ヲアツクス、勝家

ハ剃髮、淺黄手拭ニテ、ハチマキ、アラナワニテ刀ノ柄ヲマキタルヲ帶シ、馬

上ニテコロノ度ノ次第ヲタツネ、ソレヨリ勝家ハ清洲ニ入、秀吉モツ、イテ

清洲ニ出、

秋七月朔日、信雄、信孝會柴田勝家、瀧川一益、惟住長秀、池田信輝、及羽柴秀吉、

同盟於清洲城、建其君秀信、秀吉既ニ江州濃州マテ平均セシメ、尾州清洲ニ

出ツ、清洲ニハ前田玄以、信忠卿ノ遺命ヲ承テ、嫡子三法師于時三歲、後任子中納言、號秀信

岐阜ヨリ清洲ニウツシマイラセテ守護ス、是ニ因テ大名皆清洲ニアツマ

ル、信孝江州ヨリ清洲ニ出、信雄伊賀伊勢ヲ平均セシメテ清洲ニ出、丹羽長

秀、池田信輝ハ、信孝ニ從テコ、ニ至ル瀧川モ關東ヨリ出來ル、シカレトモ

柴田勝家北國ヨリ未來ヲ以テ、諸事キワマラス、而シテ勝家昨三十日ニ來

ルユヘニ、寒温相スミテ、信雄先酒盃ヲス、ム、秀吉曰ク、今日ハ天下第一ノ

談合ゴトニ候間、議論相スミテ後酒盃ヲス、メラルヘシト、コレヲ留テ、サ

テ天下ノ人君イツレヲ立マイラセテ、信長公ノ相續トナスヘキコトヲ議

ス、○中略、信雄、信孝ノ誕生及ビ戰功ヲ述ベ、何レモ後、何レノ道ニモ、物ニ嗣ト定メ難キコトニカ、ル、前掲總見記ニ大抵同シ、其正統ノアルコトナレハ、信雄、信孝ヲサシヲカレテ、信忠卿ノ嫡子ヲ立申

天正十年六月二十七日

清洲會議  
七月一日

秀吉途ニ  
勝家ヲ迎  
フトノ説

筒井順慶



權威勝家  
ニ並ブモ  
ノナシ

天正十年六月二十七日

八二〇

サレノ事可然ト也、勝家大ニ怒テ秀吉ヲ惡口シ、己レカ分ヲ不知ノ不入コトニ口入イタストコレヲ罵、秀吉禮ヲアツクシ、各心底ヲ申スマテノ事也、其上ノ儀ハ賢慮ニアルヘキ由閉口ス、ソノ比天下ノ權威武義、信長公ノ下ニ勝家ニ比フヘキ侍ナク、タレモ柴田カ前ニテ是非ヲ云大名ハ無之、コトニ佐久間玄蕃允政盛（政下同シ）柴田三左衛門、同久右衛門、久六、四人ノ甥、勝家ニヒキノイテ人マセモセス輔佐セシメケレハ、宿老ノ面々モ口ヲツクム、秀吉シハラク次ノ間ニ退テ休息ノアトニテ、各相議スレトモ事決セス、多クハ秀吉云處ヲ是ナリトスルニ至ル、勝家ハ元信孝ヲ引トイヘトモ、秀吉ノ議スル處正義ナレハ、信孝ニ決シカタシ、ツイニ三法師ヲ立マイラセンニキワマル、是ニ因テ秀吉ヲ招テ勝家告ケルハ、各ノ談合スル處モ其方申ス如ク、三法師ヲ嗣君ト仰キ奉ルヘシ、シカラハ闕國ノ儀、各此上ノ相談可然トノコト也、因テ宿老衆相議シ、江州三十萬石ヲ三法師君ノ臺所料トシ、尾張一國ヲ人質トモニ信雄ノ領國トシテ、清洲ニ居城、美濃一國ハ人質トモニ信孝ノ領國、居城ハ岐阜、志賀、高島二郡ニ大溝、坂本ハ丹羽長秀、大溝者元織田信澄殺之居城也、長秀、丹波ハ次丸秀勝、秀吉養子攝州大坂ハ池田信輝、江州佐和山ハ堀

勝家近江  
北郡ヲ領  
フセントイ

秀吉柴田  
勝豐ニ與  
フセントイ

久太郎秀政、（常川）益五萬石ノ加増ニテ京都ノ所司代タルベシ、蜂屋出羽守ハ三萬石ノ加増タルヘシト、秀吉決定ノ云ヘリ、勝家ウシロムイテ大ニ笑、秀吉又推參ヲイタシ、國割ヲ一人ニテ取サハクコト尤奇怪也、自餘ノ儀ハトモアレ、江州北郡ハ柴田領スヘシ、長濱ハ佐久間玄蕃允ニトラスルホトニ、秀吉早々可渡ト云、秀吉云ク、長濱ハ某久シクスマアラシ、堀久太郎コレニ居城ストイヘトモ、城ノ普譜アレテ、中々政盛ナトヘミセ申スヘキ體ニテ無之、同儀ナレトモ、柴田伊賀守勝豐ハ古ヨリ親友タリ、其上政盛ハ既ニ大國ノ守護タリ、勝豐ハ小身ニモアレハ、是ヘ進シ申シタキトノコト也、勝家、イツレモ同シ甥ナレハ、ソレハ秀吉望ニマカスヘシト也、秀吉又願テ云、各存知ノ通り、小者一僕ノ某ヲ、如此トリ立玉フ某事ニ候ヘハ、手足ノツ、クホト三法師君ヘツカヘ奉ルヘキ志ニ候間、乃某三法師君ノ抱傳ニ罷成候テ馳走可仕、次ニハ信長公御弔ノ儀、幸御次丸ノ執行ノ志ニ候、此段御免アルヘシト、勝家へ願フ、勝家領掌ス、左アランニハ各血判ノ誓書ヲナシ、三法師ハマツ岐阜へ入マイラセ、ソレヨリ安土へウツシマイラセテ、長谷川丹波守、前田玄以ヲ以テ傳トシ、一味同心ニ嗣君ヲ輔佐セシメ、表裏別心、拔公

天正十年六月二十七日

八二一



秀吉長濱ニ歸ル

事無之コトク可然トテ、信孝、信雄ヲハシメ、宿老四人秀吉トモニ血判ノ誓紙ヲ以テ、各其志ヲ一ニシ、而シテ其日ハ酒宴ニ及ヒ、勝家數盃ヲ傾ク、其夜秀吉ハ丹羽長秀ニ示シ合セテ、ヒソカニ長濱へ歸ル、翌二日勝家沈醉ノ上、久ノ起、各又相聚テ政務ヲ談ス、トキニ秀吉不來、勝家、丹羽長秀ニ向テ、秀吉コトハリモナク退去ハ、昨日長濱ヲ取上ラレタルニ付テ、無面目存シテ早く退去セルニヤト云、長秀云ク、至ク左ニハ非ス、某ニ申置候ハ、長濱久シク修復モナク見苦間、急彼地ニカヘリ、方々申付テ引渡シ可申タメニ退出ト云、而シテ日各三法師君へ御禮イタシ、分國へカヘル、秀吉ハ美濃ノ菩提(不談也)ヨリ、竹中ニ逢テ直ニ長濱へ行玉ト、スイシヤウノ間、日吉ノ社ニ急キ茶屋ヲカマヘシメ、勝家下向ノ時分コレヲ馳走ノタメナリ、長濱ニハ御次丸時十一ヲノコシ、古田肥前守織部正ヲ留守居トイタシ出京也、カクテ柴田勝家越前へ歸ル、長濱ヨリ人衆ヲ出シ、勝家ヲサヘキリ留コト可有之ト、遠慮ニ付テ、三日マテ道ニツカヘ、日比三十郎ヲ使ニシテ、長濱之様子ヲウカ、ハシム、秀吉カネテ其心得アリケレハ、乃次丸ヲ日吉ノ社マテ出シ、少モ氣遣ナキコトク馳走アリ、次丸ノカイソヘニハ藤掛三河守ナリ、勝家大ニ悅

秀吉途ニ竹中重治ヲ訪フ

テ次丸ニ禮謝シ、日吉ノ社ニテ馳走ヲウケ、又長濱へ使者ヲ以テ秀吉ニ謝ス、秀吉留守ニテ、古田乃秀吉ニカワリテ返答ス、而勝家モ北國ニ歸著也或云、勝家來長濱城非也、ト云ハ、信雄ハ松島ヨリ清洲ニウツリ、松島城ヲ津川玄蕃頭ニ與テ、伊勢南方ノ奉行タラシム、信孝ハ神戸ヨリ岐阜ニ移テ、神戸ヲ小島兵部大輔ニ與テ、伊勢北方ノ奉行タラシム、小島者、信孝一腹之舍兄、秀吉ヤカテ上洛シ、山崎寶寺ヲカマヘテ城郭ヲ築ク、播州姫路、丹波龜山ノツナキノタメニコレヲカマヘテ、今年ハコ、ヲ以テ居所トセンコトヲ欲ス、是ハ秀吉上洛ノトキノ居住所ノタメナリ、

秀吉信雄ヲ推ス

勝家ハ信孝ヲ薦ム

〔武功雜記〕

三

明智日向守ヲ誅伐以後、大閤オホシメスハ、向後天下ハ尾張内府信雄ノシロシメサル、事可然トノ事也、扱信忠ノ若君ヲハ、安土ノ燒跡へウツシ置タテマツリ、九月ノ末イヅレモ安土へ參會シテ、天下ノ儀相談ナリ、柴田勝家ノ料簡ハ、神戸三七信孝ノシロシメサル、事可然ナリ、信雄ハ既ニ尾州五郡ノ主ナリ、信孝ハ勢州神戸五萬石ヲ領セラル、明智ヲ御付四國へ被遣筈ニ候へトモ、伊豫ハカリ少御手ニ入り、其外ハ御手ニ不入、其時信孝堺ニテ明智ヲ御待候内ニ、明智逆心ヲ起シタリ、トカク天下ノ



天正十年六月二十七日

儀ハ信孝可然トナリ、從是挨拶及相違テ、柴田ト大閤互ニ怒ヲフクム、其時丹羽長秀、大閤ト一所ニ寢コロヒアリシカ、長秀ソト足ニテ大閤ニ心ヲツクル、大閤心得ラレ、其夜大坂へ御歸、勝家ハ越前へカヘラル、瀧川一益ハ關東ノ管領ニテアリシカ、北條ト取合候内ニ、信長御生害ノ事キコヘタリ、一益ハ北條ニ負テ真田ヲ頼ミ、木曾路ヲノホリ候、此比信孝ハ岐阜ニアリ、大閤ハ山崎ニアリ、越前雪フカケレハ、勝家冬中ニハ出陣ナルマシト、大閤ノ御ツモリ也、

〔武功雜記〕

七

秀吉、明智日向守ヲ誅罰被成候以後、近江長濱ニテ柴田勝家、其外其節ノ大名衆寄合、イツレノ宅ニテカ、秀吉ヲ殺可申トノタクミ有之、出合ノ時、有馬（前懸）法印此事ヲ聞付、彼地へ被參、何レモ何方ニ御入候哉ト法印被尋候時、二階座敷ニ何レモ用候テ被出合被居候由申ニ付、其儘二階へ法印被上、ハシ子ノ上ノ段迄被參被申ハ、筑前殿ト呼掛、御相談承リ是迄參候、御心強御談合候へト、イカメシクハシゴヲフミ腰ヲカケ被居候ニ付、其座ニテ秀吉ヲ殺候夏不成候、此段忠義成由、秀吉後迄御感有マシト也、

〔續本朝通鑑〕

二百十  
正親町天皇二十

秋七月丁巳朔、瀧川一益到尾州長島城、而

到清洲謁幼君、與諸將會、一益以武野敗軍故、勢滅氣衰、不能抗勝家秀吉、勝家以舊將而多功、故威權超群、頻忌秀吉、秀吉爲彼卑屈、無對揚之色、諸將亦畏敬之、森長一屬信孝、既而有隙、長一去居金山城、與信孝絶、

〔若州觀跡錄〕

六月

同月、秀吉、丹波長秀、池田勝入、瀧川一益、尾州清須ニ寄合有テ、國ヲ分、此時長秀ニ、若州一國、及江劬ノ内志賀、高嶋二郡ヲ宛行ハル、右二郡ハ、去ル頃マテ織田七兵衛信澄領分ニテ、信澄ハ大溝ノ城主ナリ、又若州半ハ、去ル元龜元年ヨリ長秀ノ領、相殘半國ハ、武藤上野、内藤筑前、白井民部、寺井源左衛門、松宮玄蕃、香川右衛門、山縣下野、熊谷大膳、栗屋越中守カ、古武田ノ代ヨリ玉ハル所也、元龜元年信長ニ屬シ、舊領安堵シ居タリシヲ、此度悉ク領地ヲ放サレ、合テ長秀ニ給リス、（略）

○神戸信孝、故淺井長政ノ室織田氏ヲ柴田勝家ニ配スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔村井重頼覺書〕

一扱其後信長公御妹淺井後家さぬヲ、筑前秀吉御ゑんをんノのそミ、柴田玄ゆり殿ハ御内儀無是ゆへ、これ又御のそミノ時、御本城（信孝）と三七殿と御兄弟申分有テ、三七殿御申候ハ、おしミノ女をもち申候

天正十年六月二十七日



信孝  
氏ヲ  
嫁セシ  
家

勝家  
氏ト  
結婚  
勝家  
氏ト  
結婚

勝家  
氏ト  
結婚  
勝家  
氏ト  
結婚

天下  
美人

天正十年六月二十七日

八二六

二、信長之いもとを、こしもと決りいふ可仕、之事うと御申やふり、殊ニ柴田の女もかく候由、其上若キヨリ忠功之もの、彼是御申分候、其上ニ後家さぬも、三七殿御申分一所ニ被爲成、柴田殿へ御祝儀ニ候、其の色々之儀共出来、三七殿と御本城取あい成、尾州にて三七殿御さらを御切、其の柴田殿と筑前殿と取あい成申候事、右色々御物語共事、上下略、勝家ル、及ビ前田利家、勝家ノ敗軍ヲ府中ニ迎フルコトニカ、本月十七日ノ條並ニ十一年四月二十二日ノ條ニ收ム、

〔細川忠興軍功記〕

一、柴田殿の、岐阜にて御市さまと御祝言被相調、越前へ御同道被成、長濱へ御通可有處、長濱之仕形を被聞召付、伊吹山の東裏にへり道御座候を漸御通候て、越前之北之庄へ下著被仕候、是より秀吉公と勝家と御間悪敷色か立申候事、

〔祖父物語一名朝日物語〕

一、太閤ト柴田修理ト取合ハ、其頃威勢アラソイ云、又ハ信長公ノ御妹於市料人ノイハレナリ申也、淀殿ノ御母儀ナリ、近江ノ國淺井カ妻也ケル、淺井ニ離レサセ玉ヒテ、御袋ト一所ニオハシケルカ、天下ノ美人ノ聞へ有ケレハ、太閤御望ミヲ被掛シニ、柴田岐阜へマイリ、三七殿へ心ヲ合セ、オ市御料ヲムカへ取、己カ妻トス、太閤此由柴田

秀吉  
氏ト  
結婚  
勝家  
氏ト  
結婚

信長  
氏ト  
結婚  
勝家  
氏ト  
結婚

ヲ越前へ歸スマシトテ、江州長濱へ出陣有、丹羽五郎左衛門、池田勝入ト扱ニテ、柴田ハオ市御料ヲ同道シテ通りケル、下略、秀吉、柴田勝家ト、柳一年四月二十二日ノ條ニ收ム、

〔賤嶽合戦記〕 秀吉北國入事

勝家北の方の、信長公の御妹おいち殿と申々るう、公御むせめ分ニ被成、江脇小谷に大守淺井備前守長政へ被遣々るう、長政う子五人本腹ふ出来、男の公生害被成、おいち殿と女子三人の、信長公の本へ送りけるふ、其後女子三人相添、勝家ニ被下け罷かり、天下第一番の御生付、兩將共ふ色よめ々給ふと申き、上略、

○勝家夫人織田氏、勝家ニ殉ズルコト、十一年四月二十四日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、伊豫來島城主村上通昌、毛利輝元ニ叛キ、羽柴秀吉ニ依リテ、信長ニ屬ス、能島城主村上武吉、元吉父子、湯月城主河野通直ト謀リ、輝元ノ援ヲ乞ヒ、數通昌ヲ攻ム、是日、亦忽那島大浦ノ鼻ニ戦フ、通昌敗レ、遂ニ京都ニ走ル、

天正十年六月二十七日

八二七



能島來島  
ト絶ッ

秀吉因島  
ヲ説ク  
因島ハ輝  
元ニ味方  
ス

〔村上文書〕

○長門

就其表之儀、御使者被差越、以條數被仰越候、慥承知候、兩嶋相違之段無申事候、於此上、以御才覺被相調候事簡要候、於趣者、至乃兵所申遣候條、可得御意候、就夫至御家來中、從彼方切々可有御同意之由申懸候歟、不及是非候、雖然吉充亮康御覺悟無二之儀候條、於輝元、吾等向後忘却有間敷候間、御家中衆へも、能々被仰聞、無異儀段肝要候、於御愁訴者、隨分可相調候委細御使者へ申入候、恐々謹言、

左衛門佐

隆景(花押)

卯月七日

吉充 御返報

〔村上文書〕

○周防

今度其境不慮之族不及是非候、就夫御方様之儀、内々有右以下ニ御物語之辻無御相違、以無二之御心底、種々御短束之通、慥致承知候、誠御入魂至、更難謝次第二候、一切無忘却候、於時宜者、御同列乃兵申合候間、被仰談彌御才覺肝要候、猶重疊可申承候、恐々謹言、

左衛門佐

隆景(花押)

卯月十日

武吉 御宿所

條々

武吉元吉  
父子初メ  
來島通昌  
ニ同意セ  
シガ後輝  
元隆景ニ  
味方ス

乃美宗勝  
武吉元吉  
父子ノ身  
上ニツキ  
テ誓フ

一今度雖來嶋同意之御覺悟候、濟々武吉に御理申入ニ付而、輝元、隆景可有

御忠儀之通、本望存之事、

一向後隆景入魂被申、何篇御取成不可存緩之事、

御家御氣遣之時、捨被申間敷事、

右之旨、少も於僞者、八幡大芥、當國嚴島大明神、御國三嶋大明神、可有御照

覽者、仍誓文如件、

卯月十一日

武吉

元吉 參

宗勝判



天正十年六月二十七日

八三C

就彼御約束之儀、重而御同與被差渡、蒙仰通無餘儀得其意候、先度以來重疊  
(則元)吉田申理、勿論兼諾之辻無相違候、兒玉東市允渡海之儀候條、於時儀者可申  
談候、猶御使者申渡候條、不能詳候、恐々謹言、

左衛門佐

隆景(花押)

卯月十二日

武吉

元吉 御返報

吳々頓可申入候處、結句此御方被差越本望候、對乃兵御內意慥得  
其意候、一切不可有餘儀候、以上、

如仰今度彼族之儀、種々雖被加御意候、無承引、既來嶋警固被乘浮之處、以御  
入魂被引分、彼行無珍敷儀候段、外實大慶此御事候、元吉御事對道後一篇之  
御覺悟、於此方、又不可有忘却候、心底之通、以別紙申入候、彌乃兵以下被仰合、  
彼方可被差詰事肝要存候、隨而此表之儀、羽筑陳取之趣等、久修可被及御覽  
候、見合一行可申付之條、於時宜者、從是可申入候、猶任御口上之條、不能審候、

隆景約束  
ヲ違ヘズ  
ト述ブ

通昌毛利  
氏ノ勸誘  
ヲ拒絶ス  
武吉通昌  
ト絶少

恐々謹言、

左衛門佐

隆景(花押)

卯月十四日

武吉 御返報

今度通昌不慮之御覺悟無是非次第候、然處被引分、無二之御入魂、更難述言  
悟候、連々不可有忘却候、勿論來嶋被及御鉾楯儀候條、聊以見放申問敷候、此  
旨於僞者、可罷蒙日本國大小神祇、八幡大井、殊嚴島兩大明神御罰者也、仍如  
件、

卯月十四日

村上掃部頭殿

隆景(花押)

武吉元吉  
父子河野  
通直ト分  
筋ヲ考ヘ  
ル通昌ト

隆景元吉  
ノ身上ニ  
ツキテ誓  
フ

如仰今度通昌不慮之御覺悟候之處、御方様之儀對道後筋目之御心底、殊數  
年申談首尾無御忘却、御父子御一具ニ被引分之段、誠大慶此事候、委細者別  
紙ニ申入候、乃兵所迄蒙仰之通、是又不可有餘儀候、隨而此表之儀、羽筑陣取

天正十年六月二十七日

八三一



天正十年六月二十七日

八三二

之趣、此方被及御覽候、諸城堅固申付之間、可御心安候、於時宜者、萬端相舍口上候條、不能審候、恐々謹言、

卯月十四日

左衛門佐

隆景(花押)

元吉 御返報

〔萩藩閱録〕

村二十三學

今度通昌不慮之御覺悟不及是非候、然處御父子三人之御事、以無二之御心底被引分、御入魂之段外實太慶候、仍御方連々申談之辻、誠此時候條、一所可進之置候、聊以不可有相違候、猶久修申渡候、恐々謹言、

卯月十四日

隆景御判

村上源八郎殿 御宿所

〔萩藩閱録〕

村二十二ノ一

追而御折紙令拜見候、來嶋表行付而從忠海警固衆可差出之由候哉、就夫通直御夏、至道前可被成御出之由候哉、尤存候、隨而此方一勢夏承、得其心候、隆景令相談、不可有緩候間、委細不可有指行候歟、從元吉後御懇承候間、畏悦不

隆景村上  
景親ニ采  
地ヲ約ス

輝元來島  
ヲ攻メ  
トス

淺候、旁御入魂不可有忘却候、必從是可申述候、猶隆景可被相返候、恐々謹言、

毛利

輝元(花押)

卯月十七日

村上大和守殿 御返報

〔村上文書〕

〇周防

態御折昏令拜見候、沖家之儀、依無正儀、乃兵被仰合之、從寂前雖御氣遣候、來嶋方手切之動不及是非候、然處元吉御事者、被成通直一篇之覺悟、對當方可預御馳走之由、本望此事候、如仰爲來嶋方一家、不可有指行候歟、自元吉後御懇承候間、畏悦不淺候、旁御入魂不可有忘却候、必從是可申述候、猶隆景可被相達候、恐々謹言、

毛利

輝元(花押)

卯月十七日

村上大和守殿 御返報

態御使札拜見畏悦之至候、如仰來嶋方之事、等閑之樣候、不及是非候、就其世

天正十年六月二十七日

八三三

元吉通直  
ニ味方シ  
ニ輝元ノ爲  
ニ馳走ス



天正十年六月二十七日

八三四

上取々動亂候之處、連々申談之首尾、殊被對申通直、以不可有御別儀之旨引分、不相替可預御入魂之由承候、誠以累年之因、無相違之段、本望此事候、御懇志之趣不可有忘却候、万緒從隆景可被申入候間、不能重說候、必從是可令申候、委細御使者任口上候、恐々謹言、

毛利

輝元(花押)

卯月十七日

村上掃部助殿 御返報

〔村上文書〕

〇二周防

今般冲家不慮成立候處、武吉、元吉被對湯月、此節無二之御覺悟無比類候、誠申々疎候、然間猶以此方無御別儀、可預御入魂之由候、輝元、隆景大慶被存候、此度之御芳情自今以後被致忘却間敷候、隨而羽柴事先日如申入候、宮路山、冠山雖取詰候、城中一段堅固候、急度及行可被得大利候、尙委細從隆景可被申達候、恐々謹言、

穗治太

元清(花押)

卯月十九日

武吉モ通直ニ味方シ輝元ト昵近

秀吉宮路山冠山ヲ攻ム

武吉

元吉 御宿所

〔萩藩閱録〕

二上ノ二村上圖書

今度其嶋之儀、申談候之處、兩嶋内々御意趣候哉、相違之段不及是非候、然者私之被申分者不入儀候間、貴所御分別を以、此節御忠儀、肝要候、於様躰者、國分寺に申渡候、恐々謹言、

羽筑

秀吉御判

卯月十九日

村上大和守殿 御宿所

元吉信長ニ從フ

元吉覺悟ヲ斷ス

尙以、被對公儀、可有御忠節之由、被相定候上者、私之意趣不入事候、其方次第警固船等之儀、可申付候、先度被相越候使者、此方へ可給候、内證之儀可申入候、以上、

其方御覺悟此比相違之儀、御同彦次郎被申越付而承届候、内證之趣國分寺具被相通候、尤無餘儀候、兎角御忠節之事者、兩島各別ニ可在之候條、私之意

天正十年六月二十七日

八三五



秀吉河屋  
巢塚兩  
城ヲ圍  
ル

天正十年六月二十七日

八三六

趣更不入儀候間、最前之通、於此方聊不可有相違候、國分寺如被見及候、此表敵城之中へ入り入、(前)やう城(後)すくも塚兩城取卷、其上小早川幸山候得共、(來カ)每日此方足輕申付、十町十五町之内迄雖令放火候、一人も不罷出候條、落居不可有程候、委細國分寺可被申入候、恐々謹言、

羽筑

卯月十九日

秀吉御判

村上掃部頭殿 御宿所

〔村上文書〕

○周防

今度者、被對通直御忠儀之御覺悟、此方可預御入魂之段、祝著本望之至候、仍具足一兩、同甲、太刀一腰、金作進入候、猶有田右京進申合候、恐々謹言、

卯月廿八日

隆景(花押)

村上掃部頭殿 御宿所

警固

猶々、警固之儀、蒙仰得其意候、無緩候、乃兵以下重疊可申達之候、

御使札畏悅候、從是切々可申入之處、每事手前取亂相過候、仍此表之儀、無覺

秀吉鴨城  
ヲ攻ム

悟之城一兩所落去候、以其競、昨日二、至鴨城、(前)羽柴自身取懸、終日雖責戰候、城中堅固仕、則切崩、敵數十人討捕、得太利本望候、就夫敵打入候、喜輝元、元春其外諸勢追々著陣儀候之條、人數到著次第、一戰可申談覺悟候、於手前者可心安候、將亦其表之儀、武吉被成御參謁通直、被請御下知、可被及御行由肝要候、彌可被差急候、委細任御口上候條、不能詳候、恐々謹言、

左衛門佐

五月三日

隆景(花押)

元吉 御返報

隆景元吉  
ニ通直ニ  
對シ忠義  
ヲ盡スベ  
キヲ説ク

追而申候、武吉未無之上著候處、條々御内證等御一人被差登、蒙仰之段、御入魂程与本望候、何篇申談之首尾、彌可預御馳走事可爲太慶候、御國中儀、被對湯月一切無別可被遂忠儀之由候條、肝要迄候、猶以武吉御調可爲專一候、任仰重々可申承候、恐々謹言、

左衛門佐

五月三日

隆景(花押)

天正十年六月二十七日

八三七



元吉らる人々申給へ

通直齋馬

一昨日者、御折紙到來令拜見候(和義部領馬方)、藩葛爲付城從道後一城被執付之、彼麓有放

火、翌日(向島)賀嶋城下難波正岡郷悉御發向候て、來嶋矢入被仰付候處、討手船雖

差出候、數度被追入候、以其競城下大濱浦被燒拂之、剩於鑓下、槍鹽孫兵衛尉

大濱ヲ燒

被討捕之、驗至忠海被送遣之由示給候、寔以心地能次第一段本望不過之候、

秀吉備中

御入魂之趣、更々難申盡候、從是必以使者可申入候、將又備中境事、于今羽柴

陣ス

令居陣候之條、一行爲可申付候、吉川其外國衆相添差出候、依一左右我等事

不日令陣替候、一戰可申付覺悟ニ候、於手前可御心安候、次此方警固事承候、

得御心候、隆景令相談、則可申付候、不可有油斷候、猶吉事重疊可申承候、恐々

謹言、

五月九日

毛利

輝元花押

輝元花押

五月九日

輝元花押

輝元花押

輝元花押

輝元花押

輝元花押

輝元花押

輝元花押

輝元花押

村上掃部頭殿 御返報

毛利

輝元花押

〔毛利氏考證論斷〕 二十 六月十日

考證 白井友之進譜

書狀到來披見候、從(武吉)務司到來嶋、爲手切被相働、勝利之由尤珍重候、大船之

武吉通昌

儀行ニ付而、被乘浮之由可然候、無人付而心遣之段、無餘儀令推量候、瀬戸

大船ヲ乘

四人之者共、包久へ越候て、此節動前之者可被乗(運)を候、兩人氣遣辛勞之段

大筒

令察候、又南四兵、笠岡罷出、兩艘并大筒被下之由、何より以肝要候、彼方此

方辛勞無申計候、指急候條、一帯ニ申遣候、謹言、

五月十日

隆景御判

白井晴胤

白井縫殿(白井縫殿不備胤)

内 伊

南四兵

重見文書

此ふ藝州警固并務司衆數艘相もよふし、大嶋(取)に至り候折節、ミウ

雖爲無人數被見

被合鑓之段、誠ニ以爲無比類候、向後いよく在

辛勞可被抽軍忠候之狀如件、

天正十年六月二十七日

八三九

元吉

元吉

通直齋馬

通直齋馬

大濱ヲ燒

大濱ヲ燒

秀吉備中

秀吉備中

陣ス

陣ス

不日令陣替候

不日令陣替候

得御心候

得御心候

謹言

謹言



天正十年六月二十七日

天正十年五月十九日

通定(花押)

八四〇

〔南海治亂記〕

八

昨日藝州警固并務司衆數艘相催至大島取上候折節味方雖爲無人數被見懸下立被合鍵之段誠以無比類候向後彌有辛勞可被抽忠節之狀如件

天正十年五月十九日

通昌

二神修理進殿

〔村上文書〕

〇二周防

就今度來嶋不慮之覺悟被及御引分御鉾楯之段誠對此方御入魂之次第太慶之通自輝元以使者被申候去比以來打續依陣易延引之段能々可申分之由候此節之御馳走長久不可有忘却通被申候猶庄原兵部丞可申達候恐々謹言

六月三日

武吉

元吉 御宿所

輝元功ナ吉  
ノ戰功ナ  
賞シ物ナ  
贈ル

輝元秀吉  
ト和ス

就今度來嶋逆心之企御方之事被對申通直以無二之御覺悟武吉被仰談候此方御一味之段寔累年無御等閑之辻被引合御入魂之至更々難申盡候殊度々御勤御粉骨之次第本望大慶此事候於悻家永不可令忘却候猶以御馳走所仰候隨而太刀一振刀一腰金作具足甲令進之候表御祝詞候將又此表之事羽柴和平之儀申之間令同心無事候先以互引退候然處信長父子三人事於京都生害之由其聞候不慮吉事此事候猶庄原兵部丞可申候恐々謹言

六月八日

輝元(花押)

村上掃部頭殿 御宿所

〔毛利氏考證論斷〕

二二

六月十九日

考證

當春以來來嶋敵心付而屋代嶋(大島郡)及氣遣候處別而彼御堅固之趣候殊來嶋領相働候砌數度人數召供善兵衛尉方渡海候而馳走之段祝著候此趣兒周內藏太申付而承知候猶面之時可申候恐々謹言

六月十九日

輝元御判

天正十年六月二十七日

八四一

輝元楯社  
少輔四郎  
同善兵衛  
尉ノ戰功  
ヲ賞ス



天正十年六月二十七日

稻杜少輔四郎殿

同 善兵衛尉殿

〔村上文書〕

〇二周防

追而御狀披覽候、通直至道前被成御出張之由候、可爲御勝利之條肝要候、此節一途候様御調儀專一候、乃兵其外罷渡之由候間、每事可申談候、彼是承通得其心候、委曲久修申入候條、不能詳候、恐々謹言、

左衛門佐

六月廿四日

隆景(花押)

武吉

元吉 御返報

通直道前 出兵ス 隆景乃美 宗勝ヲ遣 シテ通直 ナ助ケシ

追而御折番令拜見候、來嶋表行付而從忠海警固衆可差出之由候哉、就夫通直御事、至道前可被成御出之由候哉、尤存候、隨而此方一勢事承、得其心候、隆景令相談、不可有緩候間、委細任御使者口上候之條、不能多筆候、恐々謹言、

毛利

六月廿五日

輝元(花押)

村上大和守殿

村上掃部頭殿 御返報

〔南海治亂記〕

八

去廿七日、藝州警固并務司衆於大浦之鼻、大勢取上候處、二神主殿助同前下立能島、同名村上次郎大夫被槍合、剩味方手負共數人引取之段、誠以無比類候、向後以靜謐之上、可感恩之狀如件、

天正十年六月晦日

通昌

二神修理進殿

〔乃美文書〕

後〇肥

今度此境上勢打下刻、就冲家不慮之儀、當口張合等難成趣候處、悉皆以御才覺被相調候、於于今者所々相拘、先以太慶候、殊到來嶋兩度被及行、勝利本望候、心底之通具相合此者候條、可申達候、仍太刀一腰并一種進之候、猶重疊期吉事候、恐々謹言、

七月五日

隆景(花押)

兩度來島 利ヲ得

大浦ノ鼻 ニ戰フ

天正十年六月二十七日

八四三

八四二



天正十年六月二十七日

乃美兵部丞殿

隆景

八四四

神途ノ戰

〔重見文書〕

豫○伊

先度至神途相動敵數人討取之由、心懸之段無比類候、彌山中切搦等之事不可有油斷候、此表之事任存分候之間、歸陣之節以面可申候、先日於此表藏人助手負候、如何候哉、涯分養生肝要之事候、

七月九日

通直(花押)

重見長門守

重見長門守殿

〔萩藩閱録〕

湯淺權兵衛

能令申候、就與州郡内加勢之儀、河野方有渡海被申候條、令同心候、寔雖無盡期御辛勞候、來月十六日御出陣可爲祝著候、尙此者可申候、恐々謹言、

右馬頭

輝元御判

七月十二日

湯淺治部大輔殿 御宿所

〔萩藩閱録〕

兒玉惣兵衛

其表之趣態申越候、具承知候、來嶋於山下浮相共候哉、無異儀由、先以肝要

候、

一其元之儀、きり／＼と可隙明趣無之由、勝事千萬候、

一此方出勢之儀、隆景雖相談候、きり／＼と候、て、彌緩成口惜候、誠今度此方弓矢氣遣之根本者來嶋候條、拋萬事出勢候、て、て存候、其段、第二候、河野殿、此時加勢候、て、不叶儀候、せめて先井原、鐵放棄五十六相添、河野殿爲伽差渡候、其方事其元氣遣辛勞之段、更申も疎候、猶從是重疊可申開候、謹言、

八月四日

輝元御判

兒島就英

兒藏太

〔萩藩閱録〕

井原藤兵衛

今度與州御渡海之儀、俄令申候處、早速御更請寔本望之至候、御辛勞之段更以難申盡候、雖而被明御隙可爲御打戻候間、萬慶更可申承候、先様之儀雖不及申候、諸更御心遣頼令存候、仍樽多一折進之候、御祝儀計候、猶此者可申候、恐々謹言、

八月十三日

輝元御判

天正十年六月二十七日

八四五

弓矢氣遣  
ノ根本ハ  
來島  
鐵砲衆

井原元尙  
伊豫命ヲ奉  
ズ

輝元湯淺  
將宗ヲシ  
テ伊豫ニ  
赴援セシム



天正十年六月二十七日

右馬頭

八四六

井原(元助)小四郎殿 御宿所

輝元

〔萩藩閥閱錄〕

湯淺權兵衛

伯州面へ御上之儀ニ付而先度令申候處御同心祝著候、彼口之事令一著太慶候、於于今者、最前如令申候、至與州早々御渡海肝要候、遅々候へ者、及風波之節候間、一日後御急專要候、尙追々可申候、恐々謹言、

右馬頭

輝元御判

八月十五日

湯淺治部大輔殿 御宿所

〔萩藩閥閱錄〕

福間彦右衛門

爲與州加勢、井原差渡候、然者其方更、乍辛勞鐵炮衆之爲檢使差遣候條、諸更可然様可申付事肝要候、別而心懸候者共之更、遂注進候者、可得其心候、爲心得申聞候、謹言、

八月十五日

福万彦(元助)右衛門殿

輝元

輝元御判

輝元將宗  
ヲシテ急  
ギ赴援セ  
シム

福間元明  
ヲ伊豫加  
勢ノ檢使  
トス

將宗ニ伊  
豫渡海ヲ  
命ズ

桂元親ヲ  
シテ赴援  
セシム

輝元亮康  
フニ地ヲ  
與

〔萩藩閥閱錄〕

湯淺權兵衛

態申入候、豫州御渡海之儀、先日申入候條、定可有御用意候、誠遙々乍御辛勞、別而可預御馳走事、可爲本望候、然者來廿日御乘船肝要候、委細含口上候條、不能審候、恐々謹言、

右馬頭

輝元御判

九月八日

湯淺治部大輔殿 御宿所

〔萩藩閥閱錄〕

桂五郎左衛門

追々申遣之候、至來嶋渡海之更、來十三日各乘船候、其方事定而先度以申聞之首尾、早々可罷出候、日限右之分ニ令儀、定候上者、遅々候而、先様一動之節、不罷著候而、不可有其曲候、爲此重々申遣之候、猶任口上候、謹言、

九月十一日

桂兵部丞殿

輝元御判

〔村上文書〕

長門

連々別而御馳走、殊去春來嶋逆意刻、無二之御入魂大慶候、然間防州都濃郡

天正十年六月二十七日

八四七



天正十年六月二十七日

八四八

湯野之内百石之地、先以被進置之候、全御知行簡要候、猶隆景可被申候、恐々謹言、

九月廿三日

輝元(花押)

村上左衛門大夫殿 御宿所

〔村上文書〕

○一 長門

連々別而御馳走、殊去春來嶋逆意之刻、無二御入魂大慶候、然間防州都濃郡戸田之内三百石地、先以進之置候、全御知行肝要候、猶隆景可被申候、恐々謹言、

九月廿三日

輝元(花押)

村上新藏人殿 御宿所

〔村上文書〕

○三 周防

今度來嶋不慮之逆意候之處、御方儀無二御入魂大慶候、然間防州秋穗庄之内千石地進置之候、全御知行肝要候、猶隆景可被申候、恐々謹言、

九月廿三日

輝元御判

村上大和守殿

因島吉充  
フニ地ヲ與

輝元吉武  
フニ地ヲ與

隆景吉武  
フニ地ヲ與

村上掃部頭殿 御宿所  
村上大和守殿  
村上掃部頭殿 御宿所

毛利

輝元

今度來嶋不慮之逆意ニ付而、重疊申談候之處、御覺悟無相違預御入魂、寔本望候、仍於防州賀川、伊保庄兩所之内五百石之地進之置候、全御知行肝要候、猶乃美兵部丞可申候、恐々謹言、

十月廿日

隆景(花押)

村上大和守殿

村上掃部頭殿 御宿所

小早川左衛門佐

隆景

村上大和守殿  
村上掃部頭殿 御宿所

〔萩藩閱録〕

二十ノ二  
村上圖書

天正十年六月二十七日

八四九



來島ヨリ  
攻撃シ來リ

郡内ハ火  
急

通直來島  
家中ノ法  
外ニツキ  
テ武吉元  
吉父子ナ  
慰撫ス

天正十年六月二十七日

八五〇

尙々上々古酒送給一入珍敷賞翫申候、右之條之儀藝州に申理、定而有様可爲御異見之條、其内者礪御堪專一候、以上、

從來島重々仕懸事依相募、可有相當之由候、兒玉(三郎右衛門尉元良)三井(井上文右衛門尉善忠)又就逗留、境目之談合半候、此節之事候條、先々御堪忍肝要候、其元之趣、隆景へも飛脚差渡可申返候、爰元之兩人に後申理候、武吉景親暇之事承候、父子共藝州衆案内者之儀にて、諸事談合申候間留申候、今程郡内火急之時分候間、對來嶋相當之儀、此節者是非御堪忍肝要候、猶從出筑可申候、恐々謹言、

十一月十五日

通直判

村上掃部頭殿

就來嶋家中法外之儀、可有相當之通、先日承候、無餘儀候、併郡内表成行上、藝州御加勢之砌、左様之儀候へ之、彌聞外不可然之條、先以御堪忍賴存候、幸兒三井又右在國之條、旁御身躰之事隨分令調儀候間、可御心易候、然上者隆景に老別而以飛脚相返候間、不可有御緩候、武吉にも濟々申事候、爲其淺左差渡候間、御堪忍此節候、猶委曲相含口上候、恐々謹言、

十一月十七日

通直判

村上掃部頭殿

〔御判物奉書并從他家之書簡寫〕

○毛利公爵家所藏

元吉通昌  
ヲ攻メシメ  
トシテ忽ク  
那島ニ著

自來嶋様々狼藉仕懸付而、爲相當至中嶋著岸之由候、雖然彼條ニ付而、祝四郎左衛門尉藝州差渡候、殊兒三右井又右使者被差戻、慥被申之聞候條、彼御返事迄者御堪忍可然候、精武吉迄申候、御分別此時候、恐々謹言、

十一月廿日

通直判

村上掃部頭殿

〔萩藩閥閥録〕

二十二年ノ二  
村上圖書

通直元吉  
ノ來島中  
撃チ止メ  
トシメ

來嶋賊船重々相募付而、爲相當被乘下之由子細承候、從最前如申候、此刻之事候間、先々御用捨老候へ之數返申候、此度之儀者、藝州に申渡候條、其内之事者、可被差延事專一候、先日淺左差渡候砌も、此辻を濟々令申候、於爰元藝州衆へも旨儀申候、兒藏太へも申理候間、定從彼方可被申候、恐々謹言、

十一月廿一日

通直判

村上掃部頭殿

天正十年六月二十七日

八五一



天正十年六月二十七日

八五二

來島狼藉ノ者共ハ輝元ヨリシ處分スベリ

來札本望候、須宇和、横松表無替儀候條、可御心易候、仍從藝州祝四罷歸候、來嶋狼藉之者共、一廉可被仰付候由候間、肝要候、於此上者、御存分有間敷候、其子細委武吉に申候條、不能染筆候、每事武吉談合申候間、重疊可申承候、恐々謹言、

十二月二日

通直判

村上掃部頭殿

〔村上文書〕

○三周防

隆景元吉ヲ訪フ  
隆景元吉  
ナシテ宇  
和郡ヲ定  
メシメ  
トス  
秀吉勝家  
ノ和睦

如仰近日者不申承候、來春行爲相談之、至新庄罷越、一兩日以前吉田歸著候、此方角逗留故、切々不申入候、仍郡内表之儀、先以無相替事候歟、肝要候、宇和表御警固之儀、從兒三右、并又右所後申越候、彌被成御分別、彼表年内中被相拘候、御調儀專一候、於今之姿者、道後可被及御迷惑之條、各令渡海一行可申付候、隨而來嶋衆狼藉之儀、御理無餘儀候、道後へ山新進之置候間、武吉へ委細可申入候、近日可令歸城之條、重々可申談候、次上邊之儀、如承候、東國陣和談相調由候、長々之取相、互退窟候而如此と相聞候、鹽飽傳可被及聞召之條、

不能申候、猶期後音候、恐々謹言、

左衛門佐

十二月十日

隆景(花押)

元吉 御返報

〔御判物奉書并從他家之書簡寫〕

○毛利公 爵家所藏

來島ハ輝元ヨリ命ジ隆景ニ必ズ處分スベシ

尙々、隆景、宗勝へ被仰付、來嶋之儀、堅被申編候間、聊於此度者、相違有間敷候條、兩條之儀、馳走憑入候、巨細之段、武吉可被申候、能々思惟肝要候、以上、

郡内表ハ平定ス

先度以祝四、隆景來嶋狼藉之儀、具申渡之處、村越、村河へ堅固ニ被仰付、兩人も請付仕之由、預返事候、御相違有間敷与存候、然者、宇和表警固之儀、此節於馳走者可爲祝著候、郡内表持方之儀者、相澄候、可御心易候、將亦連々如申、人質之儀、是又兒玉三、并又被差急候間、分別專要候、萬端此條第一之事候間、彼是福角治部少輔可申碎候、恐々謹言、

十二月十日

通直判

村上掃部頭殿

天正十年六月二十七日

八五三



天正十年六月二十七日

〔村上文書〕

○三 周防

今度來嶋不慮之逆意候之處、武吉以無二之御覺悟御入魂、寔本望之至候然、間屋代嶋之内來嶋分、江田嶋之事進置之候、全御知行簡要候、猶隆景可被申候、恐々謹言、

十二月十八日

輝元〔花押〕

村上大和守殿 御宿所

〔圖紙〕

毛利

村上大和守殿 御宿所

輝元

〔萩藩閥閱錄〕

村上一學

今度來嶋不慮之逆意之處、武吉、元吉無二之御覺悟、偏御方御入魂之所致候、寔本望之至候、然間能美嶋之儀進置之候、全御知行簡要候、猶隆景可被申候、恐々謹言、

十二月十八日

輝元 御判

村上源八郎殿 進之候

〔萩藩閥閱錄〕

村上圖書

輝元武吉  
ニ地ヲ與

輝元景親  
フニ地ヲ與

通直モ來  
島處分ニ  
加勢スベ

來島ハ存  
分ノ如ク  
一著ス

來嶋賊船相當之儀被相催候處、頻隆景御異見付而、先々被任御助言之由肝要候、然者右之狼藉向後於不相止者、返報可被仕之通、從藝州被仰候哉、我等事も、隆景同前可申付之條、不可有餘儀候、恐々謹言、

三月五日

通直判

村上大和守殿

同掃部頭殿

〔萩藩閥閱錄〕

井原藤兵衛

就今度旁御渡海來嶋之儀如存分、頓令一著、誠自他之太慶候、得居事別而逆意之仁候間、此時者一刻後早々到賀嶋表、被成御陣易、堅固之御行肝要候、於趣者各仰談、御馳走可爲本望候、猶此者可申候、恐々謹言、

左衛門佐

三月十三日

隆景 御判

井原小四郎殿

〔萩藩閥閱錄〕

白井又右衛門

就來嶋一著、諸城落去之由、太慶此事候、湯付御案塔入御推量候、其表之樣躰

天正十年六月二十七日

諸城落去



天正十年六月二十七日

彌具可申越候、謹言、

三月廿六日

神又右

輝元 御判

〔毛利氏考證論斷〕三十一 三月十六日、

考證 井原藤兵衛家什書

得居ハ攻  
撃困難

得居家城之儀、嶋山付而責口不輒故、于今相滯居候、諸境無珍儀候間、以日  
數可有落去候事勿論候、今少々儀候、以其上も頓一著候、社肝要候條、萬端  
各被仰談、可預御短足候、每事井又右可申述候、恐々謹言、

三月廿九日

隆景 御判

井彈

白井友之允家什書

大船ニテ  
鐵砲ヲ打

今度大船之乘組、賀嶋至舟持盪懸、日々被懸鐵砲、心地能動之由候而、在陣  
之衆中、褒美之通候、誠太慶之至候、乍御辛勞、彌可被入精事肝要候、猶弘藤  
可申候、恐々謹言、

三月廿九日

隆景 御判

白井縫殿丞殿

南四郎兵衛殿

安宅  
火矢

一昨日安宅被盪懸、日夜御辛勞、雖不始于今儀候、不能申、就中、火矢被相懸  
候付而、加嶋表火急見へ候、是又稠御行無比類事候、特南四郎兵衛方被負  
御手之候、依被盪碎骨、如此之儀、一入令感思候、誠度々無緩御身勞更無申  
計候、彌御心遣之儀、頼入候、恐々謹言、

卯月廿一日

通直 判

白井殿

〔萩藩閱録〕

百二十九  
真鍋長兵衛

今度與州表頓罷出候、剩動之刻、敵一人討捕之由心懸之段、神妙候、彌可抽粉  
骨事肝要候、猶兒玉小二可申聞候、謹言、

天正十一

六月三日

輝元 御判

天正十年六月二十七日

真鍋左京  
亮ノ戦功



天正十年六月二十七日

真鍋左京亮殿

輝元

八五八

〔村上文書〕

○二 周防

輝元ノ兵  
鹿島表不  
首尾ニツ  
キ歸國ス

御使札畏入候、如仰賀嶋表操之儀、乃兵井又右、通直に得御意候歟、就不首尾、先以各致歸國候、其段可然存候、今之姿世無珍儀候者、以日數令迷惑、如湯付御存分可相果存候、此節之搦肝心候、切々吉田爲相談罷出付而、何篇申後心外候、少得隙候者、令出津(磯力)一廉搦警固申付度存候、隨而上邊之儀、預御尋候、北國一篇之儀者事舊候、羽筑事後當時信長弔申付由候、此方使衆之儀、何篇有牀ニ申含差下候、境目彌無異儀候條、可御心安候、將又此方御逗留候衆中、御休息候事蒙仰候、得其意候、委細久修へ申候條、不能詳候、恐々謹言、

左衛門佐

六月三日

隆景(花押)

元吉 御返報

來島ノ狼  
藉猶止マ

去年以來對之嶋來嶋家中衆狼藉之儀、被遂御堪忍之處、此節猶以不相止候條、一際相當可被仰付候由、雖無餘儀候、今程通直當國御逗留与申、外實不可

然候條、御理重疊申入候、御分別肝要候、尙任口上候、恐々謹言、

左衛門佐

六月廿日

隆景(花押)

武吉

元吉 御返報

〔萩藩閱録〕

四十 井原藤兵衛

今度於賀嶋、あり、と矢を被射、敵味方褒美無比類候、愈御嗜肝要候、猶妙壽寺可被申達候、恐々謹言、

六月廿二日

輝元 御判

井原小四郎殿 御宿所

〔萩藩閱録〕

百十九 白井又右衛門

其元長々辛勞候、當時通直御出候條、直談候、頓而可爲歸國候、其内御臺別而心を付可申事肝要候、仍銀子壹枚遣候間、追々可申聞候、謹言、

六月廿三日

元 御判

神保又右衛門殿

通直輝元  
ニ誤ス

井原元尙  
ノ戦功

天正十年六月二十七日

八五九



天正十年六月二十七日

八六〇

〔村上文書〕

○二 周防

如仰先度者御來儀付而申承、本望候、殊種々御丁寧之儀難申盡候、從是新可申入之處、御懇示預畏入候、輝元被成御見參尤太慶候、爰元之儀、漸御隙明候條、通直近日可被成御歸國候、每事武吉申談候、猶御使者に申候恐々謹言、

左衛門佐

七月六日

隆景(花押)

元吉 御返報

元吉輝元  
ニ謁ス  
通直歸國  
キントス

就今度通直御出、旁御渡海候而懸御目、本望存候、隨而内々蒙仰候一儀、令承知候、此表彼是取亂候間、從是可申入候、尙從隆景可被申候、恐々謹言、

右馬頭

七月九日

輝元(花押)

村上掃部頭殿 御返報

〔村上系圖證文〕

傳書 村上大和守武吉

一天正拾年、羽柴秀吉公奉信長公之命、能嶋來嶋家臣一人充、播州姫路に被

秀吉能島  
來島兩村  
上氏ヲ招村

ク

通昌秀吉  
ニ從ヒ人  
質ヲ出ス

輝元モ亦  
武吉父子  
ヲ招ク

武吉通昌  
及ト矛盾ニ  
ナブ

召之、武吉臣大野兵庫直政、應召而到姫路、先謁淺野彌兵衛尉長政之處、秀吉公御側近被召出、被仰渡候趣者、能嶋亶天下に遂忠節候様ニ御頼被成候、所領之儀者、已來四國を可被宛行旨候、勿論伊與拾四郡を者、當分可申下候、萬一武吉、元吉於承引無之者、其方可罷登候、賜鹽飽七嶋之印、上口警固ニ可被仰付候由、御親切ニ被仰渡、御召料之御具足、御手鎗兵庫致拜領候、其節來嶋方、弟彦右衛門を差登也、秀吉公に致隨身、直様爲人質差出候、彦右衛門を以、後、兩嶋一同ニ致御味方候様ニ、兵庫に相談被仰付候、兵庫罷下、秀吉公命旨具ニ武吉、元吉に申聞候處ニ、御當家方乃美宗勝を爲御使者、御味方可仕之旨御懇被仰下、連々御忘却被成間、鋪之通候、殊御縁者之儀ニ付、旁以無二之心底相極候、秀吉公に御書等被下、頻ニ雖被招、致手切、能嶋一族警固舟乗浮、上口通路舟を後相支、度々拒戰、悉得勝利候由、其節來嶋亶者、一家之因を差捨、上方に致御味方ニ付、來嶋方々及矛盾候、

村上掃部頭元吉

一天正拾年、秀吉公承信長公之命、能嶋家臣壹人播州姫路に被召之ニ付、大

天正十年六月二十七日

八六一



野兵庫直政を彼地の差越候處ニ、秀吉公御面接ニ而、武吉、元吉父子於致御味方者、被行恩賞可爲列候、已來者大祿を可被加賜候若武吉、元吉於無承引者、直政壹人可罷登、賜鹽飽七嶋、可爲上口警固職之由、御懇情ニ被仰渡、賜物等有之候、兵庫罷下、秀吉公之命旨申聞候處ニ、輝元公、隆景公、乃美宗勝を爲御使者、段々御頼被成、殊累年御當家に致御味方、御縁族ニも被召加、永久御見捨被成間敷之由、御誓紙等被下之由ニ付、上方之方致違背候、秀吉公、御書被下、頻ニ御招請候へ共、致手切警固船差出、上方勢通路を拒留、水戰悉得勝利候、來嶋儀者、上方に致御味方ニ付、双方及矛楯候、委細者武吉傳ニ相見候付略之、

〔萩藩閥閥録〕

村上圖書

ノ上略、村上隆勝

其嫡村上惣太郎義雅早世、嫡

子宮内少輔義益、村上大和守武吉ト家督ヲ論シ相戰、武吉得勝利家續ス、

武吉ハ掃部頭義忠カ弟也、菊池武俊契約シテ號武吉、天文十八年於筑前沖黑船

武吉ノ略  
崩船ヲ切  
歴

數艘切崩、後奈良院之綸旨頂戴任、大和權守、對將軍義輝公、義昭公、數度勵軍

忠、并大内、河野ニ數度助勢ス、從信長公、秀吉公、雖被招之、御家ニ隨身仕、軍忠

元吉ノ略  
歴

年久、慶長九年八月廿二日卒、七十二歳、法號、大仙寺覺甫、元正、其嫡村上掃部頭元吉、元

嚴島ニ元  
就ヲ援ク

就公御契約ニテ、元吉ト號、奉屬御家、勵軍忠、夏年久、於豫州討死、慶長五年九

月十六日、四十八歳、法號、相玄寺實翁、宗真、其前武吉、豫州能嶋城ニ罷居候節、元就公大

内之家臣陶晴賢ト藝州嚴島御陣之時、可致御味方旨被仰下、任御意罷出、奉

遂軍忠候、御勝利以後、忝被仰下候、其後大友御取相之時分、武吉、元吉罷下、奉

遂御味方候、右之外諸所御陣之節、御味方仕候、元就公、輝元公、隆景公御連判

之御神文頂戴仕、其外元就公、隆元公、輝元公、隆景公御感狀數通致頂戴候、高

麗御陣ニモ、隆景公御供仕、御證文被下置候、秀吉公中國御出陣之砌、武吉、元

吉御味方可仕之由候得共、從輝元公、隆景公、可致御味方之由被仰下ニ付、應

御意御味方仕候、其節來島通昌儀ハ不任御意、秀吉公ニ致隨身候、御家ニ御

味方仕候段、御祝著不淺、由御使者以乃美兵部丞宗勝於御家永ク御忘却被

成間敷之旨、從輝元公御感狀、隆景公、牛王之御誓詞致頂戴候、左候而、從秀吉

公御味方可仕之由、以御使札兩度被仰下候得共、彌申切、偏御家ニ忠義之覺

悟ニテ罷居、其趣高松御陣所ニ御注進仕候、御滯陣半信長公不慮之御、

而秀吉公御治世相成、武吉、元吉儀、最前御味方不仕御憤ニ付、從赤間關上口

ニハ不罷居様ニト御抑留ニ付、隆景公御分國筑前ニ、自能島被差下、知行三

朝鮮ニ從  
軍ス

秀吉武吉  
ノ從ハザ  
ルシテ怒



元吉能島  
ヨリ筑前  
ニ移ル

天正十年六月二十七日

千五百石被下置、尤從輝元公ハ、長州大津郡、防州南前ニテ壹万石餘拜領被仰付、以時節被仰斷、大身ニ可被爲成旨被成御意、其後秀吉公高麗御陣之節、筑前御通ニ付、御用捨ト候而、大津郡エ御差越被成候、此砌ヨリ御家來ニ罷成候、○下

〔陰德記〕六十 久留島一味信長公之事

通昌信長  
ニ屬セン  
トス

久留島出雲守、德中半右衛門兄弟ハ、伊豫國風早郡ヲ知行シテ、我國ニ於テハ、如形猛威ヲ振ヒケルカ、兄弟評定シケルハ、今信長ノ鋒先ニハ、天竺震旦ハ不知、我朝ニハ可叶者有マシ、毛利家モ頓戰負ヌヘシ、唯近年輝元ヘ隨ヒタリシ約ヲ引替テ、信長ヘ一味スヘシト評定一決シテ、更ハ誰ヲカ京都ヘ上セ、信長ヘ角ト云入ント僉議シケルカ、唯出雲守老母物詣ト號シテ上洛シ、信長ヘ子共御味方ニ參、忠勤ヲ可抽所存ニ候條、近年毛利家ニ與シ御敵仕タル科、御免許候ヘカシト歎ナハ、信長許容可有トテ、則老母ヲ上洛サスヘキニ定メタリ、然ニ村上能登守武吉ハ、出雲守ニハ姉聳ナリ、彼老母ノ爲ニハ聳ナリケレハ、武吉ヲモ、又孫ノ掃部助元吉、同三郎兵衛尉○陰德太平記、景親トアリ、ヲモ、出雲守ト同シク信長ヘ降參セシメ、豫州ニ於、過分ノ領地申與ヘン

武吉ハ通  
昌ノ姉聳

武吉子弟  
ヲ誠ム

警固舟

隆景讒言  
ニ依リ通  
昌ヲシテ  
武吉ノ居  
城ヲ志ム  
攻メシム

ト思ヒ、老母ヨリ竊ニシカ々々ノ通云送ラレニケリ、武吉此事ヲ聞テ、子共ニ向、我ハ如何ナルヲ有トモ、毛利家ヲ背キ、信長ヘ隨テ有間敷ト思ヒ定タリ、其子細ハ、近年土佐ヨリ長曾我部數ケ度豫州ヘ打出、已ニ河野家難義ニ及ヒ、我等モ忤家ノ大事ニ相究リケルヲ、毛利家ヨリ度々ノ加勢ヲ以、當家安穩ナリ、此厚恩ヲ爭カ忘却スヘキ、是ニ又一年筑前國立華（花下同シ）ノ城、元春、隆景取卷給刻、某甲ハ病氣身ヲ侵シケル故、周防ノ國上ノ關ニ、暫舟ヲカケテ居ケリ、久留島道安○陰德太平記、道安ヲ通康ニ作ル、ハ其年死シ去テ、今ノ出雲守ハ幼少ナリケル間、郎等原太郎右衛門尉九國ヘ警固舟ニ乘リテ下リヌ、然ニ太郎右衛門讒言ヲ搆ケルニヤ、又上ノ關ニ逗留シ、九州ヘ不下ケル故ニヤ、某甲逆心有トテ、立華表開陣ノ後、隆景ヨリ久留島ノ者共ヲ先手トシテ、三ケ年我家城（武志）ムシノ城ヲ攻給、我全野心無ト雖、此趣ヲ可申開様ナク、徒ニ三ケ年ヲ送りキ、其後我小舟一艘ニ乘、大野兵庫一人召具シ、笛ヲ吹キ朗詠シテ逍遙シアリキ、久留島ガ城近ク乗行ケレハ、原太郎右衛門出テ詞戰シケル、某甲太郎右衛門ニ向ヒ、汝カ僞詐ヲ搆ケル故ニ、不心毛利家ト矛楯ニ及ナリト云ケレハ、原、扱ハ左様ニ思ニヤ、全我讒言ニ非、然ハ御科ナキ由ヲ隆景ヘ歎

天正十年六月二十七日



キ給へ、我等御使ヲ可仕候ト云テ、翌日我所へ來リケル間、我モ亦更ハ汝ヲ  
 頼ソト言ケレハ、原則安藝ノ沼田へ越、某甲科無由ヲ斷、終ニ赦免ヲ蒙リキ、  
 然ニ今信長へ一味シナハ、先年大友ト合戦ノ刻モ、恥ノ勝負ヲ窺、周防ノ上  
 ノ關ニ滞留シテ、磯ニモ不付、沖ニ不有シテ、居ケルカ、今モ又弱キヲ捨テ、強  
 ニ付、大表裏者ナリト、輝元朝臣、元春、隆景モ思ヒ可給、唯今ノ不義ノミナラ  
 ス、昔ノ逆心迄、虚ヲ實ニ成サンコノ口惜サ、是ニ又叔父右近隆重、毛利家へ  
 忠勤ヲ抽ケル間、嫡子八郎左衛門景徳太平記、今備中ノ笠岡ニ有テ、父ニ  
 モ猶越テ軍功ヲ勵、渠ハ天地反覆スルトモ、信長ニハ與スマシ、我毛利家ヲ  
 背ハ、忽叔父甥敵味方ト成ヌヘシ、我今能島ノ家相續スルコトハ、偏ニ叔父右  
 近ノ厚恩ナリ、其子細ヲ語テ可聞、我五歳ノ年、父山城守隆勝ニ離レケル間、  
 隆重、我舍兄宗太郎、我等二人ヲ取立、萬事後見セラレケル處ニ、我一族ニ村  
 上義正ト云者アリ、大慾不當ノ族原ニテ、我等兄弟ヲ亡シ、己宗領家ノ所領  
 ヲ奪ント暴兵ヲ起シ、數ケ度ノ戦ニ及、隆重智勇世ニ勝タリケル間、戦毎ニ  
 利ヲ得、義正カ城ヲ乗破、己ニ義正自害ニ及ントス、其時義正カ家ノ子村上  
 左近ト云者アリケルカ、己カ聲ノ何カシトカヤ云ケル者ニ向、御邊年齢モ

村上義正  
 能島ノ總  
 領トス

武吉叔父  
 隆重ニ依  
 戰リ嚴島合  
 戦ニ戰功  
 ナ立ツ

武吉信長  
 二屬ス  
 功ハ通

義正ト同ク、容貞モ亦能似タリ、君ノ命ニ替、矢倉ニ上リ切腹セヨ、敵夜紛ナ  
 レハ、分明ニ見分、有マシ、義正切腹ト思ナハ、四面ノ圍ヲ可解、其恥義正ヲ  
 落可申ナリト云ケレハ、彼者去義士ニテ、義正ノ命サへ助リ給ナハ、我死ヲ  
 恐ヘキニ非、是コソ望ム所ナレトテ、矢倉ニ於テ義正ト名乘自害シヌ、其隙  
 ニ義正ハ、甲斐ナキ命助タルヲ希有ニシテ、城ヲ落去ヌ、其後舍兄宗太郎下同シ院  
 ノ嶋カ聲ニ成ケルカ、狂人ノ如ナル人ニテ、我女ヲ差殺シケリ、隆重依之宗  
 太郎ヲ又殺シテ、我ヲ取立、村上ノ家相續セシヌヌ、嚴島合戦ノ恥ハ、我ハ未  
 少輔太郎ト云テ廿歳ニ成シナリ、未年若カリケル間、弓矢ノ道勇有トテモ、  
 功ヲ不積ケル間、右近隆重ヲ後見ト頼シニ、彼人ノ智計謀略故ニ、年老タル  
 久留島ニモ不劣軍忠ヲ抽ケル間、元就ヨリ數ケ所ノ所領給ヌ、然ニ今信長  
 ニ與シナハ、隆重ト矛盾ニ及ント、恩ヲ不知似タルヘシ、又昔能島久留島院  
 ノ島信濃ヨリ與州へ下シ時、久留島ハ二男也ケレ、果報目出度カ故ニ、河  
 野聲ニ取テ、風早郡一万貫給リ、紋モ河野家ノ紋、傍折敷ヲ免タル間、傍折敷  
 ニ三文字也、我先祖ハ沖ノ島々ヲ纔地行シテ、紋モ圓ニ三文字也、是サヘ口  
 惜ニ、今又久留島カ老母上洛シテ、信長へ一味ノ一申トモ、我子ノ出雲守カ



昌ニ奪ハ  
レシ

武吉通昌  
ズニ同心セ

武吉通昌  
ト戦フ

通昌救レ  
テ京都ニ  
走ル

天正十年六月二十七日

八六八

コヲ能様ニ申、出雲謀略ヲ以、我ヲ信長へ申靡タリト云シ間、自忠モ來島ヨ  
リ淺ク成、所領モ又少分タルヘシ、是ト云彼ト云、兎角信長へ一味スルコト不  
可有トテ、終ニ久留島ト同心セサリケリ、角テ久留島ハ老母ヲ以テ信長へ  
一味スヘキ由云送ケル間、則領掌シ給ヒケル間、久留島ヨリ人質トシテ、村  
上彦右衛門ヲソ差上ヌ、依之信長能島ヲ退治スヘキ由下知セラレケル間、  
其ヨリハ能島久留島、聳小舅、或ハ叔父甥敵ト成テ、數年所々ニ於テ責戰、或  
屹兩島大船カサリ立テ漕向、散々ニ攻戰ヒケルカ、久留島大勢ナル故、勝ニ  
乘敵船ヲ追立ケルニ、能島三郎兵衛尉是ヲ見テ、舟三艘ニテ、敵船ノ勇ミ誇  
タル真中へ乗入戰ヒケルカ、終ニ勝利ヲ得、久留島ヲ一里計程追立ケリ、其  
後數ケ度ノ合戰ニ久留島戰ヒ負テ、風ハイノ城ヲ落テ、信長ヲ頼上リケル  
カ、家ノ子郎等モ、皆散々ニ成テ、與介ト云中間一人、身ヲ不離付隨ヒケリ、此  
忠義ニ感シ、今ハ名字ヲ遣、淺川與介ト名乗ケリ、扱久留島、信長へ出ハ、所領  
モ過分ニ給ラント思ヒシニ、纔千石給リケレハ、サシモ大忠ヲ盡シニ、サセ  
ル恩賞ナシト述懐シテ、兄弟ナカラモトユヒ切テ有ケルカ、羽柴秀吉天下  
ノ武將ニ備リ給刻ハ、一萬石給リケルトソ聞エシ、周防ノ大島ノ中久可ノ

東郷山ノ城ニ、久留島人數ヲ籠置ケルヲ、隆景ヨリ桑原已下ニ下知シテ攻  
ラレケレハ、降人ニ成一命ヲ助リ、是モ何國トモ無成ニケリ、

〔附録〕

〔村上文書〕

○一 周防

約諾千貫之地之儀付而示給、委細令承知候、聊以非違變之儀候、時分等之事  
自兩人所可申候、恐々謹言、

右馬頭

卯月七日

輝元(花押)

村上大和守殿

村上掃部頭殿 御返報

〔村上文書〕

○一 長門

今度被抽御一門中、無二此方御届候段、寔本望之至候、仍五百貫之地以防長  
寺社半濟之内可進置之候、御懇切之儀向後不可有忘却候、猶隆景可被申候、  
恐々謹言、

卯月十日

輝元(花押)

天正十年六月二十七日

八六九

輝元村上  
武吉元吉  
父子ニ千  
貫ノ地ヲ  
約ス

輝元因島  
吉充ニ五  
百貫ノ地  
ヲ約ス



天正十年六月二十七日

村上新藏人殿 御宿所

右馬頭

八七〇

〔村上文書〕

○長門

今度被抽御一門、頓人質被差出候、無二御入魂之段喜悅之至候、向後彌可申談之候、仍防長之間三百貫之地可進置候、猶以御馳走簡要候、恐々謹言、

卯月十三日

輝元(花押)

村上左衛門大夫殿 御宿所

〔村上文書〕

○周防

今度御忠儀并輝元我等御入魂之儀、旁無二之御忠心無比類候、然者以付立注文、御望之地輝元同前可申調候、神々急度一通調可進之候、恐々謹言、

卯月廿日

隆景(花押)

村和

村掃 御宿所

〔村上文書〕

○長門

今度被抽御一門中、別而預御入魂之段、對當家難謝本望候、然間於伊保庄參百石之地遺置候、聊御志計候、目出度長久可申談候、猶乃美兵部丞可申候、恐々謹言、

卯月廿六日

隆景(花押)

村上新藏人殿 御宿所

〔村上文書〕

○周防

於防州御約束之地渡手之事、内藤與三右衛門尉、兒玉東市允兩人急度下向候間、從某元被差出候衆可被申談事肝要候、二三日中令歸城候之條、万々從高山可申承候、恐々謹言、

八月十三日

左衛門佐 隆景(花押)

元吉 御返報

〔萩藩閱録〕

村上十三學

就御進退之儀、從湯月重疊御懇被仰渡通、得其心候、然間於備中東庄之内百

天正十年六月二十七日

八七一

因島高康  
人質ヲ輝  
元ニ出ス  
輝元三百  
貫ノ地ヲ  
亮康ニ約  
ス

隆景武吉  
元吉父子  
ニ望ミテ  
地ヲ與ヘ  
ント約ス

隆景地ヲ  
亮康ニ與  
フ

隆景沼田  
トス



天正十年六月二十七日

貫之地先以進置候、全可有御知行候、何々連々可申談候、恐々謹言、

九月廿日

隆景御判

村上源八郎殿 (原親) 御宿所

○隱岐清家ノ義子經清、信長ニ屬セントシ、事成ラズシテ、清家ヲ誘殺スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔陰德記〕

六十 隱岐守清家生害之事

隱岐國ノ住人隱岐少輔五郎經清ヨリ使ヲ以テ、養父隱岐々々守清家謀反ヲ企、羽柴秀吉ト一味仕候條、某甲種々異見セシメ候ヘ、更ニ不用候間、無是非討果候、清家カ嫡子神五郎人質トシテ、新庄ニ罷居候、父カ惡逆分明之儀候條、急可被行罪科候ヤト申ケリ、元春、元長此由ヲ聞給ヒ、清家ハ去ル儀士ニテ、而モ毛利家ヘ對シテハ、身命ヲ抛テ、忠節ヲ勵シ者ナレハ、今更秀吉ニ與スルコト、若經清カ讒言ニテヤ有ト怪ミ思ヒ給處ニ、頓其日清家カ嫡子神五郎申上ケルハ、少輔五郎并寺本安藝守カ一類一味同心仕、羽柴秀吉ヘ志ヲ通シ候處ニ、父清家無貳ノ御味方ニテ、渠等ニ同心不仕候故、忽打果候、然處ニ、京藝御和睦候條、今ハ己等カ身ノ上ノ一大事ニ及候ト存、其科ヲ

爲免、清家ニ無實ノ科ヲ云付、逆意仕候ト申成候、能々被糺實否、父彌謀反ニ相極候ハ、某甲一人御檢使給候ヘ、潔切腹可仕候、若又經清カ爲免逆意之科無實ヲ申付候ニ相極候ハ、御勢ヲ被下候ヘ、隱岐國ハ罷渡、父カ冤ヲ報、經清カ頸ヲ獄門ニ上ケ、後代ノ見懲ノ爲ニ可仕ト申ケル、其濫觴ヲ尋ルニ、羽柴筑前守數万騎ヲ引テ高松ノ城ヲ被取圍、依之吉川、小早川彼表ニ出張シ對陣シ給處ハ、敵勢八万余騎ニ及、味方纔三萬ニ不過、殊ニ信長猛勢ヲ卒シテ、近日下向ノ由、閭巷之說耳ニ溢ケレハ、下部、中間原ニ至迄、如何ニ大強將ノ元春、隆景ナリトテモ、纔ノ勢ニテハヨモ堪エ給ハシ、頓テ當陣ヲ引拂給バン物ヲト思ヒ、已ニ浮立テ見エケル處ニ、元春、元長少モ騷動シ不給、打甘如何ニモヲヒラカニシテ御座ケリ、已ニ隆景朝臣モ、諸人ノ騷ト聞給ヒ、元春父子ノ陣ノ様体見テ來ヨトテ、人ヲ忍ヤカニ遣シ給タリケレハ、此者走り歸リ、元春ハ湯ノ某カシニ諷謠ハセ、如何ニモ打解テ、何ノ用心モナク御座候ト申セハ、是ヲ聞テ、小早川陣ノ諸侍、下部ニ至迄、皆ユリ居リタル程ノ爲體ナリケル、折節少輔五郎ヨリ、寺本安藝守ヲ使トシテ、高松表ヘ差上セケルカ、諸軍勢如何、元春、元長帶劔解テ打甘キ、引間敷体ヲ諸軍士ニ

天正十年六月二十七日



天正十年六月二十七日

八七四

示シ給トモ、五三日ノ中ニ、信長下向ト風聞アレハ、其叱ハヨモ一堪モ、味給  
 マシキモノヲ、唯今サヘ敵勢ハ八萬騎ト聞ユ、信長出張シ給ナハ、堅ク十萬  
 モ可有、今ノ秀吉ノ勢モ、八万トハ云ヘ、六万モ可有カ、左アラハ敵勢ハ十  
 五六万モ可有カ、味方ハ四万ト雖、實ハ三万有ト聞ユ、松山ニ輝元ノ御座セ  
 トモ、是モ五千ヨリ上ハ、旗本ノ勢ハナシト聞ユレハ、只毛利家ノ危亡ハ此  
 叱ナルヘシナト、囁ケルヲ、寺本是ヲ聞テ、實モ聞ユル如ナラハ、毛利家ノ大  
 事此叱ニ極リヌ、唯片叱モ早ク馳歸リ、羽柴殿ヘ一味ノ使ヲ立、隱岐國安穩  
 タラシメント、賢顔ニ思案ルヲ、元春、隆景ノ御返事ヲモ不給急キ、國ニ馳下  
 リ、隱岐守清家ニ向、高松表味方一兩日中ニ敗軍タルヘシ、毛利家ノ滅亡ハ、  
 此叱ナラント存候、早ク羽柴殿ヘ御一味候テ、隱岐ノ家御相續ノ御謀コソ  
 宜候ハメト云ケレハ、隱岐守清家はヲ聞テ、安藝守承處モ去事ナレ、某甲  
 カ事ハ、隱岐ノ庶子家ニテ候ヘ共、爲清切腹ノ後、當家相續スヘキ由、元春朝  
 臣計ヒ給ニ依テ、輝元公ヨリ當國知行スヘキ旨御判ヲ給リ、隱岐々々守ニ  
 被任、御厚恩更ニ可奉報謝様ナシ、然ハ某甲ニ於テハ、毛利家一味ノ志ヲ不  
 變、今一到來ヲ待得テ、元春、隆景、高松表ノ戦利ヲ失ヒ、自害シ給ト必然ナラ

使者清家  
 二秀吉ニ  
 一、味スベ  
 キヲ説ク  
 清家輝元  
 ニ叛カズ

經清使ナ  
 信長ニ遣  
 ス

ハ、清家ハ於此腹搔切テ、義士ノ名ヲ万代ニ可殘、各ハ其叱我頸ヲ秀吉ヘ捧  
 ケ、當國ヲ給リ、隱岐ノ家相續セラルヘシ、御邊ナトハ、家ノ爲ニ敵ニ與セラ  
 レンモ宜謀也、我ハ又恩ノ爲ニ命ヲ抛ト申處モ、非道ニハ有ヘカラスト云  
 ケレハ、少輔五郎、安藝守等、案ニ相違シテ、コソ居タリケレ、カ、リケル處ニ、  
 雲伯ヨリ商人舟ノ漕渡リケルカ、元春、隆景ハ、高松表敗軍シ給處ニ、上方勢  
 頻ニ追懸ケル間、路次ニ於テ返シ合、打死シ給由風聞候ト云ケレハ、少輔五  
 郎、寺本安藝守是ヲ聞テ、ヨシ々々清家ハ同心ナクトモ、不苦、先信長ヘ使ヲ  
 上セ、一味ノ旨云送ラントテ、寺本五右衛門尉、同甚允ヲ若狭ヨリ上洛サセ、  
 信長ヘ一味仕、忠勤ヲ可抽候ト可申由云、合、京都ヘコソハ上セケレ、角テ二  
 人ノ者、小舟ニ取乗、夜ヲ日ニ繼テ急キケル程ニ、頓テ若狭ノ國ヘ著シ處  
 ニ、信長ハ、惟任カ爲ニ、本能寺ニ於テ討レ給フ、秀吉ハ手ヲ入テ、毛利三家ト  
 和睦有テ、京都ヘ上リ給タルト聞テ、コハ如何ニ、聞シニハ相違シタル物哉  
 トテ、其ヨリ取テ返シ、又隱岐ノ國ヘソ歸リケル、其叱、少輔五郎并寺本安藝  
 守、同和泉守、同善兵衛尉、同五右衛門、同神允ナト、頭サシ合セ、囁ケルハ、此程  
 ノ隱謀終ニハ、隱有間敷、然ハ各滅亡遁ルニ所ナシ、所詮清家ヲ方便リ、饗應

天正十年六月二十七日

八七五



天正十年六月二十七日

八七六

セントテ請シ入、安々ト討果シ、清家謀反ナリト云ヲホセ、吾等カ難ヲ免レ  
ント僉議一決シテ、天正十年七月十一日、少輔五郎使ヲ以、清家へ饗應ノ案  
内ヲ云送ケレハ、隱岐守何ノ心モ無、ウカ々々ト立越ニケリ、其叱清家、京都  
中國社陸ニテ、カ、ル遠國迄モ、無爲ノ化ニ誇事トテ、舞ヤ謠ヤト云程ニ、盃  
ノ數積テ、清家イタク淵醉シ、前後不覺ニ見エケレハ、少輔五郎、安藝守ニ吃  
ト陶スト齊ク、其座ニ有合タル寺本黨、一太刀ツ、切レハ、サシモニ猛キ清  
家モ、其身段々ニ成、終ニ其所ニテ失ニケリ、抑此少輔ノ五郎ハ、爲清カ子ナ  
リ、彼隱岐守爲清切腹ノ後、少輔五郎ハ、父ノ讎ヲハ不報還テ、尼子ニ一味シ  
テ、勝久ト伴京都へ逃上ケレハ、隱岐ノ國ヲハ、輝元朝臣ヨリ清家ニ給ケリ、  
其叱清家出雲國へ馳渡リ、平田ニ元春ノ御座ケルニ申シ、今度隱岐國一  
圓ニ被宛行候、清家先年ヨリ一族モ離レ、御味方ニ參、忠勤ヲ抽候故也  
トハ申ナカラ、一向元春公ノ能様ニ、輝元公へ御取成候故ナレハ、生々世々  
此御吹舉ノ御厚恩ハ、不可致忘却候、然ハ、迎ノ御厚恩ニ候間、爲清カ嫡子少  
輔五郎近年勝久ニ與シ、諸國ヲ流牢仕罷居候、願ハ御免ヲ蒙リ、彼者ヲ呼下  
シ、某カ養子ニ仕、忤家可令相續候、渠ハ當家ノ嫡カ、某甲ハ庶流ニテ候へハ、

一旦ハ國ヲ被下置、身ノ面目不過之候へ(此方)庶幾所ハ嫡々家ヲ相渡シ、思息  
神五郎ヲハ、似合ノ御所用ニモ被召仕候様ニト、頻ニ望ミケレハ、元春我子  
ノ有ナカラ、其ヲ閣テ、宗領家ニ國ヲ讓リ與ヘントノ所存、誠以有難キ志ナ  
リ、然ハ少輔五郎ニ於テハ、敵方ニ一味ノ族ナレハ、子々孫々迄可加誅罰ナ  
レ、清家謙讓ノ志ノ有難ニ對シテ、承ル旨ニ可任ナリトテ、此旨輝元朝臣  
へ吹舉シ給ケレハ、以前ノ儀ハ兎モ角モ、元春ノ御計次第ナリト宣ケル間、  
清家不斜悅ンテ、勝久へカウ々々ノ様子ニテ候間、少輔五郎ヲ返シ給リ候  
へト云送リケレハ、勝久、少輔五郎ハ一門ノ儀ナレハ、何様ノ事ニテモ、本國  
安堵コソ宜ク存候へトテ、則使に相添テ、本國へコソ下サレケレ、清家則養  
子ニシテ、我子ノ神五郎ヲハ、元春朝臣へ人質ニソ出シケル、少輔五郎カ、  
ル厚恩ヲコソ報セサラメ、還テ己カ科ヲ免ン爲ニ、清家ヲ討ノミカ、無實ヲ  
云付ケル、兎角申ニ不及、現世ニテハ、諸佛諸神ノ冥罰忽蒙、眉鬚墮落ノ白  
癩ト成、未來ハ焔王ノ鐵棒ヲ喫シ、阿鼻大地獄ニ入、牛頭馬頭ノ呵責ヲ受、阿  
僧祇劫ヲ經ルトモ、成佛得脫不可有ト、此振舞ヲ聞人爪彈キセヌ者ソ無カ  
リケル、カ、ル次第隱ニ處無カリシカハ、如何ニ陳スレ、庶難叶カリケリ、元

天正十年六月二十七日

八七七



天正十年六月二十七日

春朝臣則甚五郎カ申請ル旨ニ任セヨト宣ケレハ、更ハ父ノ讎ヲ報セント  
ヒシ々々ト思ヒ立ケレレ、渠ハ多勢也、我ハ主從已上十四五人ナレハ、可討  
様コソ無カリケレ、サレレ我力ニ難叶、御勢給リ候ヘト、元春へ申サンコモ  
云甲斐ナク思ヒケレハ、今ハ佛神ノ御力ヲ頼マンヨリ外ハ無他ト、諸佛諸  
神ニ祈誓シケル中ニモ駿州富士山ノ麓ニ跡ヲ垂給、兄ノ宮弟ノ宮ト祝レ  
御座ス曾我兄弟コソ、我等如ノ歎ヲ身ニ知給テ、擁護ノ眸ヲモ垂給ヘケレ  
ト、則ヲトロヲトロシキ願ナト立テ、一心不亂ニ祈リケルカ、奇特ノ靈夢蒙  
リ、聊頼母敷思ヒ、同意ノ輩ヲ求メケル處ニ、爰ニ熊谷伊豆守信直カ郎等、水  
落掃部助ト云者アリ、力量世ニ勝レ、武勇人ニ超、血氣ノ勇者ナリケルカ、常  
ニ酒ヲ好シテ飲ミ、極メテ貧カリケレハ、酒債山ノ如クニ積リ、爲方無、山賦  
夜盜ヲ業トシテ、人ノ寶ヲ奪、酒錢トシケルオ、或年ノ暮ニ、酒債如何トモシ  
難カリケレハ、酒ニ酔タル真似ヲシテ、可部ノ市ヲヨロボヒアリキケルニ、  
酒家ノ主是ヲ見付、酒錢ヲ乞取ハヤト思ヒ、内ヨリ走り出、如何ニ掃部殿、今  
年中ノ酒債給リ候ヘト、袂ニスカリシニ、掃部兼テ巧ミシコナレハ、雨滴ノ  
落ル所ニ掘置タル溝ノ中ヘカツハト倒レ、大音聲ヲ上ケテ、是ナル酒屋ノ

與三左衛門ハ、狼藉至極ノ族哉、酒錢ヲ乞トテ引倒シ、恥ヲ與ル法ヤ有、昔ヨ  
リ酒手負タル者ハ、如何程モ可有、杜子美トヤランサヘ酒債有行處ト云ヘ  
リ、然ニ酒手ヲ催促スルトテ、恥辱ヲ與ル事ヤ有、角立サカリタル市中ニテ  
面目ヲ失テハ、命生テ何カセント、太刀ヲ拔テカ、ル、與三左衛門肝ヲ消シ、  
内ヘツト走り逃ケルヲ、遁サシト基結ヲ取テ引付、頸ヲ搔ントスルヲ、女房  
アマリノ悲シサニ手ヲ合、當年ノ酒手ハ、一粒一錢モ取申間敷ク候、唯理ヲ  
枉テ一命ヲ助ケサセ給ヘト、佗言スレレ、曾テ耳ニモ不聞入、切殺サント目  
ヲ見張リ、臂ヲイカラカシテ匂リケルニ、折節錢屋ノ三郎兵衛尉ト云者其  
所ヲ通りケルカ、常々掃部ニ米銀ヲ貸ケル故、掃部モ錢屋カ機ヲ取損スレ  
ハ、忽飢ニ及ハント思、如何ニモ渠カ心ニ不違ト振舞ケル間、別テ内外ナク  
云語ラヒ、兄弟ノ交ノ如ナリケレハ、定テ別義有間敷トヤ思ケン、錢屋ツツ  
走り入、爰ナル掃部殿ニハ、物カ付テ候カ、宣フ旨アラハ、命ヲ助テ置給ヘ、切  
殺シ給テハ、理非ノ沙汰ニモ不及、御身ノ命モ失セヌヘシ、先短慮シ給ナト、  
袂ニスカリ手ニ取付、引ノケントシケレハ、掃部與三左衛門ヲハ打捨テ、爰  
ナル錢屋ハ同シ町人傍輩ナル故ニヤ、與三左衛門ニ助力シテ、我カイナヲ

天正十年六月二十七日



ネチタルツヤ、喧嘩ノ本人モ助力モ同シ相手ナリ、身一人ニ敵二人取ンハ本望ノ至ナリトテ、三郎兵衛ヲモ取テ引寄、膝ノ下ニ引敷テ切殺サントソ忿リケル、是ヲ見テ其後ハ、アタリヘ寄付者モ無カリケレハ、二人ノ町人ト下ニ成ナカラ、手ヲ摺テ佗言シケルハ、與三左衛門ハ、當年ノ酒手少モ申請申間敷、其上今度慮外ナル振舞仕タル處ヲ御赦免被成タル御禮トシテ、此中酒手ニ取置タル米俵ノ候フ十俵可致進上候、平ニ一命助ケサセ給ヘト云ケレハ、錢屋ハ、然ハ我等モ、今年去年ノ間ニ貸置申處ノ錢百餘貫、米三十俵、少モ申請間敷、其上今度助力仕タルヲ御宿免ノ御禮トシテ、錢廿貫進スヘシト云ケレハ、掃部其ハ我米錢ニメテ、免マシキ所ヲ免シタルナト、人ノ嘲ラン所モアレハ、努々叶マシ、乍去此上ハ市中ノコナレハ、此町ノ年老ナトノ批判ニ可任ト云ヘハ、則五人ノ年老、年行事、月行事ナト云者馳集リ、何カ掃部殿ノ御僻言トハ可申、唯物ニモ不辨町人原ノコナリ、理ヲ枉テ御免候ヘ、然ハ我等モ、此御禮ニハ作り置タル濁酒ノ候ヲ持參仕可申候、御道理至極ニ候ナト云ケル所ニ、酒家ノ姥大天目ニ酒一盃盛テ、先是ヲ一ツ進メ候ヘトテ與ヘケレハ、掃部續テ三盃吞干、是程各佗言スレハ、理ノカウズ

年  
老  
年  
行  
事  
月  
行  
事

ルハ非ノ一倍ナレハ、更ハ免サントテ、二人ノ者モヲ助ケ、米錢シタ、カニ取テ販リニケリ、其後椎坂入道ト云者ノ死ニケルカ、此者極メテ腹惡シキ者ナル故、忽ニ地獄ニ入テ幽靈ト成、夜々アリクナト云ケリ、水落是ヲ聞テ、次而面白事トモヤ思ヒケン、柿ノ篠懸ニ頭巾シテ、鶴ノ羽ヲ取集メ、左右ノ脇ニ挟ミ、顔ニハ朱ヲ塗り、夜半昃分ニ極樂寺ヘ行、増譽長老トカヤ云シ僧ノ念佛申テ居タリケルニ、後ノ障子ヲカハト明テ跳リ入タルヲ見レハ、六尺計ノ大ノ山伏、頭巾篠懸ニ、顔ハ千入ノ紅ヨリモ赤ク、左右ノ脇ニ翅生、手ニハ鐵杖ト覺シキ黒キ杖ヲ持テツ、立如何ニ御僧、西方極樂ハ日ノ入方ソト示シ給程ニ、誠ソト心得、須彌ノ頂迄上リタリト雖、終ニ極樂ニ至ル事ナシ、其上老病ニ勞レテ死タレハ、一足モ不引、某ニ西方ハ十万億土ト宣間、隨分至ラント思ヒ、須彌ヨリ引返シテ、又西方ハ何國ヤラント赴ケトモ、老足ナリ長病ノ後ナリ、中々無五調ニテ十分一モ行著カタジ、弘誓ノ舟トヤランノ迎ニ來ルニヤト思テ、待トモ待トモ舟影モ不見、兎角吟ヒアリク程ニ、六道ニ輪廻シテ、今ハ大天狗ト成テ候、唯心ノ淨土、己身ノ彌陀トヤラン云テ、十万億土ニ不至成佛底ノ有トヤラン承候物ヲ、我等ニハ、カ様ノ近道



ナル事ヲハ示シ不給、十万億土或ハ落日觀念ナト云テ、西方ハ日ノ入方ナ  
 リ、黒雲黄雲白雲ナトノ現スルニ付テ、罪ノ輕重アリナト、内々モ宣問、徒ナ  
 ル事ヲ誠ト思ヒ、西へ西へと計志テ歩ヲ運吟候、ナト去此不遠トハ示不給  
 ヤ、又釋尊ノ抑止ニハ、謗法ノ人ハ成佛セズト雖、彌陀ノ攝取ニハ、五逆十惡  
 ノ人ナリト雖、攝取不捨ノ願力ニ依テ、成佛スルト説給タル間、誠ソト思ヒ、夜  
 盜海賊ヲシタリト雖、後生ハ彌陀ノ御誓ニテ佛ニハ成へキ間、今生ノ貧苦  
 ノ堪カタケレハ、隨分盜ヲスヘシ、取得ハ好シ、若顯レナハ、一眈ノ艱難ナリ、  
 一刀ノ下ニ命終ラハ、攝取不捨ノ願力空カルマシ、一念彌陀佛即滅無量罪  
 ナレハ、死ナハ其儘彌陀ノ來迎ニ預リ、成佛セント思ヒ、心ニ盜ノ謀ヲ成セ  
 凡、口ニハ常ニ名號ヲ唱へ、手ニ物ヲ奪取レトモ、口ニハ彌陀佛ト申ケル  
 間、來世ハ一定成佛ト思ヒシニ、生來ノ惡業忽積テ、熾魔王ノ呵責ヲ蒙ル、ア  
 ラ情ナノ御僧ヤ、御邊ノ邪説ニ依テ、六道ノ街ニ迷間、御身ヲ誘引行テ、此僧  
 ノ我ニ虚説ヲ申聞サレシヲ誠ト思ヒ、生來ニ惡逆ヲ成候、我等ニ科ハ無シ、  
 此嘯ツキ坊主ヲ代ニ召置レ候へト、一理ヲ斷リテ見可申、イサ參ラントテ、  
 小腕ヲ取テ引立ル、此僧大ニ驚、扱ハ生來ノ重科ニ依テ、魔道ニ入、カ、ル姿

阿彌陀  
錢程光ルモ

ト成給ニヤ、彌陀如來不取正覺ノ御誓、ナトカ空シカルヘキ、日來ノ罪業ハ、  
 風前ノ雲ト消惠日ノ光サヤカニシテ、六道四生ノ暗キ道ニハ迷ヒ給ハジ、  
 我御邊ノ爲ニ、一七日經書念佛申ナハ、忽佛得脱疑アルヘカラスト云ケレ  
 ハ、水落、イヤ念佛申經讀テ、佛ニ成ハ上世ノ事、唯今ハ阿彌陀モ錢程光ト申  
 事ノ候間、御邊ノ施物ニ取置レタル錢ヲ給リ候へ、地獄ニ墮在シタル餓鬼  
 凡ニモ、黒飯ノ一盃モ與へテ悦ハセ、又熾魔王ノ御身近ク召仕ル、冥官、或ハ  
 阿彌陀ノ御傍ニ居給小佛達へモ、是式ニ候へト申テ、御アシノ少宛モ進  
 ラセハ、我罪ノ重ヲモ輕ク申ナシ給テ、佛トモ成、可給、又極樂ノ造營ナトモ  
 終ニ無之ユエ、此節ハ少破ニ及由、小鬼凡ノ申ヲ傳承候間、少ノ奉加ニモ入  
 へシ、又八大地獄ノ釜モ、億兆ノ歳ヲ經ト申ニモ非、久遠ヨリノ古釜ナレハ、  
 是モハヤ片端ハ破レタルモ候、穿タルモ候、此節大鐵圍山ヲ掘崩シテ、鑄改  
 メ候ト申候間、是へモ一文半文ニテモ合力仕候ハ、阿彌陀如來、又牛頭馬  
 頭并熾魔王モ御機色快然タルヘシ、今程ハ末世澆季ニ及、人間佛ニモ僧ニ  
 モ、金銀ヲ進ラヌル事ノ無候間、釋迦モ阿彌陀モ熾魔王モ、御摺切候故、兎角  
 經念佛ヨリ、米銀サへ候へハ、佛ニ成安ク候ト、極樂地獄ノ取沙汰ニテ候條、



地獄ノ沙汰モ錢ガ

貧者ノ亂好ミ

溢者

早々近年ノ布施物、勸進物給リ候へ、左無ハ命ヲ奪取カ、又生ナカラ同道申カ、二ツノ中ヲ出マシト責ケル間、此僧則眠藏ニ入置タル錢數百貫取出シテ取セケレハ、水落、地獄ノ沙汰モ錢カスルト申セハ、某モ佛ニ成、和僧ヲモ又佛ニ成サンソ、能所見置テ、寺ナト作り置待申サント云捨テ、後ノツヒ地ノ崩レヨリツト出ルト見ヘシカ、搔消様ニ失ニケリ、此事不思議ナル事哉、死シタル者ノ飯リ來リ、來世ノ事委ク語リケルヨト、諸人云敢リシカ、後ハ水落ナリト囁ケル間、熊谷憎キ族哉、已來ノ見懲ノ爲ニセヨトテ、已ニ討手ヲ差向ケレハ、水落是ヲ見テ、後ノ山ニ入、石見ヘ逃、銀山ニ日用ナトシテ世ヲ渡リケルカ、已ニ飢ニ及ハントスル有様ニテ、貧者ノ亂好ミシケル折ナレハ、隱岐ノ國ニシカ々々ノ事有ト聞テ、是コソ望ム處ヨト思ヒ、則甚五郎カ館ヘ馳向ヒ、數百兩ノ金銀ヲ給リ候ハ、某隱岐ノ國ヘ罷渡、敵城ヲ忍ヒ取ニ仕、憎キト思ワレ候輩ヲ、一々頭ヲ刎候ヘキナリト云ケレハ、甚五郎大悅シ、更ハ可頼ト云フマ、水落大ニ悅ヒ、已ニ打立ントシケルニ、似ヲ友トスル習ナレハ、渠カ語フ所ノ者モハ、山賊海賊ノ死生不知ノ溢者モニテ、此更仕課セナハ、能酒手可設ト思、二十餘人馳集リ、小舟ニ取乘、隱岐ノ國ヘソ

八幡丸

經濟自殺

漕渡リケル、思儘ニ風吹送、浪穩ナリケレハ、其日ノ夜半計ニ隱岐ノ國ヘ付シカ、ム(符カ)恥分モ能ソト悅テ、則少輔五郎カ家城ノ八幡丸ヘ忍入、唯一人家ノ上ニ上リ、隱岐少輔五郎逆意已ニ顯レタル故ニ、元春ヨリ熊谷掃部助信武大將トシテ馳向タリ、已ニ八幡丸ヘ乗入タルソ、三澤カ勢ハ二ノ丸ヘ乗レ、三刀屋ハ其所ヘ切入、中尾吉田ハソソヂヤウ其所ヘ懸レナト、雲伯ノ侍共ノ名字名乗ヲ呼匂リ、舌ノ柔ナルニ任セ、無窮自在ニ云呼リケレハ、寺本黨ヲ先トシテ、スワ此程ノ隱謀ノ顯レタルニヤ、敵ハ猛勢タルヘシ、其上ハヤ八幡丸ヘ乗ナバ、我等小勢ニテ争カ得防、先落行テ重テコソ合戰ヲモ致サメトテ、我先ニト逃落ケリ、少輔五郎今ハ無力、雜兵ノ手ニ懸ンヨリハトテ、腹十文字ニ切破テ失ニケリ、寺本安藝守モ折節一族モ集メ、酒宴シテ居タリケルカ、前後不覺ニ吞醉、郎等共手ヲ引テ落行ケモ、如何ニモ落延ヘクモ見ヘサリケレハ、郎等モ御自害候ヘト諫ケル間、安藝守心得タリトテ、去在家ヘ走入、是モ自害シテ伏ニケリ、其外寺本カ一族モ、所々方々ニ忍居ケルヲ、其後吉川式部大輔經言朝臣、隱岐國ヲ知行シ給ケル時、ヨヒ辰シ宥メ置給ケルカ、寺本五右衛門ヲハ、中畑源太兵衛尉、寺本神允ヲハ、中畑新右衛



天正十年六月二十七日

八八六

門、寺本善兵衛ヲハ、湯頭助兵衛等ニ云付打果シ給フ、寺本和泉守、同子息平次郎ヲハ、宿所へ押寄打果サル、是等ハ皆去勇士トナリ、少輔五郎モ勝久ニ隨ヒ、勇ノ譽モ聊有者ナリケルカ、角水落一人ニ方便レ、ヤミ々々ト討レケル事、渠等カ勇ノ拙ニ非、唯日來ノ惡逆忽身ニ報ヒ、天罰ヲ蒙リ、其身無益亡ヒ失ルノミカ、武名ヲ万代ニ朽シケルコソ淺猿ケレ、

〔附録〕

〔笠置文書〕

岐〇隠

知夫利村半分代官之事、笠木助二郎方へ申付候條、可有其心得候、恐々謹言、

天正拾年

二月七日

清家(花押)

若林甚介殿

三郎兵衛殿

彌左衛門どのへ

〔宇受賀神社文書〕

岐〇隠

〔包紙〕  
「經清之證文 天正十年八月廿六日」

〔裏紙〕  
「隱岐」

宇津賀田地代方之儀、爲新寄進付置候、彌於神前御祈念憑存候、恐々謹言、

天正十年

隱岐

八月廿六日

經清(花押)

神主殿  
らる

奉宇津賀大明神新寄進地之事、

一四段半

小徳万名

一大四拾步

光綱名

右田地奉寄進者也、於向後聊不可有相違之條、可被抽祈念之丹精之狀如件、

隱岐

天正十年八月廿六日

經清(花押)

宇津賀神主殿  
らる

天正十年六月二十七日

八八七

小徳万名

光綱名



天正十年六月二十七日

〔花押彙纂〕

部オ之

隱岐清家

八八八

○笠置文書(隱岐)  
天正十年二月七日附書狀

〔花押彙纂〕

部オ之

隱岐經清

○宇受賀文書(隱岐)  
天正十年八月二十六日  
附寄進狀

越後春日山守將黑金景信等、其主上杉景勝ニ、上信濃ノ形勢ヲ報ズ、  
〔上杉古文書〕<sup>十五</sup>

木曾義昌  
深志ニ陣  
ナ張ル  
上信濃小  
屋揚ゲシ  
シテ正躰ナ

桐澤具繁

先日木曾へ被指遣候御中間、昨廿六致飯府候間、即其元へ爲登申候、様躰委  
可被成御尋候、木曾殿者、ふろしと申所ニ張陣之由候、悉上信濃小屋揚仕、無  
正躰様候由、彼者申事候、隨而其御表、近日被思食御儘之由、萬民大慶不過之  
奉存候、近日者上口之說一向ニ不承候、相替儀御座候者、急度注進可申上候、  
此旨可預御披露候、恐惶謹言、

六月廿七日

桐澤左馬亮

具繁(花押)

黑金兵部少輔

景信(花押)

直江與六殿

○木曾義昌、林治右衛門ニ采地ヲ與フルコト、便宜左ニ合致ス、

〔信陽玉證鑑〕

四

右之外、本領三拾貫之替地可出候者也、

朱印

油川之内起分三拾貫文、有賀之右衛門兵衛分卅五貫文、諸里分拾貫文、都合

天正十年六月二十七日

八八九



天正十年六月二十七日

八九〇

七十五貫文之所宛行候、彌可被抽忠勤者也、仍如件、

壬午之

六月廿八日 ○川邊氏舊記、六月廿一日ニ作ル、

林治部右衛門殿

越中ノ士有澤圖書助、弓庄城主土肥政繁ヲ説キテ、上杉景勝ニ屬セシム、是日、景勝ノ部將須田滿親、新川郡ノ地ヲ與ヘテ、之ヲ賞ス、尋テ、政繁モ亦采地ヲ與フ、

〔加能越古文叢〕八三十

今度美作守殿へ有御異見、被覆先忠越府に御馳走、無是非次第候、依之自分之爲御合力、高野之内、館分廿村進之置候、但此内枋屋方、中切方に配當御尤候、仍如件、

天正十

須田

六月廿七日

滿親(花押)

有澤圖書助殿

土肥政繁  
再景勝  
ニ屬ス

抽依忠節、高野之内、本郷一圓ニ出置候、無相違可令知行候、彌奉公可爲肝要者也、仍如件、

天正十年

八月三日

政繁判

有澤圖書助殿

右温故足徴載之、

原書金澤士族有澤氏所藏、

按、須田滿親ハ土肥美作守政繁の家士あるを、有澤氏系圖ニ圖書助父太郎左衛門戰死後、幼少而家督相續、仕于土肥美作守とあり、開見雜録ニ、越中新川郡弓庄土居美作、居城家老有澤但馬弟同五郎三郎と載せむ、但馬とも呼ひたりむ、又越府に御馳走云々とある越府ハ、越後景勝をさせるあるへし、土肥美作守政繁ハ、則景勝へ隨心也、又高野ハ新川郡の郷名也、水橋の邊六十三村をハ高野郷とせ、本郷一圓とは高野郷内の屬村不殘を與へらむしと聞ゆ、

○佐々成政、土肥政繁ヲ弓庄城ニ攻ムルコト、便宜左ニ合致ス、

須田滿親  
ハ土肥政繁  
ノ家士ト  
ナラシメ  
テノ説

天正十年六月二十七日

八九一



〔越登加三州志〕

九 韃 囊 餘 考 九

佐々成政與土肥政繁數交兵、

八月六日、佐々成政利兵ヲ以テ、土肥美作守政繁ノ弓庄城（中新川郡）有澤俊貞曰、永祿、

佐々成政  
土肥政繁  
質子ヲ  
磔ス

テ、越中國新川郡實平ノ内弓庄ノ城主ト云々、然レ美作守政繁ノ代ヨリ、越中昔源家頼朝公  
ノ舊臣土肥次郎實平ノ後胤ト云々、然レ美作守政繁ノ代ヨリ、越中昔源家頼朝公  
レナキトミユ、天正ニ越中國城主ノ内土肥ノ名宇所々ハ、大牛領シ、何レ相續居  
平也、景周越中ノ古郡堀江按スルニ、土肥左衛門五郎庄ニ據ト云、政繁初ノ名ハ  
源七郎ナリ、同郡柿澤村館ニ、子カ越中古城アリ、是等皆美ヲ圍ム、藤田丹波  
臣ノ出テ、白倉豊丞ノ成政ト鎗ヲ合スト云、又一日、成政獲ル人質土肥平介ノ政繁  
ニ、男ニテ、時ヲ弓庄城外ニ磔ス、此跡ト云、城兵怒テ城門ヲ發シ、尸ヲ奪テ城ニ  
入、按ルニ、今年六月二日、河田豐前松倉城ニ戰ルニ、越中ノ信長公生害ニ屬ス  
ム、又政繁景勝ヨリ、是ヲ成政怒テ、弓庄ヲ攻  
テ、又政繁景勝ヨリ、是ヲ成政怒テ、弓庄ヲ攻

二十八日、寅羽柴秀吉、尾張清洲ヲ發シ、近江長濱ニ歸ラントシ、美濃今  
尾城主高木貞久ノ子貞利ニ船ノ用意ヲ爲サシム、

〔高本文書〕

濃 ○ 美

爰（音也）元隙明候條、今日津嶋をこをり、晚ニ石（立石カ）トて、（尾）や尾ニ令著陣、それより  
長濱歸城候、然レ船之事、此節候間、一艘も不殘可被差寄候、御油斷候てハ御

爲不可然候、恐々謹言、

羽筑

六月廿八日

秀吉（花押）

高木權右衛門尉殿 御宿所

三十日、丙辰神戸信孝、禁制ヲ美濃寶林坊ニ掲グ、

〔敬念寺文書〕

濃 ○ 美

當郷之儀、諸事如前々不可有相違、並陣取課役非分等、伐採竹木以下一切令  
停止訖、若違犯之輩於有之者、（可勝カ）□□處罪科者也、仍下知如件、

天正十

六月晦日

（花押）

西之郷中

寶林坊

是月、羽柴長秀、禁制ヲ丹波佐治市場ニ掲グ、

〔小島文書〕

波 ○ 丹

禁制

（水上郷）佐路市場

佐路市場

天正十年六月三十日 是月

八九三



一其在所百姓等令還住作毛以下不可油斷事、

一非分申懸事、

一竹木伐採之事、

右條々、堅令停止畢、若違犯輩於在之者、速可處罪科者也、

天正拾

羽柴小一郎

長秀(花押)

桑山重勝、禁制ヲ丹波佐治莊小倉町及ビ妙法寺ニ掲グ、

〔諸家文書纂〕 十四

佐治莊小倉町

禁制丹州

水上郡佐治庄小倉町

一當手軍勢亂妨狼藉之事、

一剪採竹木之事、

一放火之事、

右條々、秀吉様、長秀様稠被仰出旨堅令停止訖、若於違亂之輩者、忽可處嚴科者也、仍狀如件、

天正十年六月日

桑山修理進  
重勝

〔妙法寺文書〕

波〇丹

禁制

妙法寺

一甲乙人濫妨狼藉之事、

一陣取放火之事、

一山林竹木伐採之事

右堅可令停止、若違犯之輩於在之者、忽可被罪科者也、

天正拾

桑山修理亮

六月日

重勝(花押)

杉若藤七

無心(花押)

上杉景勝、禁制ヲ越中櫛原神社ニ掲グ、

〔櫛原神社文書〕

中〇越

制札

右於櫛原社、諸軍勢無道狼藉、堅令停止畢、若此旨於違犯之輩者、立所可被加  
成敗之由、仰出被成御印判者也、仍如件、

天正十年六月是月



天正十年六月是月

八九六

天正十年

○朱印六月日利支天文勝軍地藏摩

奉行中

七月丁巳朔

一日、丁巳神戶信孝、禁制ヲ美濃美江寺ニ掲グ、

〔美江寺文書〕○美濃

禁制

(原見取)美江寺

一 甲乙人等、執宿新儀之諸役免許之處、無謂子細申懸之事、

一 寺領諸寄進、并新堂地、坊地年貢及違亂之事、

一 相破先例之寺法之事、

一 右條々、於違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十年七月一日

三七郎(花押)

羽柴秀吉、近江稱名寺ニ新地ヲ加ヘ、舊地ニ還住セシム、

〔稱名寺文書〕江○近

今度令赦免召返上者、(東邊并部)尊勝寺郷へ有還住、屋敷寺領家來等、如先々可申付者

也、

筑前守

七月朔日

秀吉(花押)

次

天正十年七月一日

八九七



天正十年七月一日

稱名寺

秀勝(花押)

稱名寺秀吉ノ足弱衆ヲ馳走ス

「端書なし」後ノコノ四字

今度筑前守足弱衆之儀御馳走ニ付而御歸住之事可爲如前々之旨折帟被進候、依被取紛猶委曲從我等能々可申入由候、御寺領六拾餘石并披官衆諸役免除之事同多賀古屋敷与西之明屋敷貳ヶ所新儀被申付候、向後可有御才判候爲其懇ニ加筆候て可申入之由被申付候條如此候恐々謹言、

卜真齋

七月朔日

信貞(花押)

尊勝寺之

稱名寺床下

○秀吉夫人杉原氏長濱ヨリ脱レ出ヅルコト六月十六日ノ條ニ見ユ、本願寺光佐使ヲ神戸信孝等諸將ニ遣シテ戰捷ヲ賀ス、

〔天正日記〕城山 一七月一日、御使平越日向守ヲ被打果ニつきて三七殿

信長ノ本能寺屋敷

ヲいしめ各へ御音信也、注文別ニあり、○注文

三日、未記神戸信孝、本能寺屋敷ヲ以テ、故信長ノ墓所ト爲シ、本能寺寺僧ヲシテ、是地ニ還住セシム、羽柴秀吉モ亦之ヲ命ズ、

〔本能寺文書〕○二山城

御屋敷之事、今度成御墓所、殊當寺爲舊地上者、返遣候條、寺僧如前々令還住、法事勤行不可有懈怠候也、

天正十

七月三日

信孝(花押)

本能寺

爲音信褶三端到來悅入候、仍還住之事別紙ニ申遣候、猶岡本、河田可申候、恐々謹言、

七月三日

信孝(花押)

本能寺

天正十年七月三日



本能寺衆  
舊地遷  
住シテ  
トナシ  
ニ訴フ

天正十年七月三日

九〇〇

本能寺之儀、寺家衆御還住候様こと御訴訟之趣、筑州へ申達候、委細得心之事候、何も近日可有上洛候條、其刻可被申出候旨候、隨而鳥目百疋披露申候、祝著之由候、就其拙者三十疋被懸御意候、畏入候、猶御使者へ申入候、恐々謹言、

增田仁右衛門尉

長盛(花押)

七月六日

本能寺

御寺家中返報

本能寺ハ  
明屋敷

御札拜見仕候、當寺之儀、御屋敷明申事候條、御寺家衆如前々御還住尤之由、筑州被申候、然者御屋敷之御跡之儀候間、陣取以下之事も不可在之どの儀候、其御意得候て、早々御立歸專一候、恐々謹言、

增田仁右衛門尉

長盛(花押)

七月十三日

本能寺御報

秀吉本能  
ニ寄宿  
ナ免ズ

當寺之事、如先々、寄宿令免許條、不可有相違候也、

七月八日

秀吉(采印)

本能寺

神戸信孝、美濃武儀八幡社領ヲ安堵ス、

〔八幡神社文書〕濃○美

寺社領并門前之諸役、如前々不可有相違、若於違犯之輩有之者、任先判可令成敗之狀如件、

天正十

七月三日

(花押)

武藝八幡衆僧中

徳川家康、甲斐、信濃ヲ定メントシ、是日、遠江濱松ヲ發ス、

〔家忠日記〕二 七月三日、己未、家康ヲ懸河迄、山口迄立候、

四日、庚申、家康ヲ田中迄、牧野迄立候、

五日、辛酉、家康ヲ江尻迄、駿府迄著陣候、

天正十年七月三日

九〇一

家康ハ  
マテハ  
忠ハ  
マテハ  
山口家掛



天正十年七月三日

六日、壬、清水迄立候、

〔當代記〕

二 六月二十八日、甲州出馬也、○本書六月二十八日

〔古文書〕

○有泉 有泉大學頭信閑拜領、同彦五郎信美書上、

東照宮御書

急度申越候、仍其方何も其表案内者之事候條、本多豊後守父子、大久保七郎右衛門、石河長門守相談、新府中へ被移候而、信州表之計策畢竟第一候、我等儀も、今日三日出馬候間、頓而其表へ可打出候、恐々謹言、

七月三日

御實名御居判

有富大學助殿

穴山衆○コノ三字、有泉大學助及ビ

穂坂常陸介殿

水谷正村

〔寬永諸家系圖傳〕

四八 水谷正村兵部大輔、天正八九年の比、正村一年麾下

候、同十年、新府陣のせき、大權現の供奉をつとめ、落城のれち、御暇をまゝり國よかへ候、○上下略、譜牒餘録水谷左京亮書上、正村甲州

大家康有泉  
命シテ本  
多廣孝大  
久保忠世  
等ト共ニ  
信濃ヲ謀  
ラシム

皆川廣照

〔寬政重修諸家譜〕

一八 水谷正村兵部大輔、號出、天正十年六月、右府

お謁せんろ、先上洛し、近江路に至ると、右府生害乃よしを聞、直濱松に參りてまみえ奉り、七月、甲斐國新府より入りせらるるに、彼地をめぐらるる後、御暇をぬりて、領地よかへ候、○上下略

〔寬永諸家系圖傳〕

三八 皆川廣照山城守、天正八年、中川市右衛門尉を奏

者として、東照大權現の幕下ニ屬し、君臣の禮をなして、まゝりて、同十年、大權現に供奉して、織田信長まみゆ、信長まてお明智りさめお弑せらるるに、遠州濱村おをもむき、甲州新府の陣をつとむ、○上下略、譜牒餘録後編

諸家譜皆川廣照  
譜並ニ異事ナシ

○家康、高力清長ヲシテ田中ヲ、本多重次ヲシテ江尻ヲ、牧野康成ヲシテ天神川ヲ、渡邊守ヲシテ駿甲ノ路次ヲ守ラシムルコト等、マタ便宜左ニ合致ス、

〔寬政重修諸家譜〕

一五 高力清長與左、八月、駿河國田中城をた乃ひ、山

〔譜牒餘録後編〕

八 本多作右衛門

西濱領し、駿河先方乃士二十五騎、汝おはせらる、○略上

高力清長  
ナシテ田  
中城ヲ守  
ラシム

天正十年七月三日

九〇三







濃守書上異事ナシ信

〔牧野家譜〕 一 康成

家康牧野  
康成ナシ  
テ興國寺  
城ヲ守ラ

一天正十年壬午三月、○寛政重修諸家譜牧野康成譜ニ家康公軍汝駿州表  
ヨ出し給へり、時ニ興國寺ヲ城ノ守將曾根内匠助預かしの家康公ニ志  
汝通す、因テ城汝出く、御味方ニ屬努々、於是家康公、右馬允康成ニ命して、  
興國寺ノ城汝守らし免給ふ、康成ニ命し、牧野原ヲ初ニ移住は、是  
ハ小田原境目ニ城也、○譜牒餘録牧野駿河守書上ニハ、武田勝頼ヲふせ  
中城ヲ攻ムル、○コトニカハルル

一同年七月、家康公、豆州、柵戸ニ砦汝修治し、免、康成及ふ久野三郎左衛門尉  
宗能ニ命し、守らし免給ふ、康成興國寺ヲ城ヲとり、○遷は、

〔寛永諸家系圖傳〕 八十四 牧野康成右馬

天正四年、勝頼ヲさへとして、駿  
州興國寺ヲ城汝ヲまをす、

同十年、駿州長くほをまもす、○上下略、寛政重修諸家譜、野康成譜、十年十一月ニ作ル、

〔武德編年集成〕 二十

六月廿二日、足高山ノ麓、天神川ノ舊壘ヲ築キテ、稻  
垣平右衛門長茂ヲ籠ラル、○後日、渡邊半藏、守綱、是ニ代ル、

七月四日、神君駿陽田中ニ至リ、玉ヒ、當城並采地壹万石ヲ高力與左衛門清  
長ニ賜リ、長久保ノ興國寺ノ城ヲ牧野右馬允康成ニ授ケラレ、沼津ノ三枚  
橋ノ城ヲ修メ築キ、采邑四万石ヲ以テ、松平甚太郎忠吉主○別本、武德編年  
集、忠吉主ナ家  
作ル、并ニ其後見周防守康親ニ賜リ、又天神尾ノ砦ヲ修築シ、伊賀ノ士ヲ籠  
置ル、是ハ豆州○並薙山ノ敵兵ヲ壓ヘン爲ナリ、

〔古文書集〕 十四

甲駿路次往還爲警固、渡邊○守因獄申付候條、任其分別、馳走專一候、爲其朱印遣  
候者也、仍如件、

天正十年七月六日、○寛永諸家系圖傳、六、御朱印

渡邊因獄佐○のへ

壹騎與力之者○

寛永諸家系圖傳、渡邊守傳、コノ次ニ、渡邊  
二、郎左衛門同五郎兵衛同二郎兵衛、河野越  
前、同三右衛門、同新平三郎、田中兵部、同彌右衛  
門、向山又八郎、一瀬平三郎、大垣圖書、土橋大藏、  
藤左衛門、渡邊但馬、内藤彌十郎、同織部、  
藤卷彌八郎、等與力ノ内、藤名チ記セリ、

〔寛永諸家系圖傳〕 百七十五

渡邊守 因獄

同十年、甲州没落乃とき、信長

渡邊守

久野宗能



空陪臣江尻與兵衛尉守をすゝめ、信長おはるへしめんとし、驛物を送る  
 といへども、其事おまゝのち、遠州濱松へ行く、大権現おはるへきまつ  
 系、同年大権現甲州へ御發向乃とき、鈞命より、山路乃案内者となり、御  
 馬先立く供奉し、甲州新府お至る、大権現乃た得せよ、本栖お歸く、かこく  
 甲斐駿河乃さういを守れるしとの台命あり、おまより、はさよ歸らん  
 とし、柏坂峠をまゝ、本栖乃飛脚來り告ぐいとく、小田原勢郡内は亂  
 入、且吉田村西の海村生死（一）の一揆蜂起し、小田原勢は合力し、守を討と  
 らんと議を罷なり、是よよとく、又新府お歸、大久保新十郎をもつ、大権現  
 の台聽は達せ、其時仰ふ、いそ本栖お歸、小田原勢たよび一揆の輩を誅伐  
 せへしとのまひ、且加勢とし、阿部彌一郎を添ら、守と彌一郎と本栖  
 よかへり、小田原勢をよび一揆の者九井の山中へ押込、とく守おまを  
 追討、小田原勢防戦ふ事あはせし、退散せ、守は頭分は首十三級を取、彌  
 一郎は十一級を得たり、其外雜人を討捕事おまるは、いこまあらば、この  
 事大権現の台聽お達し、其戦功を感し給ひ、本領兩所は案堵をよほとほ、同  
 年七月、山中在任の侍十七騎、歩同心二十人、附屬せらば、御朱印お寫まいと

守本栖ノ  
一揆ヲ平

安部信勝

〔寛永諸家系圖傳〕

六十四 安部信勝 彌一郎、生 大権現よつゝのへたごまつ

信勝のつゝ兵杖引る、甲州本巢乃とり出におをむき、夜中にのれをせ  
 めとる、○上下略、寛政重修諸家譜安部信

上杉景勝、佐佐成政ノ、景勝ノ不在ニ乗ジ、兵ヲ越中西濱ニ出サントス  
 ルヲ聞キ、岩井信能等ニ命ジ、春日山ニ入りテ、守備ヲ嚴ニセシム、

〔歴代古案〕

七

急度申遣候、仍佐々内藏助爰元留留守、至于西濱新地可相動之由風説候、彼  
 地利ニ差置者共、又者春日山ニ殘置侍共、何も手堅雖申付候、留守中ニ候間、  
 無心元候、他國へ之覺候條、其元人數召連、一左右次第、春日山へ著陣尤候、謹  
 言、

七月三日

景勝

岩井備中守殿

追而、西濱筋頻ニ火急之子細於有之者、市川、長沼、須田おとへも、其方心  
 得之様ニ申届、人數可相立候、以上、

天正十年七月三日

九〇九

佐佐成政  
景勝ノ留  
守ヲ風説



天正十年七月三日

〔別本歴代古案〕 十五

急度申遣候、新發田表作動成之候、然者隣劔之聞候之條、栗田、市川、長沼衆呼  
越候、吾分事も、乍太儀參陣尤候、先日西濱筋敵致行之由申廻之條、自留守中  
人數之儀申越處、不移時日著府候由、奇特千萬候、其分ニ露芳志之廉候得者、  
彌頼敷候、今般も人先ニ打立肝要候、謹言、

七月九日

景勝

岩井備中守殿

○レコノ文書、上杉年譜十一年ニ收メ  
宛、景勝書狀、及ビ後掲七月六日附、上  
倉治部少輔、岩井信龍宛、景勝書狀ト  
同年ノモノト認メラル  
、ナ以テ、今茲ニ收ム、

〔上杉年譜〕

景勝七

天正十午秋七月三日、信州ノ御仕置トシテ、御出張  
アリ、是ヨリ先、信甲ノ諸士越府ニ志ヲ通シ、公ノ御出馬ヲ相待ケレハ、農夫  
市人モ、其職ヲ安堵セント悦フ事カキリナシ、同日、岩井備中守ニ仰越サル、  
今日御出馬ニ依テ、佐々内藏助定テ今度出張ノ御留守ヲ伺ヒ、西濱ノ地ニ  
相働ヘキト巷説アリ、然ハ彼地利ニ差置ル諸士、并ニ春日山ニ御殘シ置ル  
諸將ニモ、手堅ク御下知アリ、然リト雖モ、御留守中心元ナク思シメサレ、尤

他國ノ聞ヘアレハ、其許ニ差置ル人數召シ連レ、春日山へ著陣スヘキ由嚴  
命此アリ、其御書云、○中略、七月三日附、岩井備中守宛、景勝書

同月六日、越府御留守居ヨリ御陣中へ注進ノ趣ハ、佐々内藏助越中西濱筋  
ニ相働クニ付テ、岩井備中守、上倉治部少輔ニ、人數召具シ、早速府内マテ著  
陣ノ由申上ル、此ニ依テ、備中守、治部少輔ニ御書ヲ以外様ノ者トモ召連レ、  
不日ニ府内マテ著陣ス、誠ニ深志厚情他ニ異ナリ、彌各相談シ、堅固ノ備專  
要也、從軍ノ諸士ニ至ルマテ、別シテ勞煩タルヘキト思シ召サレ、此旨面々  
懇ニ申シ達スヘキ由公命アリ、其御書云、

到于西濱筋、佐々相働之由、春日山留守居之者共申届候付而、外様之者共  
召連、早速府内迄著陣之由、感悦之至候、彌無油斷、各令相談、堅固之備任入  
候、謹言、

猶々、何後同陣之者共大儀之由可申届候、以上、

七月六日

景勝

上倉治部少輔殿

岩井備中守殿

天正十年七月三日



天正十年七月三日

九一二

○景勝、岩井信能ニ命ジ、春日山ニ入りテ、守備ヲ嚴ニセシムルコト、年次詳ナラズ、今姑ク上杉年譜ニ據リテ茲ニ掲グ、

上杉景勝、越後黑瀧城將村山慶綱ニ命ジテ、兵ヲ信濃海野ニ出サシム、

〔歷代古案〕 七

人數如形相揃之由可然候、就之明日至于海野邊、押詰可陣取歟之由尤候、乍去地衆分別次第ニ可相計由、昨日申付候條、各令相談相動肝要候、謹言、

七月三日

景勝

村山善左衛門尉殿

〔上杉年譜〕 二十七

景勝 七

同日、黑瀧ノ將士村山善左衛門慶綱ヨリ、兼テ仰セ付

ラル、如ク衆勢ノ心堅ク誠實ヲ抱キ、忠貞ヲ磨ント欲ルノ間、明四日、信州

海野邊ニ兵革ヲ出シ、陣營ヲ定ントス、彌御下知ヲ伺ヒ奉ルニヨリ、御書ヲ

下サル、其御書云、○中略、七月三日附、村山善左衛門宛、景勝

五日、辛酉池田恒興、京都ニ入り、清水寺ニ陣ス、尋テ、攝津ニ歸ル、

〔兼見卿記〕 四

四

七月五日、辛酉池田紀伊守自攝州上洛、清水寺陣所云々、正

親町黃門來、水無瀨兵衛督自濃州上洛、直ニ來、濃州各對談之義相談了、今

日滯留了、正親町歸京、水無瀨召具者五十人餘在之、

六日、壬戌、池田紀州へ爲禮罷向清水寺、水無瀨兵衛督同道、奏者片切半右衛

門、攝州へ下向之刻也、於門外面會、唯一持參、水無瀨委細被申訖、奏者片切

へ手繩腹帶遣之、○下略、兼和、長岡藤孝ヲ訪フコト

信濃海津在番衆、上杉景勝ニ信濃ノ形勢ヲ報ズ、楠川將綱等モ、亦安曇

郡人質ノコトヲ報ズ、

〔歷代古案〕 六

六

就致信州貝津在番御書被下、忝奉存候、依之預御切書、本望畏入存候、西表先以無事之樣候、相替儀候者、早速可申上候、當地口之御用心、如御誑不被致油斷候、此段可然樣御心得頼入候、恐々謹言、

安田彌九郎

熊元(花押)

新津丹波守

勝資(花押)

水原平七郎

西表ハ無事

海津在番衆

天正十年七月五日

九一三



天正十年七月五日

七月五日

滿家(花押)

九一四

竹俣筑後守

房綱(花押)

齋藤下野守

朝信(花押)

桐澤具繁

桐澤左馬助殿 參御報

〔上杉古文書〕

十五

去晦日御書、信州於小谷之地ニ謹而拜領仕候、然者澤渡方證人可渡之由被申候條、爰元ニ罷越候小谷之證人ニ悉取申候、仁科衆澤渡始證人可相渡之由候、就參上被申ニ未請取不申候、御誼被下訖、在陣可申候、此等之趣可然様ニ御披露所仰候、恐惶謹言、

七月五日

西片次郎右衛門

房家(花押)

楠川出雲守

將綱(花押)

直江與六殿

越中ノ士神保昌國等、上杉景勝ノ出馬ヲ乞フ、

〔歷代古案〕

五

急度致言上候、仍而其國被立御馬、信甲兩州無殘所被屬御手、殊關左表之儀も申寄之由、誠天下之御名譽無申迄候、隨而當國之次第、度々須田相模守殿迄申上候通、定而可被達上聞候、尤早々以使者可申上候處、嚴御口留之儀候間、乍存無其儀候、此國計策等儀、須相申談、不存由斷候、千言万句、盆前ニ於御出馬者、能加迄御一變眼前候、委曲直江與六殿迄申上趣、宜預御披露候、恐々謹言、

七月五日

小嶋六郎左衛門入道

(金委)

寺嶋平九郎

信鎮

唐人式部大輔

親廣

天正十年七月五日

九一五

甲信兩國  
景勝ニ屬  
説ス

越中ノコ  
トハ須田  
トハ親相  
談ス



天正十年七月五日

九一六

鹽井宗八郎

職清

神保近江入道

信包(増也)

齋藤次郎右衛門尉

信和(明)

神保宗次郎

昌國

直江與六殿(補)及ヒ上杉年譜ニ據ル

狩野新介殿

〔上杉年譜〕

景勝七十七

同日

越中ノ諸士

神保宗二郎昌國、齋藤次郎右衛門信

則、神保近江入道増也、鹽井宗八郎職清、唐人式部大輔親廣、寺島平九郎信鎮、

小島六郎左衛門入道全安方ヨリ、樋口與六、狩野新介所マテ書札到來ス、其

趣ニ云、今般御出陣ニ付テ、信甲ノ兩州殘ル所ナク御手ニ屬シ、其上關左表

儀、日ヲ逐テ申寄ノ旨、兵威ノ向フ處、誰カ敵センヤ、當國ノ儀、度々松倉ノ鎮

直江兼續

里村紹巴  
横濱一庵  
藤孝坂本  
ニ行カン  
トス  
忠興入京

六日、戊壬長岡藤孝、美濃ヨリ京都ニ入ル、尋テ、其子忠興モ亦抵ル、

〔兼見卿記〕

四

七月六日

壬戌

中略、兼和、池田恒興ヲ訪フコト、向平等防、

即歸防、直ニ出京及晚歸路之砌、長岡兵部大輔自濃州上洛之間、令飯京、於紹巴所面會、今度仕合粗相談了、直歸宅、

七日、癸亥、中略、兼和、兼治ト參内スルコト、一庵ニ長兵旅宿候間罷向、明日

令下向坂本、丹波五郎左衛門可申禮、奏者無案内候間、長兵書狀之事相談候處、奏者兩人へ折紙遣之、入夜歸宅、兼知、惟住、長秀ヲ訪フコト、

九日、乙丑、長岡與一郎上洛、清少納言滯留候間、罷向面會、向長兵面會、上

十日、丙寅、中略長岡與一郎方へ一折饅頭、五十遣書狀使者了、

上杉景勝、信濃ノ士西片房家ノ本領ヲ復シ、新地ヲ給ス、

天正十年七月六日

九一七



天正十年七月六日

〔歷代古案〕<sup>六</sup>

任理之旨、本領之事者不及申、爲新恩飯田、嶺岸、千國六百貫文之所出置者也、仍如件、

天正十年

七月六日

景勝公御朱印

西片房家

西方次郎右衛門尉殿

○景勝、信濃諸士ノ本領ヲ復シ、或ハ新地ヲ給シ、又能登ノ士島倉泰忠ニ、亡父ノ遺領ヲ與フルコト等、便宜左ニ合致ス、

〔歷代古案〕<sup>三</sup>

近年所持之知行分不可有相違者也、仍如件、

天正十年

七月七日

○上杉年譜、  
五日ニ作ル、景勝

小島内膳亮

小嶋内膳亮殿

〔上杉年譜〕<sup>二十七</sup>

景勝

同月五日、信州ノ士小島内膳亮御味方ニ屬シ、忠信ヲ勵スニ依テ、持來ル采邑相違ナク所務スヘキ旨仰出サル、其御書云、七月五

日附、小島内膳亮宛、景勝書狀ニカ  
ル、前掲歷代古案ニ大抵同シ、

同月七日、信甲ノ士須田對馬守、伊藤丹後守、關屋民部丞、同新左衛門、原豊前守、瀧川久左衛門、大峽兵部、浦野能登守等ハ、兼テ越府ニ屬シ、無二忠節ヲ抽テ、信州ニ御出張アラハ、武命ヲ輕ンシ走廻ルヘキ旨申上ル、此ニ依テ、今般御出軍ノ砌リ、各本領安堵ノ御書出ヲ賜ハル、其御書云、

本領不可有別儀候、但此内井上分須田可被申付候、仍如件、

天正十年

七月七日

景勝

須田對馬守殿

伊藤丹後守殿

關屋民部丞殿

同新左衛門殿

原豊前守殿

瀧川久兵衛殿

大峽兵部少殿

天正十年七月六日



天正十年七月六日

九二〇

近年所持之知行不可有相違候、并本領之由候間、上州本意之上、三島之地、山縣分可出置者也、仍如件、

天正十年

七月七日

景勝

浦野能登守

浦野能登守殿

同日、島倉吉三泰忠、今度忠信ヲ勵スニ依テ、往年亡父孫左衛門能州ニ於テ、謙信公御代ニ充行レタル知行分、相違ナク下サルヘキ間、上條彌五郎ニ相屬シ、別シテ軍忠ヲ致スヘキ旨公命アリ、其御書云、

於能州亡父孫左衛門尉謙信被充行候知行分、不可有相違候、然間上條彌五郎方屬シ、別而可抽奉公事肝要候、仍如件、

天正十年

七月七日

景勝

島倉泰忠

島倉吉三殿

同月十二日、信州ノ士市川庄左衛門、同甚五郎今度御出張ニ付テ、島津淡路

島津忠直

守忠直ニ倚頼シ、忠信ヲ勵シ奉ルニ依テ、襲ヒ來ル采地違變ナク附與セラ、ルヘキ旨御書出アリ、向後彌島津カ舌頭次第走廻リ相稼ヘキ事、肝要ノヨシ公命アリ、其御書云、

吾分事、島津淡路守自好、別而令忠信之間、令赦免、其上近年持來知行遣候、向後萬端之儀、島津舌頭次第走廻、可復先忠事肝要候、仍如件、

七月十二日

景勝

市川庄左衛門

市川庄左衛門殿

田子之郷

吾分事、島津淡路守達而令詔言之間、令免許之間、田子之郷之内、百貫文、石村之内、百貫文遣候條、萬端之儀、島津舌頭次第走廻肝要候也、仍如件、

天正十年

七月十二日

景勝

市川甚五郎

市川甚五郎殿

〔新編會津風土記〕

家六提要之三古文書中村儀右衛門所藏

吾分事、島津淡路守達而之詔言間、免得者赦免、其上近年持來知行遣之候、万

天正十年七月六日

九二一



天正十年七月六日

端之儀、嶋津舌頭次第走廻、可復先忠事肝要候也、仍如件、

九二二

天正十年

七月十二日

關肥前守

關肥前守殿

(景勝)  
朱印  
天○印文  
勝軍地藏利支

〔德富猪一郎氏所藏文書〕

春中忠信之儀候條、可令加恩事雖勿論候、所々相塞故不任心候條、先以本領安堵尤候當國彌本意之上可加扶持者也、仍如件、

天正十

七月十三日

島津常陸

嶋津常陸介殿

景勝  
朱印  
天○印文  
勝軍地藏利支

〔上杉年譜〕

二十七日

(七月)

同月十三日、信州ノ士嶋津常陸介、同淡路守、香坂能登

守春中以來走廻リ、忠節ヲ勵ス、心志誠精常流ニ超過スルニヨリ、今度改テ

歡賞シ、食邑ヲ充行ハル、其御書云、○中略、天正十年七月十三日、附、島津常陸

郎氏所藏文書ニ同シ、

覺

一三百俵

眞羅田

一一百八十俵

山田

一三百五十俵

北尾張部

一三百五十俵

南郷

一六十俵

吉村之内

一一百俵

淺野内堀分

以上

右六箇所者料所分也、

此外

一長沼

一津野

以上

右二箇所者吾分出置者也、

天正十年

七月十三日

景勝

天正十年七月六日

九二三



天正十年七月六日

島津淡路守殿

申越處之一儀於成就者、香坂一跡可充行候、彌可相稼事肝要候、仍如件、

天正十年

七月十三日

景勝

香坂能登守殿

同月十六日、信州ノ士眞島與七郎、今般御出張ノ砌、忠貞ヲ顯スニ付テ、食邑ヲ賜フ、其御書云、

今度額田跡出置候、可致知行者也、仍如件、

天正十年

七月十六日

景勝

眞島與七郎殿

同日、根知在城ノ西方二郎右衛門、楠川出雲守ニ、御書ヲ以テ仰下サル、今般其表ニ於テ、別シテ走廻ル手明ノ輩ニ、其賞ナクンハアルヘカラス、此ニ依テ新恩ヲ充行ルヘシ、兩士詳ニ料簡イタシ宜ク計ラフヘシ、尤群士ヲ抽テ、

一廉忠信ヲ勵ス者ニハ、特ニ褒賞各別タルヘキノ間、公命ノ趣急度申聞ヘキ旨仰出サル、其御書云、

今般於其郡別而走廻、一騎合手明之者共新恩之事、兩人見積可相計候、其内抽自餘、一廉於勵忠信者、猶以望次第身上急度可引立之候、此等之旨、能々可爲申聞候也、仍如件、

天正十年

七月十五日

景勝

西方次郎右衛門殿

楠川出雲守殿

同月二十三日、色部修理大夫長實ヨリ、今般信州御出馬、軍務ノ精功御本意ニ屬シ、御仕置急度仰付ラレ、士民ノ歡抃勝テ計ルヘカラサルヨシ、御陣中へ羽檄ヲ呈ス、

同日、仙仁靱負佐連々御奉公ノ忠勤ニヨリ、本領相違ナク充行ハル、其御書云、

任望之旨、本領不可有相違候、但井上分者須田左衛門尉可被相計者也、仍

天正十年七月六日



天正十年七月六日

如件

天正十年

七月廿三日

景勝

仙仁靱負

仙仁靱負佐殿

鹽田郷

〔歷代古案〕六  
任望之旨、鹽田郷之内下郷、中野、本郷三ヶ村之内、上務千五百貫文所出置者也、仍如件、

天正十年

七月廿四日

景勝

小田切四郎太郎

小田切四郎太郎殿

〔歷代古案〕七

近年被拘來知行之儀者不及申、其上忠信之間、爲新知小根山七百貫文出置之候、然間如何様之者、横合候共、不可有相違者也、仍如件、

天正十年

七月廿五日

景勝御判

大室左衛門尉

大室左衛門尉殿

〔上杉年譜〕二十七

景勝七七

同月二十四日、二十五日、信州ノ士小田切四郎太郎大

室左衛門、西條治部少輔今度御出張ノ處、軍門ニ降り、各忠信ヲ盡シ走廻ルニ付テ、感シ思シメサレ食邑ヲ充行ハル、尤差アリ、其御書云、○中略、七月二

切四郎太郎宛、及ビ七月二十五日附、大室左衛門宛、景勝安堵狀ニカ、ル、前掲歷代古案ニ大抵同シ、

近年被拘來知行之儀者不及申、其上忠信之旨、爲新知洗馬、曲尾出置之候、如何様之者、横合候共、不可有相違者也、仍如件、

天正十年

七月廿五日

景勝

西條治部少輔

西條治部少輔殿

同月二十六日、芋川越前守、同彦三郎春中ヨリ忠信專ニ走廻リ、精功猶餘リ有ルニ依テ、各本領相違ナク充行ハル、越前守ハ勝頼滅亡ノ砌リ、早速牧島城取籠リ、粉骨比類ナク思シ召シ、本領ノ上新知ヲ増シ賜ル、其御書云、

近年持來本領之儀不及申、爲新知香坂一跡、并大岡分出置者也、仍如件、

天正十年

天正十年七月六日



天正十年七月六日

七月廿六日

景勝

九二八

守 芋川越前

〔大日方文書〕

濃〇信

今般就抽忠信者、近年持來本領不可有相違者也、仍如件、

天正十年

七月廿六日

大日方佐渡守殿

朱印

天〇印文、摩利支  
勝軍地藏

大日方佐渡守

〔中牧文書〕

濃〇信

今般就忠信、本領之儀何も不可有相違者也、仍而如件、

天正十年

七月廿七日

日名常陸介殿

朱印

天〇印文、摩利支  
勝軍地藏

日名常陸介

中牧平十殿

平林藤七郎殿

香坂二右衛門尉殿

天正十年七月六日

〔根本原古案〕

以上十八人

九二九

福津平佐衛門尉殿

同十左衛門尉殿

同 囚獄助殿

中牧勘十郎殿

日熊宮内助殿

吉原善左衛門尉殿

小田切源右衛門尉殿

小池三郎二郎殿

村越藤左衛門尉殿

市川民部丞殿

太〇〇〇助殿

林助兵衛殿

同 善十郎殿

若林善右衛門尉殿



天正十年七月七日

九三〇

〔別本歴代古案〕 十五

年來持來本領無相違可令知行者也仍如件

天正十年

七月廿八日○上杉年譜廿六日ニ作ル 景勝

芋川彦三郎殿

七日、癸亥德川家康、駿河大宮ニ抵リ、信濃下條城主下條頼安ヲシテ、兵ヲ  
諏訪ニ出サシム、尋テ、甲斐府中ニ之キ、信濃知久城主知久頼氏ヲシテ、  
マタ諏訪ニ出陣セシム、

〔家忠日記〕 二 七月七日、癸亥家康、大宮、金宮迄著候、

八日、甲子家康、（精進）之、やうし迄、雨降とう留候、

九日、乙丑家康、（精進）之、やうし迄、著陣候、

十日、丙寅、甲善光寺迄、

〔譜牒餘録〕 三十四 小笠原遠江守

急度令啓候仍今日七日、至大宮著陣候、左様ニ候ヘハ、一兩日之内、諷方表へ  
可打出候間、從此方其表在之衆何も被相談、一刻も被差置（差カ）、彼表へ被打出肝

家康諏訪ニ出陣トス

松平家忠、甲斐善光寺ニ抵ル

要候、少も無御油斷様尤候、尙追々可申述候、恐々謹言、

七月七日

御諱御書判

下條（頼安）兵庫助殿

〔知久文書〕 〇信濃

急度令申候、仍我々昨日九、至甲府著馬候、然者急速諷方表へ可打出候、先勢  
悉申付差遣候間、早々其表在之衆被相談、彼郡中へ被押出專一候、爲其申入  
候、恐々謹言、

七月十日

家康（花押）

知久（頼氏）七郎殿

○家康、濱松ヲ發スルコト、本月三日ノ條ニ、頼安、伊奈郡ニ入り、高遠ヲ  
奪フコト、同十五日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔續本朝通鑑〕

二百一十一 正親町二十

七月乙丑（九日）、神君入甲州居新府、武田浪士悉歸服、

〔大三川志〕

十八 七月

九日、甲府ニ到リ給フ、此時神祖野陣シ給ヒ、且麾下ノ將  
士ヨリ僕卒ニ至リ、帶刀ノ鞘ニ、左卷ノ標ヲ附サセラル、然ルニ今日ヨリ武

天正十年七月七日

九三一

先勢ニ諷命ヲ出陣ナ

勝頼ノ遺臣家康ニ歸服ス

家康信玄ノ遺法ヲ用フ